

**令和6年度
自己点検・評価「年次報告書」**

**長崎女子短期大学
自己点検評価室**

【目次】

部 署 名	職 名	氏 名	頁
学長	学長	橋本 剛	1
栄養士コース	コース長	古賀 克彦	3
ビジネス・医療秘書コース	コース長	濱口 なぎさ	6
幼児教育学科	学科長	本村 弥寿子	8
学生部	部長	太田 美代	10
図書館	館長	森 弘行	12
自己点検評価室	室長代理	玉島 健二	14
事務局	局長	高井 達司	16
入試広報室	室長	高井 達司	18
キャリア支援センター	センター長	原田 実輝	20
入試委員会	委員長	橋本 剛	22
FD・SD委員会	委員長代理	玉島 健二	24
IR推進室	室長	桑原 真美	26
教務委員会	委員長	船勢 肇	28
教職課程委員会	委員長	本村 弥寿子	30
教育SS運営委員会	委員長	古賀 克彦	32
研究倫理委員会	委員長	織田 芳人	34
募集・広報委員会	委員長	森口 和美	36
紀要・図書委員会	委員長	中村 浩美	38
学生指導委員会	委員長	太田 美代	40
学生支援委員会	委員長	野田 章子	42
障がい学生支援委員会	委員長	太田 美代	44
寮務委員会	委員長	宮崎 伸一郎	46
学生相談室	室長	小槻 智彩	48
地域連携・子育て支援センター	センター長	太田 智子	50
情報管理センター	センター長	山口 洋	52

職 名	氏 名	頁
学長	橋本 剛	54
教授	森 弘行	55
	織田 芳人	56
	中澤 伸元	57
	松尾 公則	58
	福井 昭史	59
准教授	濱口 なぎさ	60
	本村 弥寿子	61
	中村 浩美	62
	太田 美代	63
	古賀 克彦	64
講師	荒木 正平	65
	船勢 肇	66
	野田 章子	67
	桑原 真美	68
	三原 ミヨ子	69
	山中 慶子	70

職 名	氏 名	頁
講師	小槻 智彩	71
	江頭 万里子	72
助教	太田 智子	73
実習助手	石橋 花琳	74
	有得 結	75
	松尾 知華	76
事務局長兼入試広報室長	高井 達司	77
キャリア支援センター長	原田 実輝	78
事務次長	宮崎 伸一郎	79
事務（教務）	森口 和美	80
〃（教務）	林田 翔太郎	81
〃（学生）	櫻井 縁	82
〃（入試広報・学生）	牧島 愛実	83
〃（会計）	中山 敬喜	84
〃（入試広報・庶務）	森 恵美	85
情報管理センター	山口 洋	86
司書	伊藤 理恵子	87

**令和6年度
「部署別報告書」**

令和6年度 「学長・運営委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：橋本 剛（学長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 全学及び学科・コースの特色づくりの推進 本学全体（学科・コース別を含む）に「特色をつくる」ことへの機運を醸成する。 2. 全学及び学科・コースの特色の発信 マスメディア（特に長崎新聞）における記事・ニュース化を推進する。 3. 地域経済・海外教育機関との連携推進 地域経済を担う企業等との連携、海外の教育機関との連携を進め、本学の存在感の向上を図る。 4. 学生募集活動の活発化 学生募集活動に積極的に取り組み、定員充足に努める。長崎女子高校からの進学者25名以上を目指す。 5. 学生満足度の向上 学生の要望や意見を収集し、目に見える形で改善する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学科・コースごとに「特色」の打ち出しを図るよう、必要に応じ随時指示を出す。地域未来創生コースについては「特色」の社会への浸透を図る。本学全体の特色創造に率先して取り組む。 2. 長崎新聞に随時掲載されるよう、大きめな話題ごとにプレスリリースをとりまとめて行う。 3. インターンシップ協定、海外教育機関との交流協定を軸に締結し、随時プレスに公表する。 4. 「コースリニューアル」「総合型選抜強化」を軸に「変化する短大」を高校に働きかけ、また高校以外の地域経済（出口側）にも浸透させる。 5. 学生からの要望について、1%でも進展するよう多様な手法を検討する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・B・ <u>C</u> ・D」 地域未来創生コースについては、かなり特色のある形にできたと考えるが、「コンセプトのメッセージ」づくりが十分でないことから浸透が図られていない。他のコース・学科で進展がない。 2. 自己評価「 <u>S</u> ・A・B・C・D」 長崎新聞では継続的に取り上げられ、長崎女子短期大学の登場が目立つ1年だった。 3. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 企業との連携は年度末にインターンシップ協定をいくつか締結するほか、海外との教育機関との連携の前提となる、インドネシアに拠点のあるAAIグループと連携協定を締結。後者はメディアにも掲載。 4. 自己評価「S・A・B・ <u>C</u> ・D」 高校に十分浸透したとはいえ、改善が必要。 5. 自己評価「S・A・B・ <u>C</u> ・D」 取り組んだが、十分ではない。学生の要望を拾える仕組み
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
個別の1～5を改善するというよりも、いずれにしても地域未来創生コースの設置など新たな取り組みを高校や地域社会に浸透させることが必要。授業のあり方などを含めマスメディアに取り上げてもらい、それを高校にフィードバックする。

令和6年度 学長・運営委員会 年次報告

Plan 計画

1. 全学及び学科・コースの特色づくりの推進
本学全体（学科・コース別を含む）に「特色をつくる」ことへの機運を醸成する。
2. 全学及び学科・コースの特色の発信
マスメディア（特に長崎新聞）における記事・ニュース化を推進する。
3. 地域経済・海外教育機関との連携推進
地域経済を担う企業等との連携、海外の教育機関との連携を進め、本学の存在感の向上を図る。
4. 学生募集活動の活発化
学生募集活動に積極的に取り組み、定員充足に努める。長崎女子高校からの進学者25名以上を目指す。
5. 学生満足度の向上
学生の要望や意見を収集し、目に見える形で改善する。

Do 実行

1. 学科・コースごとに「特色」の打ち出しを図るよう、必要に応じて随時指示を出す。地域未来創生コースについては「特色」の社会への浸透を図る。本学全体の特色創造に率先して取り組む。
2. 長崎新聞に随時掲載されるよう、大きめな話題ごとにプレスリリースをとりまとめる。
3. インタラクションシップ協定、海外教育機関との交流協定を軸に締結し、随時プレスに公表する。
4. 「コースリニューアル」「総合型選抜強化」を軸に「変化する短大」を高校に働きかけ、また高校以外の地域経済（出口側）にも浸透させる。
5. 学生からの要望について、1%でも進展するよう多様な手法を検討する。

Act 改善

1. 自己評価「S・A・B・**C**・D」
地域未来創生コースについては、かなり特色のある形にできたと考え、[コンセプトのメッセージ]づくりが十分でないことから浸透が図られていない。他のコース・学科で進展がない。
2. 自己評価「**S**・A・B・C・D」
長崎新聞では継続的に取り上げられ、長崎女子短期大学の登場が目立つ1年だった。
3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
企業との連携は年度末にインタラクションシップ協定をいくつか締結するほか、海外との教育機関との連携の前提となる、インドネシアに拠点のあるAAIグループと連携協定を締結。後者はメディアにも掲載。
4. 自己評価「S・A・B・**C**・D」
高校に十分浸透したとはいえず、改善が必要。
5. 自己評価「S・A・B・**C**・D」
取り組みが、十分ではない。学生の要望を拾える仕組み

Check 検証

1. 個別の1～5を改善するというよりも、いずれにしても地域未来創生コースの設置など新たな取り組みを高校や地域社会に浸透させることが必要。授業のあり方などを含めマスメディアに取り上げてもらい、それを高校にフィードバックする。

令和6年度 「栄養士コース」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	古賀 克彦（コース長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. コース職員が協働し、①選ばれる短期大学づくり、②満足度の高い短期大学づくり、③地域の発展に貢献する短期大学づくり、④更なる教育の質向上を目指した短期大学づくりの4項目の努力目標に、チームとして取り組む。 2. 長崎食育学やゼミナール活動、公開講座、等を通じて、地域の食に関する学びを深め、社会貢献活動に取り組む。 3. 専門職としての力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者60%以上、及びA認定50%以上を目指す。 4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 定期的なコース会議の開催を継続して実施し、ICT の活用を図り、目標達成に向けて円滑な意思の疎通や協働体制の維持に努める。 2. 卓袱料理試食会や料理コンテスト(プレゼミナール)などの取り組みで長崎食育学の学びを深めるとともに、公開講座や対外的な料理教室等で社会貢献活動にも取り組む。そして、「ゼミナール活動発表会」を実施して活動のまとめを行う。 3. 栄養士の科学、基礎数理、国語表現法の 3 科目とスタートアップセミナーを中心に、教育サポートスタッフを活用し基礎学力の向上を目指す。また、昨年度に引き続き栄養士スキルアップ特講や e ラーニングを活用し自ら学ぶ姿勢を支援し、栄養士実力認定試験等の目標達成を目指す。 4. 就職講座等一人ひとりを大切にしたきめ細かな指導を行い、学生の卒業後の夢を叶えるための後押しとしてキャリア支援の充実を図るとともに、公開講座やオープンキャンパス、中高生を対象とした初めての料理レッスン(料理教室)などに学生が活躍できる場を作り、自らの成長を実感できる機会を作る。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」	ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にし、意思の疎通を図った。また会議は対面を基本としたが、必要に応じ WEB 会議システムも導入し、資料等はペーパーレスを基本とし ICT 技術の活用も行われた。
2. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」	令和6年7月26日には、長崎の伝統料理である卓袱料理の試食会を実施した。本取り組みは、長崎の食文化を理解し、継承することを目的としており、学生たちは調理や運営に積極的に関わった。また、この試食会の様子は令和6年7月29日付の長崎新聞に掲載され、広く紹介された。プレゼミナールでは、九州農政局が長崎食育学の中で実施した「みどり戦略の勉強会」での学びを実践する場として、「おいしいお米料理コンテスト」を開催した。本コンテストでは、学生たちが工夫を凝らしたレシピを考案し、長崎の食材を活かした創意工夫あふれる料理が披露された。また、公開講座では、幼稚園児や一般の方を対象に食の大切さを伝える機会を設けた。学生たちは調理補助や説明役として活躍し、学んだ知識を実践する貴重な場となった。地域の方々との交流を通じて、食育の重要性を広めることができた。さらに、これらの活動の成果を発表し振り返る場として、「ゼミナール活動発表会」を実施した。学生たちは各活動の成果をまとめ、プレゼンテーションを行い、学びを共有した。本発表会は、学内外の参加者から高い評価を得る機会となった。
3. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」	栄養士実力認定試験の結果、短大平均の得点を上回る者が32名中16名(50.0%)と目標の60%には届かなかった。A判定の学生も同じく16名(50.0%)で、こちらは目標に到達した。あと1～3点でA判定となる学生が4名おり、C判定の学生が1名(3.1%)と、前年度に比べ全体的に成績は向上した。しかしながら近年、成績不振の学生が増加しているため、栄養士実力認定試験対策と併せて学習意欲の維持と、学修支援への取組の継続する必要がある。
4. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」	卒業時調査の「本学に入学して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は75.7%で残り24.2%はどちらでもないと回答していた。目標の90%には届かなかったが、否定的な回答は無く、自由記述では、ほとんどの学生が短大生活を有意義なものとしてとらえる意見だった。

ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。

1. 教育の質向上と学生満足度の向上

【課題】満足度90%の目標未達成：卒業時調査では肯定的評価が75.7%で、目標の90%には届かなかった。「どちらでもない」と回答した学生が24.2%おり、彼らの満足度を上げるための具体的な施策が必要。

【改善案】在学生アンケートの活用、面談の強化：各種在学生アンケートや学生との面談等により得られた学生の声をより詳細に分析し、何が満足度に影響しているのかを明確化し、カリキュラムやサポート体制の改善につなげる。

2. 学力向上対策

【課題】栄養士実力認定試験の目標未達成：短大平均を上回る者は50%と目標の60%には届かなかったが、A判定50%は達成。近年、成績不振の学生が増加しているため、継続的な学習支援が不可欠。

【改善案】生成不審の学生に対する指導強化：成績不振の学生向けに、個別指導や学習計画の強化を検討する。また、あと数点でA判定になる学生へのフォローも合わせて実施。

3. 学生の自己肯定感向上

【課題】教員の評価と比較し、自己肯定感の低い学生が多い：自分の成長を実感しにくい」「学んだことに自信が持てない」と感じる学生が多い。また他者と比較してしまい、自己評価が低くなる傾向がある。

【改善案】自らの成長を認識できる仕組みの導入：授業内での小テスト等を増やすなど、成功体験を積み重ねることができる仕組みを導入する。また教員が学生の努力や成果を評価し、学生にフィードバックする仕組みを作る。さらにゼミナール発表会等、人の前で発表する機会を充実させ、学生が自分の成長を発表できる場を提供。

4. キャリア支援と就職満足度の向上

【課題】就職活動の開始が遅い学生や、未活動の学生の存在：2年後期になっても就職活動を始めない学生が一定数おり、就職意識の低さが見られる。

【改善案】就職支援の充実：普段の授業でも栄養士の働き方や就職活動について折に触れて説明し、就職活動をイメージしやすくする。また、卒業生のお話を聞く機会を設けたり、2年次に行われる学外実習を有効活用する。また動き出しが遅い学生に対しては早期に面談を行うなど、支援体制を強化する。

令和6年度 栄養士コース 年次報告

Plan 計画

1. コース職員が協働し、4項目の努力目標にチームとして取り組む。
2. 長崎食育学やゼミナール活動、公開講座、対外的な料理教室等を通じて、地域の食に関する学びを深め、社会貢献活動に取り組む。
3. 専門職としての基礎的な力を養うため、栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者60%以上、及びA認定50%以上を目指す。
4. 学生の自己肯定感を高め、「選択してよかった」と思えるコース運営を行い、学生の満足度90%(肯定的な評価の合計)を目指す。

Do 実行

1. 定期的なコース会議の開催、ICTの活用を図り、目標達成に向けて意思の疎通や協働体制の維持に努める。
2. 卓袱料理試食会や料理コンテストなどの取り組みで長崎食育学の学びを深めるとともに、公開講座や対外的な料理教室等で社会貢献活動にも取り組む。
3. 栄養士の科学、基礎数理、国語表現法の3科目を中心に、TA・PSの活用、eラーニングとの実施により、自ら学ぶ姿勢を支援し、目標達成を目指す。
4. 学生毎にきめ細かな指導を行い、キャリア支援の充実を図るとともに、公開講座やOC等学生が活躍できる場を作り、自らの成長を実感できる機会を作る。

Act 改善

1. 教育の質向上と学生満足度の向上: 各種在学生アンケートや学生との面談等により得られた学生の声をより詳細に分析し、何が満足度に影響しているのかを明確化し、カリキュラムやサポート体制の改善につなげる。
2. 学力向上対策: 成績不振の学生向けに、個別指導や学習計画の強化を検討する。
3. 学生の自己肯定感向上: 教員が学生の努力や成果を評価し、学生にフィードバックする仕組みを作る。さらにゼミナール発表会等、人の前で発表する機会を充実させ、学生が自分の成長を発表できる場を提供。
4. キャリア支援と就職満足度の向上: 卒業生の話を聞く機会を設けたり、2年次に行われる学外実習を有効活用する。また動き出しが遅い学生に対しては早期に面談を行うなど、支援体制を強化する。

Check 検証

1. ほぼ毎週コース会議を開催し、報告・連絡・相談を密にし、意思の疎通を図った。またWEB会議システムも導入し、資料等はペーパーレスを基本としICT技術の活用も行われた。
2. 本年度も卓袱料理の試食会を実施したこの試食会の様子は長崎新聞にも掲載された。プレゼミナールでは、「おいしいお米料理コンテスト」を開催、長崎の食材を活かした創意工夫あふれる料理が披露された。また、公開講座では、幼稚園児や一般の方を対象に食の大切さを伝える機会を設けた。これらの活動の成果を発表し振り返る場として、「ゼミナール活動発表会」を実施した。
3. 栄養士実力認定試験は前年度に比べ全体的に成績は向上したが、今後も学修支援への取組の継続する必要がある。
4. 卒業時調査の「本学に入學して学んだことをどう思うか」という項目における肯定的評価は75.7%で残り24.2%はどちらでもないと回答していた。目標の90%には届かなかったが、否定的な回答は無く、自由記述では、ほとんどの学生が短大生活を有意義なものとしてとらえる意見だった。

令和6年度 「ビジネス・医療秘書コース」 年次報告書	
区分：	学科コース ・委員会等・事務局等・教職員個人・その他（ ）
氏名：	濱口 なぎさ（コース長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 令和7年度のコース再編に向けて3つのポリシー、カリキュラム等の具体化を図る。 2. 外部の人材や事業所との連携・協力による公開講座の実施や、産学連携による商品開発を行うことでコースの特色化を図る。 3. 実践型教育プログラムの充実と、学生たちのプレゼンテーション能力の向上を図る。 4. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行う。学生の受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内で情報を共有し、無事に卒業するまできめ細かく支援する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 8月を目途に、3つのポリシーとカリキュラム案を確定させる。 2. 外部講師による公開講座を2講座実施する。後期のビジネスプランニングでは、(株)クリーン・マット担当者の指導の下で、アロマ商品シリーズ第3弾としてアロミストの商品開発と販売会を行う。 3. 各学期末に1・2年生合同の発表会を実施する。6月中に「学習ポートフォリオ」を活用しPDCAサイクルに沿った目標達成を支援するシステムを構築し、運用する。 4. 毎月2回前後のコース会議での情報交換と、随時メールによる情報共有によって課題を抱えた学生の早期発見や支援を行う。2年生については就活状況の把握と支援を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 3つのポリシーは新コースの内容に合わせて修正できた。カリキュラムについては学長、教務課と共に検討し、担当者は適任者を学長に選任していただいたが、新しい科目については内容が固まっていないものもありシラバス作成が滞った。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 外部講師による公開講座を2講座実施できた。参加者の満足度は高かったが広報・集客に課題が残った。アロミストの商品開発と販売会については外部講師による指導のもとで順調に実施できた。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 各学期末の合同発表会を実施した。「学習活動自己評価シート」を作成し、1・2年それぞれ各自で目標を設定して取り組ませる予定であったが、特に1年生についてはきめ細かな指導ができず中途半端に終わったしまった。2年生についても実践型教育プログラムのベースとして「学習活動評価シート」を活用するように働きかけたが、不十分であった。 4. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 年度当初から教員1名が休職状態となったため、コース教員3名で協力して学生対応を行った。残念ながら後期に2年生1名が休学、1年生1名が退学となったが、予兆がなく突然の申し出であり、理由も家庭内の問題やメンタル面など教員としての対応が難しかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 新コース長の下で、地域未来創生コースの知名度アップを図り、コースの特色を明確にし、学生募集につながる効果的な広報活動を行う 2. 地域未来創生コースにおいても「学習活動自己評価シート」を活用し、入学時から「実践型教育プログラム」による自己実現を行うよう指導する 3. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行う。学生の受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内で情報を共有し、無事に卒業するまできめ細かく支援する 4. 外部人材や事業所を活用した商品開発や公開講座を継続し、教員・学生と地域の方々との交流の機会を設け、地域の発展に貢献する。	

令和6年度 ビジネス・医療秘書コース 年次報告

Plan 計画

1. 令和7年度のコース再編に向けて3つのポリシー、カリキュラム等の具
体化を図る。
2. 外部の人材や事業所との連携・協力による公開講座の実施や、産学
連携による商品開発を行うことでコースの特色化を図る。
3. 実践型教育プログラムの充実と、学生たちのプレゼンテーション能力の
向上を図る。
4. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行う。学生の
受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内で情報を共有し、無事
に卒業するまできめ細かく支援する。

Do 実行

1. 8月を目的に、3つのポリシーとカリキュラム案を確定させる。
2. 外部講師による公開講座を2講座実施する。後期のビジネスプランニン
グでは、(株)クリン・マット担当者の指導の下で、アロマ商品シリーズ第
3弾としてアロマミストの商品開発と販売会を行う。
3. 各学期末に1・2年生合同の発表会を実施する。6月中旬に「学習ポート
フォリオ」を活用しPDCAサイクルに沿った目標達成を支援するシステム
を構築し、運用する。
4. 毎月2回前後のコース会議での情報交換と、随時メールによる情報共
有によって課題を抱えた学生の早期発見や支援、2年生については就
活状況の把握と支援を行う。

Act 改善

1. 新コース長の下で、地域未来創生コースの知名度アップを
図り、コースの特色を明確にし、学生募集につながる効果
的な広報活動を行う
2. 地域未来創生コースにおいても「学習活動自己評価シート」
を活用し、入学時から「実践型教育プログラム」による自己
実現を行うよう指導する
3. 課題を抱えた学生への対応はコース教員全員で協力して行
う。学生の受講態度等に目を配り、些細なことでもコース内
で情報を共有し、無事に卒業するまできめ細かく支援する
4. 外部人材や事業所を活用した商品開発や公開講座を継続
し、教員・学生と地域の方々との交流の機会を設け、地域
の発展に貢献する

Check 検証

1. 3つのポリシーは新コースの内容に合わせて修正できた。カリキュラムに
ついては学長、教務課と共に検討し、担当者は適任者を学長に選任して
いただいたが、新しい科目については内容が固まっていなかったものもあり
シラバス作成が滞った。
2. 外部講師による公開講座を2講座実施できた。参加者の満足度は高
かったが広報・集客に課題が残った。アロマミストの商品開発と販売会
については外部講師による指導のもとで順調に実施できた。
3. 各学期末の合同発表会を実施した。「学習活動自己評価シート」を作成
し、1・2年それぞれ各自で目標を設定して取り組ませる予定であったが、
特に1年生についてはきめ細かな指導ができず中途半端に終わったし
まった。2年生についても実践型教育プログラムのベースとして「学習活
動評価シート」を活用するよう働きかけたが、不十分であった。
4. 年度当初から教員1名が休職状態となったため、コース教員3名で協力し
て学生対応を行った。残念ながら後期に2年生1名が休学、1年生1名が
退学となったが、予兆がなく突然の申し出であり、理由も家庭内の問題
やメンタル面など教員としての対応が難しかった。

令和6年度 「幼児教育学科」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	本村 弥寿子（学科長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 保育実践力育成及び向上のための取り組みのさらなる充実を図る。 2. 本学科の専門性を活かした地域貢献活動に大いに取り組み、地域に信頼される学科を目指す。 3. 特別な配慮が必要であったり学習意欲が低下していたりなど課題を抱える学生への対応を丁寧に行い、学科全体での支援体制を強化する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 附属幼稚園での体験学習をはじめとした幼大連携の取り組みを模索し、学生の子ども理解とそれを踏まえた実践力向上を目指す。 2. ゼミナールや各教員の専門性を活かし、公開講座及びボランティア活動等への積極的な参加を試みる。 3. 月2回の学科会議に加え必要に応じて臨時の会議を設けることにより、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 1年次前期の附属幼稚園体験学習は、コロナ禍が終息したことから、3回幼稚園に行くことができた。そのうち1回は園児とのかかわりを取り入れられ、さらに、3回目には、学生が絵本の読み聞かせを実践する機会を設ける試みを取り入れた。また、1年生対象とした附属幼稚園での「保育体験」に5名が参加した。9月に実施した「短期大学生調査」において、“免許・資格に関連する演習・実習・実験”に関する1年生のうち、とても満足・やや満足と答えた割合は95.4%であり、満足度が高かった。これをきっかけに、5名の1年生が積極的に附属幼稚園での“保育体験”に参加している。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 5名の基幹教員が、ゼミナールにおいてボランティア活動に積極的に取り組んだ。また、基幹教員2名が公開講座を開いた際には、それぞれのゼミナール所属学生が手伝いや保育実践を行う機会を設けた。公開講座はそれぞれ14組と8組の親子が参加し、自由記述アンケートで全員高評価であった。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 合理的配慮調査書に「配慮を必要」としている学生に対し、入学・進級当初は教員から特に声掛けを行ったり見守りを行ったりし、些細な気付きを学科会議で出し合った。これにより、前期は心身の不調を訴えていた学生も後期は不調を訴えることがなくなり、2年間の休学から後期に復学した学生も順調に学校生活を営むことができていた。さらに、年度途中での休学・退学者は3名及び1名であり、前年比の半数と非常に少なかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 1年次前期の附属幼稚園での体験学習は、一層の充実を図る。また、2年生対象に試みた附属幼稚園での「保育アルバイト」や「保育体験」など学生が気軽に参加できる取り組みを考え、幼大連携を図る。 2. 幼児教育学科教員の専門性を活かした公開講座開講の機会を多く設けたりボランティアに積極的に参加したりすることで、地域貢献に取り組む。 3. 学科教員の学生理解の共有に努め、支援体制の一層の強化を図る。	

令和6年度 幼児教育学科 年次報告

Plan 計画

1. 保育実践力育成及び向上のための取り組みのさらなる充実を図る。
2. 本学科の専門性を活かした地域貢献活動に大いに取り組み、地域に信頼される学科を目指す。
3. 特別な配慮が必要であったり学習意欲が低下していたりなど課題を抱える学生への対応を丁寧に行い、学科全体での支援体制を強化する。

Do 実行

1. 附属幼稚園での体験学習をはじめとした幼大連携の取り組みを模索し、学生の子どもの理解とそれを踏まえた実践力向上を目指す。
2. ゼミナールや各教員の専門性を活かし、公開講座及びボランティア活動等への積極的な参加を試みる。
3. 月2回の学科会議に加え必要に応じて臨時の会議を設けることにより、課題を抱えた学生の早期発見と課題解決を目指す。

Act 改善

1. 1年次前期の附属幼稚園での体験学習は、一層の充実を図る。また、2年生対象に試みた附属幼稚園での「保育アルバイト」や「保育体験」など学生が気軽に参加できる取り組みを考え、幼大連携を図る。
2. 幼児教育学科教員の専門性を活かした公開講座開講の機会を多く設けたりボランティアに積極的に参加したりすることで、地域貢献に取り組む。
3. 学科教員の学生理解の共有に努め、支援体制の一層の強化を図る。

Check 検証

1. 体験学習は、コロナ禍が終息したことから、3回幼稚園に行くことができた。また、1年生対象とした附属幼稚園での「保育体験」に5名が参加した。「短期大学生調査」において、“免許・資格に関連する演習・実習・実験”に関する1年生のうち、とても満足・やや満足と答えた割合は95.4%であり、満足度が高かった。これをきっかけに、5名の1年生が積極的に附属幼稚園での“保育体験”に参加している。
2. 5名の基幹教員が、ゼミナールにおいてボランティア活動に積極的に取り組み組んだ。公開講座はそれぞれ14組と8組の親子が参加し、自由記述アンケートで全員高評価であった。
3. 「配慮を必要」としている学生に対し、入学・進級当初は教員から特に声掛けを行ったり見守りを行ったりし、気付きを学科会議で出し合った。これにより、前期は心身の不調を訴えていた学生も後期は不調を訴えることがなくなり、2年間の休学から後期に復学した学生も順調に学校生活を営むことができていた。さらに、年度途中での休学・退学者は3名及び1名であり、前年比の半数と非常に少なかった。

令和6年度 「学生部」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：太田 美代（学生部長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。 3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生支援委員会と緊密に情報共有を図り、スポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。 3. 学生指導委員会と情報共有をしていく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 学生支援委員会からは、毎回の会議の議事内容を連絡してもらい、様子を把握することができた。可能な範囲で円滑な運営に協力したが、学生部として関わる案件は特になかった。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 障がい学生支援委員会の円滑な運営に努めた。今年度は、障がい学生の支援と学生指導にまたがる事案が発生したため、「学生問題対応委員会」として、外部の専門家の協力を得てケース会議を開き、対応に当たった。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 学生部として関わる案件が特になかった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。 2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、障がい学生支援の体制整備に協力し、円滑な運営に努める。 3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。

令和6年度 学生部 年次報告

Plan 計画

1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。
3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営を行う。

Do 実行

1. 学生支援委員会と緊密に情報共有を図り、スポーツフェスタや弥生祭等の円滑な運営に協力していく。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしていく。
3. 学生指導委員会と情報共有をしていく。

Act 改善

1. 学生支援委員会と情報共有をしながら、可能な範囲で円滑な運営に協力する。
2. 障がい学生支援委員会と緊密に情報共有をしながら、障がい学生支援の体制整備に協力し、円滑な運営に努める。
3. 学生指導委員会と緊密に情報共有をしながら、円滑な運営に努める。

Check 検証

1. 学生支援委員会からは、毎回の会議の議事内容を連絡してもらい、様子を把握することができた。可能な範囲で円滑な運営に協力したが、学生部として関わる案件は特になかった。
2. 障がい学生支援委員会の円滑な運営に努めた。今年度は、障がい学生の支援と学生指導にまたがる事案が発生したため、「学生問題対応委員会」として、外部の専門家の協力を得てケース会議を開き、対応に当たった。
3. 学生部として関わる案件が特になかった。

令和6年度 「図書館」 年次報告書
区分： 学科専攻 ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：森 弘行（図書館長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。 2. 学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 機関リポジトリの導入に取り組む。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書の除籍を行う。 2. 学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントなどの実施。 3. 機関リポジトリの導入に向けての、調査・研究を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 経年劣化蔵書および未利用蔵書、約 200 冊を除籍。 地震の際の安全確保のため、書架から書籍が落下するリスクの低減対策として落下防止シールの設置を段階的に行っている。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 長崎県大学図書館協議会の合同イベントとして 11/1 から 11/30 まで「ボードゲームで盛り上がり！」を実施。 第 110 回全国図書館大会長崎大会に運営スタッフとして参加。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 機関リポジトリの利用申請を行った。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 安全に図書館を利用してもらうため、書庫内のスペース確保・狭隘化対策に努める。経年劣化の寄贈本・製本雑誌など動きのない図書を整理する。 地震の際の安全確保のため、書籍落下リスクの低減対策として落下防止シールの設置を引き続き段階的に行う。 2. 快適に図書館を利用してもらうため、図書館のレイアウトやサービスなどについて、学生にアンケートや聞き取りを行い、改善点の参考にして、可能なものから実行していく。 3. 機関リポジトリの承認→利用開始を目指す。

令和6年度図書館年次報告

Plan 計画

1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、図書館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。
2. 学生・教職員のニーズに合わせて臨機応変に業務やサービス内容を改善していく。図書館でできる新しい企画を考え、図書館利用の促進・活性化につなげる。
3. 機関リポジトリの導入に取り組む。

Do 実行

1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書の除籍を行う。
2. 学生選定図書や長崎県大学図書館協議会の合同イベントなどの実施。
3. 機関リポジトリの導入に向けての、調査・研究を行う。

Act 改善

1. 安全に図書館を利用してもらうため、書庫内のスペース確保・狭隘化対策に努める。経年劣化の寄贈本・製本雑誌など動きのない図書を整理する。
2. 地震の際の安全確保のため、書籍落下リスクの低減対策として落下防止シールの設置を引き続き段階的に行う。
3. 快適に図書館を利用してもらうため、図書館のレイアウトやサービスなどについて、学生にアンケートや聞き取りを行い、改善点の参考にして、可能なものから実行していく。

Check 検証

1. 経年劣化蔵書および未利用蔵書、約200冊を除籍。
地震の際の安全確保のため、書架から書籍が落下するリスクの低減対策として落下防止シールの設置を段階的に行っている。
2. 長崎県大学図書館協議会の合同イベントとして11/1から11/30まで「ボードゲームで盛り上がりましょう！」を実施。
第110回全国図書館大会長崎大会に運営スタッフとして参加。
3. 機関リポジトリの利用申請を行った。

令和6年度 「自己点検評価室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	玉島 健二（室長代理）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教学マネジメント体制の構築について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 教学マネジメント体制の構築について ①学修成果の評価項目（10の力）、評価基準（ルーブリック）、教育システム総覧の再検討 ②アセスメントプランの再構築、およびIRデータの体系化、可視化、解釈、活用法の手引き書の検討 ③学務システムの修正（成績の入力画面・到達度の表示画面、ディプロマサプリメントなど） ④教務委員会、IR推進室、FD・SD委員会と連携した活動（学修成果と満足度を向上させるための検討） ⑤教学マネジメント体制（内部質保証）、エンロールメントマネジメント体制の構築とフローチャートの作成 2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について ⑥私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成 ⑦認証評価勉強会の実施（8月と3月の定例SD研修会にて） ⑧令和6年度自己点検・評価の外部評価委員会の開催 3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について ⑨令和6年度自己点検・評価年次報告書の作成 ⑩令和6年度自己点検・評価報告書（簡易版）の作成 ⑪第4期認証評価に向けた根拠資料の作成、および学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ <u>B</u> ・C・D」 ①に関しては令和7年度からスタートする地域未来創生コースの三つの方針について検討を行い、改訂した。 ②に関しては基準協会が実施する卒業生調査等のアセスメントを実施したが、IRデータの体系化は不十分であり、次年度以降も継続して行うこととする。③に関してはシステムの運用に関する手続き等について業者と共有を図った。④に関してはIR推進室長と定期的に打ち合わせを行い、課題の点検を行った。 2. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 ⑦の3月の研修会は他の内容を実施したことでできなかったが、⑥及び⑧に関しては、予定通り実施できた。なお、⑥については、久しぶりに採択され、追加の補助金を獲得することができた。 3. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 ⑨に関しては予定通り関係教職員に作成してもらった。⑩の取組は初の試みであったが、事前に研修会を実施し、執筆担当者を決めて取り組んだので、困難を伴ったが、完成にこぎつけた。⑪に関しては、根拠資料の作成は⑩との関連で手探り状態の中で行った。学外のFD・SD研修会にはあまり参加できなかった。ただし、基準協会が主催するALO対象の研修会（オンライン）には2名が参加した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
次年度はいよいよ第4期認証評価に向けた取組を加速化させる重要な時期に入る。次年度は上記のDOの「1」で掲げた「教学マネジメント体制の構築」に係る取組が重要となる。内部質保証に係るアセスメントプランをはじめ、わかりやすい体系図を作成して認証評価に備えることとする。	

令和6年度自己点検評価室 年次報告

Plan 計画

1. 教学マネジメント体制の構築に関し、実行に掲げた目標達成に向けて計画を遂行する。
2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会に関し、実行に掲げた目標達成に向けて計画を遂行する。
3. 自己点検評価報告書、根拠資料に関し、実行に掲げた目標達成に向けて計画を遂行する。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
①は令和7年度から始まる地域未来創生コースについて、検討し、改訂した。②は基準協会が実施する卒業生調査等のアセスメントを実施したが、データの体系化は不十分である。③はシステムの運用手続きについて業者との共有を図った。④はIR推進室長と打ち合わせを行い、課題の点検を実施した。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
⑦の3月の研修会は他の内容を実施したことと、できなかったが、⑥及び⑧に関しては予定通り実施できた。なお、⑥については、久しぶりに採択された。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
⑨は予定通り実施できた。⑩の取組は初の試みであったが、事前に研修会を実施し、執筆担当者を決めて取り組んだので、完成にこぎつけた。⑪の根拠資料の作成は、⑩との関連で手探り状態の中で取り組んだ。なお、学外のFD・SD研修会にはあまり参加できなかったが、基準協会が主催するALO対象の研修会には、オンラインで参加できた。

Do 実行

1. 教学マネジメント体制の構築について
①学修成果の評価項目（10の力）、評価基準（ルーブリック）、教育システム総覧の再検討
②アセスメントプランの再構築、およびIRデータの体系化、可視化、解釈、活用方法の手引き書の検討
③学務システムの修正（成績の入力画面・到達度の表示画面、ディプロマサブリメントなど）
④教務委員会、IR推進室、FD・SD委員会と連携した活動（学修成果と満足度を向上させるための検討）
⑤教学マネジメント体制（内部質保証）、エンロールメントマネジメント体制の構築とフローチャートの作成
2. 改革総合支援事業、認証評価、外部評価委員会について
⑥私立大学等改革総合支援事業タイプ1の根拠資料の作成
⑦認証評価勉強会の実施（8月と3月の定例SD研修会にて）
⑧令和6年度自己点検・評価の外部評価委員会の開催
3. 自己点検・評価報告書、根拠資料について
⑨令和6年度自己点検・評価年次報告書の作成
⑩令和6年度自己点検・評価報告書（簡易版）の作成
⑪第4期認証評価に向けた根拠資料の作成、および学外のFD・SDへの参加による先進事例の情報収集

Act 改善

次年度は、いよいよ第4期認証評価に向けた取組を加速化させる重要な時期に入る。令和7年度は、実行で掲げた「教学マネジメント体制の構築」に係る取組が重要となる。内部質保証に係るアセスメントプランをはじめ、わかりやすい体系図を作成して認証評価に備えることとする。

令和6年度 「事務局」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：高井 達司（事務局長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 教職員の人事計画について、中期的な展望をもって取り組むべく法人本部に働きかけたい。 2. 学長運営方針を常に意識させ、その実行を最優先させる。 3. きめ細やかな学生支援活動に努めることで、満足度の高い短大作りの一翼を担う。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 教職員の退職に伴う対応が、当座しのぎの対策に追われることが多い。特に教員の場合は資格審査を問われることもあるなど、その対応に時間を有する場合が多い。また事務職員の人事配置が硬直化している。少ない要員で幅広く業務に対応することが可能となるよう、人事異動の活用を法人本部に働きかけたい。 2. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティーが求められる。自身も含めその体現者となる。 3. 学生が相談しやすい事務局の雰囲気作りを常に意識することで、事務職員に対する高い信頼関係を醸成する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 教員退職者3名の後任につき、内2名は問題なく内定に至ったが、残す1名が結果として次年度以降の先送りとなった。当面非常勤講師の採用で対応に当たりたいが、次年度も後任者探しを継続したい。事務局職員についても、産休・育休で欠員となった部署を配置換え等で対応し遅滞なく業務を遂行した。 2. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 業務多忙を理由に十分な学長補佐が出来なかった。学長の事務補助を行う体制づくりに課題が残された。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 学生アンバサダーをはじめ各種イベントの学生スタッフとの指導・交流を通し、学生の主体性を尊重し成長を期待するような対応に心掛けた。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 自身の退職時に円滑な業務移管が可能とされるよう、その準備に当たりたい。 2. 教員組織の中に、学長補佐業務を担当する人材配置を検討する。 3. 学生アンバサダーを中心とした交流会を実施する。

令和6年度事務局 年次報告

Plan 計画

1. 教職員の人事計画について、中期的な展望をもって取組むべく法人本部に働きかけたい。
2. 学長運営方針を常に意識させ、その実行を最優先させる。
3. きめ細やかな学生支援活動に努めることで、満足度の高い短大作りの一翼を担うこと

Do 実行

1. 教職員の退職に伴う対応が、当座しのぎの対策に追われることが多い。特に教員の場合は資格審査を問われることもあるなど、その対応に時間を有する場合が多い。また事務職員の人事配置が硬直化している。少ない要員で幅広く業務の人事配置が硬直化している。少ない要員の活用を法人本部に働きかけたい。
2. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティーが求められる。自身も含めその体現者となる。
3. 学生が相談しやすい事務局の雰囲気作りを常に意識すること、事務職員に対する高い信頼関係を醸成する。

Act 改善

1. 自身の退職時に円滑な業務移管が可能とされるよう、その準備に当たりたい。
2. 教員組織の中に、学長補佐業務を担当する人材配置を検討する。
3. 学生アンバサダーを中心とした交流会を実施する。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・**B**・C・D」
教員退職者3名の後任につき、内2名は問題なく内定に至ったが、残す1名が結果として次年度以降の先送りとなった。当面非常勤講師の採用で対応に当たりたいが、次年度も後任者探しを継続したい。事務局職員について、産休・育休で欠員となった部署を配置換え等で対応し遅滞なく業務を遂行した。
2. 自己評価「S・A・B・**C**・D」
業務多忙を理由に十分な学長補佐が出来なかった。学長の事務補助を行う体制づくりに課題が残された。
3. 自己評価「S・A・**B**・C・D」
学生アンバサダーをはじめ各種イベントの学生スタッフとの指導・交流を通し、学生の主体性を尊重し成長を期待するような対応に心掛けた。

令和6年度 「入試広報室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	高井 達司（室長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	1. 昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（10名目標）及び歩留り3割を目標とする。 2. 短大・専門学校と同様に、今後四年制大学においても早期の志願者囲い込みに追随していくことが予想される。早期入試（特に総合型選抜）における志願者の囲い込みに最大限の対策を講じる。 3. 進学説明会を介した高校生のオープンキャンパス参加率を上昇させる。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	1. 昨年度入試より Web 出願を導入したことで、比較の出願しやすい環境を整備した。また奨学金の紐づけなど、入学動機を促すための仕掛け作りを検討したい。 2. 長崎女子高校の3年生本学志願希望者が、一昨年の37名まで回復することが予想されている。反面、これまで重点校と捉えてきた一部高校が極端に減少する見込みである。これを補填するためにも総合型選抜にエントリー制度を導入し、学校推薦型選抜開始以前の志願者増に繋げたい。 3. 本学の募集活動上、本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大、長崎こども医療専門学校のプレゼン力は非常に高い。これに引けを取らない、きめの細かいプレゼン能力を共有したい。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまで以上に生徒との信頼関係を深めるよう努めたい。本学志願への一歩となる面談者や資料請求者への対応を、より丁寧なものにする。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 1期・2期を合わせた志願者7名は昨年を2名上回ったが、本年度も目標に及ばなかった。目標とする歩留まり率は、昨年に続き達成するものと推測している。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 14名の志願者数は昨年比3名増。エントリー制に変更し小論文を削除したことが奏功したものと推察する。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 春のオープンキャンパスの会場を初めて学外へと移した。集客力の上昇と高校生の興味関心を惹くことを目的としたが、参加者は目標とする50名を超えた。また進学説明会については会場型、高校実施型ともに参加件数を大幅に減じた。過去の志願実績を参考に絞り込んだもので、これにより経費削減と集中投資に努めた。減じたことによる影響は無かった。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	1. 県内進学校のみならず、県外高校までのエリア拡大を検討する。 2. 次年度もこの選抜出願への誘引に最大限傾注したい。 3. 県外への説明会参加を検討したい。

令和6年度 入試広報室 年次報告

Plan 計画

1. 昨年度に引き続き「大学入学共通テスト利用選抜」における志願実績の確保（10名目標）及び歩留り3割を目標とする。
2. 短大・専門学校と同様に、今後四年制大学においても早期の志願者囲い込みに追隨していくことが予想される。早期入試（特に総合型選抜）における志願者の囲い込みに最大限の対策を講じる。
3. 進学説明会を介した高校生のオープンキャンパス参加率を上昇させる。

Do 実行

1. 昨年度入試よりWeb出願を導入したことで、比較の出願しやすい環境を整備した。また奨学金の紐づけなど、入学動機を促すための仕掛け作りを検討したい。
2. 長崎女子高校の3年生本学志願希望者が、一昨年の37名まで回復することが予想されている。反面、これまで重点校と捉えてきた一部高校が極端に減少する見込みである。このため総合型選抜にエントリー制度を導入し、早期入試の志願者増に繋げたい。
3. 本説明会の影響は想像を越えて大きい。特に長崎短大、長崎こども医療専門学校のプレゼン能力は非常に高い。これに引けを取らない、きめの細かいプレゼン能力を共有したい。対面接触した3年生徒の志願率は比較的高いので、これまでに以上生徒との信頼関係を深めるよう努めたい。

Act 改善

1. 県内進学校のみならず、県外高校までのエリア拡大を検討する。
2. 次年度もこの選抜出願への誘引に最大限傾注したい。
3. 県外への説明会参加を検討したい。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・**B**・C・D」
1期・2期を合わせた志願者7名は昨年は2名上回ったが、本年度も目標に及ばなかった。目標とする歩留まり率は、昨年に続き達成するものと推測している。
2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
14名の志願者数は昨年比3名増。エントリー制に変更し小論文を削除したことが奏功したものと推察する。
3. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
春のオープンキャンパスの会場を初めて学外へと移した。集客力の上昇と高校生の興味関心を惹くことを目的としたが、参加者は目標とする50名を超えた。また進学説明会については会場型、高校実績とともに参加件数を大幅に減じた。過去の志願実績を参考に絞り込んだもので、これにより経費削減と集中投資に努めた。減じたことによる影響は無かった。

令和6年度 「キャリア支援センター」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：原田 実輝（センター長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 就職率100%を目指して進路支援を行う。 2. 令和4年度入学生を対象に、就職先調査を実施する。 3. キャリア支援体制の見直しを図り、学生の満足度向上に努める。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 令和5年度の就職状況の成果と課題を検証し、効果的な支援体制を作る。 2. 前回調査時の改善点を中心に、キャリア委員会で検討を重ねて実施する。 3. キャリア支援センターと各学科・コースのキャリア委員との役割分担を見直し、学生にとって効果的な支援体制を構築する。また、年に3回以上、キャリア委員会を開催して意見交換を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 3月1日現在の全体の内定率は93.7%で昨年同期比3.9ポイント減である。未内定者は7名で、その内訳はS4名、L1名、Y2名である。今年度は全体的に動きが遅く、毎月前年度比を下回る内定率であったが、特にSの動きが鈍かった。それぞれ事情があり活動が遅れていたが、3月に入りようやく就活を始めているようなので、引き続き支援していきたい。
2. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 現2年生から学習成果の到達目標がこれまでの6項目から10項目に変更しており、10項目に関する評価を調べる為、次年度に先送りして実施する事となった。時間が出来た事により、卒業生の実情の把握に加え、現場で求められる能力について回答を依頼するなど、質問内容検討し精査する予定である。
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 キャリア委員会は2回しか開けず、また、学生にとって効果的な支援体制の構築とまでには至らなかったが、就職支援に対する学生の満足度は、昨年より12ポイント増加しており、「じっくり話を聞いてもらい、親身に寄り添ってもらった」「どの先生も親身に相談にのってくれた」とのコメントが多数見受けられた。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 最終就職率100%を目指した就職支援を行う。 2. キャリア支援委員が新しくなるのに伴い、キャリア支援体制を見直し、就職先調査に向けてキャリア支援委員会の活性化を図る。 3. 学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度の向上に努める。

令和6年度キャリア支援 年次報告

Plan 計画

- ①就職率100%を目指して進路支援を行う。
- ②令和4年度入学生を対象に、就職先調査を実施する。
- ③キャリア支援体制の見直しを図り、学生の満足度向上に努める。

Do 実行

- ①令和5年度の成果と課題を検証し、効果的な支援体制を構築する。
- ②前回調査時の改善点を中心にキャリア委員会で検討を重ねて実施する。
- ③キャリア支援センターとキャリア委員との役割分担を見直し、学生にとって効果的な支援体制を構築する。また、年3回、キャリア委員会を開催する。

Act 改善

- ①最終就職率100%を目指した就職支援を行う。
- ②キャリア支援委員会のメンバーが新しくなるのに伴い、キャリア支援体制の見直し、委員会の活性化を図り、就職先調査に注力する。
- ③学生一人一人に寄り添った丁寧な支援を行い、学生の満足度向上に努める。

Check 検証

- ①3月1日現在の全体の内定率は93.7%で、前年同期比3.9ポイント減である。未内定者S4名、L1名、Y2名の計7名で、引き続き支援を行っていく。
- ②令和5年度入学生より学習成果の評価項目を10項目に変更した為、就職先調査は次年度に先送りして実施することとなった。質問項目を一部変更し、十分に検討して行う予定である。
- ③学生にとって効果的な支援体制の構築までには至らず、就職支援に対する学生の満足度は12ポイント上昇した。

令和6年度 「入試委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名： 橋本 剛（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 令和7年度募集要項作成に当たり、事務局入試広報室と連携を取りながら、5月末完成を目指す。 2. WEB出願の学内外への周知を図る。 3. 面接質問事項等、入学者選抜に必要な事項について、本委員会及び教授会で共通理解を図る 4. 募集広報委員会と連携を密に図り、令和7年度の入学者について、定員確保を目指す。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 募集要項の原稿を入試広報室に作成させ、学長自らチェックを行う。また、必要に応じて、募集要項の内容やレイアウト等に関して提案する。並行して、本委員会及び教授会での承認を得る。 2. 「WEB出願」については、6月実施予定の関係高校連絡協議会において、しっかり説明する。高校生に対しては、オープンキャンパスや進学ガイダンスにおいて説明する。 3. 年間を通じて、必要な情報を適宜提示し、承認を得るように努力する。 4. 募集広報委員会で協議された内容・事項について、本委員会として適宜対応する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 募集要項は5月末には完成した。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 WEB出願の説明は6月の関係高校連絡協議会及び進学ガイダンスやオープンキャンパスの際に行った。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 本委員会で入学者選抜基本方針・実施要領、面接設問の検討を行い、適宜必要に応じて、入学者選抜に関する協議及び入試判定を遺漏なく行った。 4. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 募集広報委員会で協議された内容や必要な情報を本委員会に提示し、学生募集活動への協力を依頼した。ただし、令和7年度の入学予定者は110名に止まった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 募集要項は奨学金部分以外は大きく変更する必要はないが、地域未来創生コースのウェブサイト掲載が遅れたので、こちらにも目配りをしながらチェックする必要がある。 2. WEB出願は定着してきた。改善の余地がないかどうかを引き続き精査する。 3. 総合型選抜の重視についてよりPRを進める必要がある。

令和6年度入試委員会 年次報告

Plan 計画

1. 令和7年度募集要項作成に当たり、事務局入試広報室と連携を取りながら、5月末完成を目指す。
2. WEB出願の学内外への周知を図る。
3. 面接質問事項等、入学者選抜に必要な事項について、本委員会及び教授会で共通理解を図る。
4. 募集広報委員会と連携を密に図り、令和7年度の入学者について、定員確保を目指す。

Do 実行

1. 募集要項の原稿を入試広報室に作成させ、学長自らチェックを行う。また、必要に応じて、募集要項の内容やレイアウト等に関連して提案する。並行して、本委員会及び教授会での承認を得る。
2. 「WEB出願」については、6月実施予定の関係高校連絡協議会において、しっかり説明する。高校生に対しては、オープンキャンパスや進学ガイダンスにおいて説明する。
3. 年間を通じて、必要な情報を適宜提示し、承認を得るように努力する。
4. 募集広報委員会で協議された内容・事項について、本委員会として適宜対応する。

Act 改善

1. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
募集要項は5月末には完成した。
2. 自己評価「S・**A**・B・C・D」
WEB出願の説明は6月の関係高校連絡協議会及び進学ガイダンスやオープンキャンパスの際に行った。
3. 自己評価「**S**・A・B・C・D」
本委員会で入学者選抜基本方針・実施要領、面接設問の検討を行い、適宜必要に応じて、入学者選抜に関する協議及び入試判定を遺漏なく行った。
4. 自己評価「S・A・B・**C**・D」
募集広報委員会で協議された内容や必要な情報を本委員会に提示し、学生募集活動への協力を依頼した。ただし、令和7年度の入学予定者は110名に止まった。

Check 検証

1. 募集要項は奨学金部分以外は大きく変更する必要はないが、地域未来創生コースのウェブサイート掲載が遅れたので、こちらにも目配りをしながらチェックする必要がある。
2. WEB出願は定着してきた。改善の余地がないかどうかを引き続き精査する。
3. 総合型選抜の重視についてよりPRを進める必要がある。

令和6年度 「FD・SD委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：玉島 健二（委員長代理）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 第1回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 2. 第2回定例FD・SD研修会について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。 3. その他のFD・SD活動について、以下の目標の達成に向けて計画を遂行する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 第1回定例FD・SD研修会の実施について： 8月27日（火）10:00～12:30、13:30～15:00、221教室 ①対象： 短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意） ②内容： 【FD研修会】 ：「令和6年度自己点検評価報告書（簡易版）の作成について」 【SD研修会】 ：「特別な支援を要する学生への対応について」 2. 第2回定例FD・SD研修会の実施について： 3月19日（水）10:00～12:00、13:00～16:00、221教室 ①対象： 短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員（任意） ②内容： 【FD研修会】 ：第1部「令和7年度からスタートする地域未来創生コースの概要について」 第2部「PC必携化に伴う活用事例の紹介」 【SD研修会】 ：「令和6年度 部署別年次報告 ～根拠に基づく成果と課題と改善策～」 3. その他のFD・SD活動の実施について 1) 各部署のFD・SD活動（意見交換・勉強会・研究会等）の実施について ○可能な限り各部署内での独自のFD・SD活動を定期的に実施するように努める。 2) 学外のFD・SD研修会への参加について ○多くの教職員が学外のFD・SD研修会に積極的に参加し、高等教育の教職員としての資質の向上を図るよう呼びかけや案内を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 第1回定例FD・SD研修会については、本来の担当であった武藤教授が病気療養のため、計画が遅れたが、関係者の協力を得て、予定通り実施できた。参加率は86.4%で3名が欠席であった。 第1回定例SD研修会は、特別な支援を要する学生への対応をテーマに、外部講師を招いての研修会であった。本学には標記テーマに該当する学生が少なからずおり、タイムリーな研修会であったと考える。参加率は90.6%で3名の欠席であった。 ※追加として、第2回FD研修会を9月12日（木）に実施。テーマは、「令和8年度（第4評価期間）の認証評価に向けて」とし、参加率は94.3%で欠席者は2名であった。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 第3回定例FD研修会については、3部制を採用し、予定通り実施できた。参加率は91.2%で3名が欠席であった。また、第3回定例SD研修会は、部署別年次報告会として実施した。今回は3つのグループに分けて報告してもらった。参加率は91.2%で3名の欠席であった。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 1) については、自己点検評価室がリーダーシップをとり、各部署における協議や意見交換を促す必要がある。 2) については、数名の教職員が外部主催の研修会に参加しているが、活発とは言えない状況である。上記1.及び2.で予定していた研修会以外に、9月12日に「第4評価期間における認証評価について」というテーマで、FD研修会を実施した。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 次年度は、4回目の認証評価に備えて、自己点検評価報告書を作成しなければならない年であるが、FD・SD年間計画を早めに立てて、万全を期したい。 2. 研修会の参加率100%を目指し、教職員への呼びかけを行っていきたい。また、参加した教職員から寄せられた意見を踏まえ、研修会の在り方を検討し、満足度の高い研修会を実施したい。

令和6年度FD・SD委員会年次報告

Plan 計画

1. 第1回定例FD・SD研修会について、実行に掲げる目標の達成に向けて計画を遂行する。
2. 第2回定例FD・SD研修会について、実行に掲げる目標の達成に向けて計画を遂行する。
3. その他のFD・SD活動について、実行に掲げる目標の達成に向けて計画を遂行する。

Check 検証

1. 自己評価「S・A・B・C・D」
第1回定例FD・SD研修会とともに、予定通り実施できた。FDは令和8年度に控えた認証評価の準備に当たたるものであり、SDは特別な支援を要する学生が少なからず在籍している本学としてはタイムリーなテーマでの研修会となった。参加率はFDが86.4%、SDが90.6%であった。
2. 自己評価「S・A・B・C・D」
FD・SD研修会とともに、全教職員の8割以上が参加し、FD研修会では「地域未来創生コースの概要」「PCC必携化に伴う活用事例の紹介」について、SD研修会では「部署別年次報告～根拠に基づいた成果と課題と改善策」について、説明・提案が通り行われた。
3. 自己評価「S・A・B・C・D」
各部署のFD・SD活動及び学外のFD・SD研修会への参加については、あまり活発には行われていない。なお、計画とは別に、9月に「第4評価期間における認証評価について」をテーマにFD研修会を実施し、参加率は94.3%であった。

Do 実行

1. 第1回定例FD・SD研修会の実施について：8月27日（火）10:00～12:30、13:30～15:00 場所：221教室
①対象：短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員
②内容：【FD研修会】：「令和6年度自己点検評価報告書（簡易版）の作成について」、【SD研修会】：「特別な支援を要する学生への対応について」
2. 第2回定例FD・SD研修会の実施について：3月19日（水）10:00～12:00、13:00～16:00 場所：221教室・情報演習室II
①対象：短大基幹教職員、特別基幹教員、実習助手、法人本部職員
②内容：【FD研修会】：「令和7年度からスタートする地域未来創生コースの概要について」・「PCC必携化に伴う活用事例の紹介」、【SD研修会】：「令和6年度 部署別年次報告～根拠に基づく成果と課題と改善策～」
3. その他のFD・SD活動の実施について
1) 各部署のFD・SD活動（意見交換・勉強会等）の実施について
○可能な限り各部署内での独自のFD・SD活動を定期的の実施するように努める。
2) 学外のFD・SD研修会への参加について
○多くの教職員が学外のFD・SD研修会に積極的に参加し、高等教育の教職員としての資質の向上を図る。

Act 改善

1. 学修成果の評価指標と評価基準については、継続的に自己点検・評価を行い、向上充実を図る必要がある。
2. 令和8年度は4回目の認証評価受審の年であり、令和7年度は準備の年度として細心の注意を払う必要がある。
3. 各部署のFD・SD活動を促進するとともに、研修会の在り方について、アンケートに寄せられた意見を踏まえ、意義のある研修会を実施したい。

令和6年度 「IR推進室」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ <u>IR推進室</u> ）
氏名：	桑原 真美（室長）
PLAN（計画）：	査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 第4期認証評価に必要な根拠資料の作成について、IR推進室メンバーで役割分担をして行う。 学務システムへの各種データ集計・分析・可視化を自動化する機能の追加についての検討および実装。 本学で実施している各種調査結果等のデータについて、必要な部署が必要な時に利用できる環境整備を行う。
DO（実行）：	目標の達成に向けて計画を遂行する。
	<ol style="list-style-type: none"> 認証評価の根拠資料について、IR推進室が作成すべき資料の確認を行う。データの収集・集計・分析結果の資料作成はIR推進室メンバーで役割分担をして行う。 成績データの経年変化などの学内で扱う各種データの集計、分析および可視化(グラフ等による)について学務システム上でできるものはないか検討する。情報管理センターと連携して実装へ向けたシステム改修を行う。 各種調査結果データの所在を明確にし、データマップを作成する。その他、調査データを活用しやすい環境整備を実施する。
CHECK（検証）：	成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
	<ol style="list-style-type: none"> 自己評価「S・A・<u>B</u>・C・D」 IR推進室が作成を担当する認証評価の根拠資料については、ALO研修会への参加ならびに令和6年度自己点検・評価報告書(簡易版)を作成したことで、その全体像をある程度把握することはできた。今年度は、入学時調査や卒業生調査、短期大学生調査(基準協会主催)等の各種調査のデータ収集および集計結果の資料作成、令和6年度自己点検・評価報告書(簡易版)の根拠資料である各種調査データと成績データの分析資料(図表等)の作成を行った。 自己評価「S・A・B・C・<u>D</u>」 成績データの経年変化などの、学内で扱う各種データの集計、分析および可視化(グラフ等による)について学務システム上でできるものはないか検討し、実装へ向けて動く計画であったが、今年度は検討段階にも入ることができなかった。 自己評価「S・A・B・<u>C</u>・D」 データマップの作成に着手することができなかった。しかしながら、今年度は各種調査データを積極的に活用するための第一歩として、卒業時調査や卒業生調査等の調査結果データを用いた各部署でのアセスメントの実施を提案し、実施に至った。アセスメントは各種調査結果から本学の強み・弱みを把握し課題を明確にすることで、課題改善のための取り組みに繋げる目的で実施された。アセスメント実施後はアセスメント実施報告書の作成および提出をいただいた。
ACT（改善）：	課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
	<ol style="list-style-type: none"> 次年度は、第4期認証評価へ向けて自己点検評価報告書を作成する。IR推進室が作成を担当する根拠資料について再度整理を行い、資料作成に着手する。IR推進室内で情報共有を行いながら作業を進めていく。 学務システム上に表示されることで教育活動に役立つと考えられる各種分析資料(グラフ等)を検討する。情報管理センターと連携して進めていく。 データマップの作成については次年度以降の検討課題である。また、各種調査データを活用したアセスメントについては、アセスメントテーマを明確にした年間計画を立てて実施する。

令和6年度 IR推進室 年次報告

Plan 計画

- 1.第4期認証評価に必要な根拠資料の作成について、IR推進室メンバーで役割分担をして行う。
- 2.学務システムへの各種データ集計・分析・可視化を自動化する機能の追加についての検討および実装。
- 3.本学で実施している各種調査結果等のデータについて、必要な部署が必要な時に利用できる環境整備を行う。

Do 実行

1. 認証評価の根拠資料について、IR推進室が作成すべき資料の確認を行う。データの収集・集計・分析結果の資料作成はIR推進室メンバーで役割分担をして行う。
- 2.成績データの経年変化などの学内で扱う各種データの集計、分析および可視化(グラフ等)について学務システム上でできるものはないか検討する。情報管理センターと連携して実装へ向けたシステム改修を行う。
- 3.各種調査結果データの所在を明確にし、データマップを作成する。その他、調査データを活用しやすい環境整備を実施する。

Act 改善

- 1.次年度は、第4期認証評価へ向けて自己点検評価報告書を作成する。IR推進室が作成を担当する根拠資料について再度整理を行い、資料作成に着手する。IR推進室内で情報共有を行いながら作業を進めていく。
- 2.学務システム上に表示されることで教育活動に役立つと考えられる各種分析資料(グラフ等)を検討する。情報管理センターと連携して進めていく。
- 3.データマップの作成については次年度以降の検討課題である。また、各種調査データを活用したアセスメントについては、アセスメントテーマを明確にした年間計画を立てて実施する。

Check 検証

- 1.自己評価「S・A \square B・C・D」
IR推進室が作成を担当する認証評価の根拠資料については、令和6年度自己点検評価報告書(簡易版)を作成したことで、その全体像がある程度把握することはできた。今年度は、入学時調査や卒業生調査、短期大学生調査(基準協会主催)等の各種調査のデータ収集および集計結果の資料作成、令和6年度自己点検評価報告書(簡易版)の根拠資料である各種調査データと成績データの分析資料(図表等)の作成を行った。
- 2.自己評価「S・A・B・C \square D」
成績データの経年変化などの、学内で扱う各種データの集計、分析および可視化(グラフ等)について学務システム上でできるものはないか検討し実装へ向けて動く計画であったが、今年度は検討段階にも入れることができなかった。
- 3.自己評価「S・A・B \square C・D」
データマップの作成に着手することができなかった。しかしながら、今年度は各種調査データを積極的に活用するための第一歩として、卒業時調査や卒業生調査等の調査結果データを用いた各部署でのアセスメントの実施を提案し、実施に至った。アセスメントは各種調査結果から本学の強み・弱みを把握し課題を明確にすることで、課題改善のための取り組みに繋げる目的で実施された。アセスメント実施後はアセスメント実施報告書の作成および提出をいただいた。

令和6年度 「教務委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名： 船勢 肇（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1、シラバスの掲載内容および成績評価のルーブリックについて、成果と課題を明らかにし、次年度入学生用シラバスの作成を実施する。 2、特に増加した教養科目について状況を把握する。今後にも必要に応じて、規程等の改訂を検討する。 3、今年度から対象年度となる認証評価に向けて準備していく。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1.令和6年度入学生対象の学修成果の評価項目が一部改訂されたことから、引き続きその成果および課題について検討する。 2. 令和6年度は新たに4科目の教養科目が追加されるため、今年度同様に科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。 3.今年度は認証評価の対象年度であるため、自己点検評価室およびIR推進室と協力して根拠資料等の整備を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1.自己評価「S・A・B・ □ ・D」 ルーブリックについてあらためて意見を聞くことはなかったが、現在のところ特に問題が生じていない。 令和7年度入学生の2年次の科目について、この原稿入力時点でシラバスの原稿が出来ていない科目が一部ある。学修成果について、幼児教育学科は10項目の教員評価と学生の自己評価で、数量的スキルを評価する科目が少ない（データサイエンス基礎を学生が選択しない）。 2.自己評価「S・A・B・ □ ・D」 時間割の圧迫はとくに話に出ていないが、学生の履修登録のミスが生じた。 3.自己評価「S・ □ ・B・C・D」 多くの教職員による分担もあって、スケジュール通り行われている。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 各学科コースで改善点があれば出してもらい検討する。 幼児教育学科の科目において、学習成果の一つである「情報活用能力」をより評価できるようにする。 2. 履修登録について、学生への指導・学務システムの改善などを検討する 3. 引き続き、自己点検評価室およびIR推進室と協力して根拠資料等の整備を行う。

令和6年度 教務委員会 年次報告

Plan 計画

1. シラバスの掲載内容および成績評価のルーブリックについて、成果と課題を明らかにし、次年度入学生用シラバスの作成を実施する。
2. 特に増加した教養科目について状況を把握する。今後必要に応じて、規程等の改訂を検討する。
3. 今年度から対象年度となる認証評価に向けて準備していく。

Do 実行

1. 令和6年度入学生対象の学修成果の評価項目が一部改訂されたことから、引き続きその成果および課題について検討する。
2. 令和6年度は新たに4科目の教養科目が追加されるため、今年度同様に科目選択の幅が広がったことによる学生への影響や時間割の圧迫具合など、実際に運用しての評価を行う。
3. 今年度は認証評価の対象年度であるため、自己点検評価室およびIR推進室と協力して根拠資料等の整備を行う。

Act 改善

1. ルーブリックについてあらためて意見を聞くことはなかったが、現在のところ特に問題が生じていない。令和7年度入学生の2年次の科目について、シラバスの原稿が出来ていない。学修成果について、幼児教育学科は10項目の教員評価と学生の自己評価で、数量的スキルを評価する科目が少ない（データサイエンス基礎を学生が選択しない）。
2. 時間割の圧迫はとくに話に出ていないが、学生の履修登録のミスが生じた。
3. 多くの教職員による分担もあって、スケジュール通りおこなわれている。

1. 各学科コースで改善点があれば出し
てもらい検討する。
幼児教育学科の情報活用能力をより評価
できるようにする。

2. 履修登録について、学生への指導・
学務システムの改善などを検討する

3. 引き続き、自己点検評価室およびIR
推進室と協力して根拠資料等の整備を
行う。

令和6年度 「教職課程委員会」 年次報告書	
区分：	学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：	本村 弥寿子（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 次回課程認定申請に向けて準備を進める。 2. 関係省庁等が主催する説明会や研修会へ積極的な参加及び通知・連絡への対応を速やかに行う。 3. 教職課程の自己点検・評価を進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学科にて課程認定についての理解を進め、課程認定に係る授業担当者及び学科にて今後の段取りを明確にする。 2. 関係省庁や県のホームページ・通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。 3. 令和3年度及び4年度入学生の教職課程についての自己点検・評価をまとめる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和8年度再課程認定に向け、令和6・7年度に業績をまとめる段取りについては、学科教員で共通理解できているが、業績については中途段階である。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 九州地区大学教職課程研究連絡協議会の第1回運営委員会（4月）及び、総会（3月）への参加、文科省ホームページからの情報収集を行い、情報共有及び対応を行った。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 令和4年度（令和3年度及び4年度入学生）の教職課程自己点検・評価報告書を作成し、運営委員会で承認を得たのち、本学公式ウェブサイトにて公表した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 令和8年度課程認定に向けて準備を進める。 2. 教職課程に係る研修会や説明会等へ積極的に参加する。 3. 令和5年度、令和6年度の教職課程自己点検・評価報告書を作成する。	

令和6年度 教職課程委員会 年次報告

Plan 計画

1. 次回課程認定申請に向けて準備を進める。
2. 関係省庁等が主催する説明会や研修会へ積極的な参加及び通知・連絡への対応を速やかに行う。
3. 教職課程の自己点検・評価を進める。

Do 実行

1. 学科にて課程認定についての理解を進め、課程認定に係る授業担当者及び学科にて今後の段取りを明確にする。
2. 関係省庁や県のホームページ・通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。
3. 令和3年度及び4年度入学生の教職課程についての自己点検・評価をまとめる。

Act 改善

- 1 令和8年度采課程認定に向けて準備を進める。
2. 教職課程に係る研修会や説明会等へ積極的に参加する。
3. 令和5年度、令和6年度の教職課程自己点検・評価報告書を作成する。

Check 検証

1. 学科にて課程認定についての理解を進め、課程認定に係る授業担当者及び学科にて今後の段取りを明確にする。
2. 関係省庁や県のホームページ・通知等に目を通し、関係教員・職員で速やかに対応を図る。
3. 令和3年度及び4年度入学生の教職課程についての自己点検・評価をまとめる。

令和6年度 「教育SS運営委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：古賀 克彦（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 教育サポートスタッフを適切に任命する。 2. TAおよびPSの活動を計画的に実施し、1年生の学習支援を円滑に進める。 3. TAおよびPSが事故なく支援活動を実践できるよう、教職員が適切にサポートする。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. TA2名、PS2名をコース教職員の推薦により選定し、活動の様子や実施報告書を基に適性を判断、課題が見つければ指導を行う。 2. TAは後期の「食品衛生学実験」で補助業務を行う。PSは「履修登録補助」「1年生の懇親会運営補助」「定期試験対策支援」を行う。 3. 実験補助では、特に安全に業務が遂行できるよう留意し、TAと事前に打ち合わせを実施する。PSの業務に関しても安心して取り組めるよう、事前に計画を相談し、打ち合わせを行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 TAとPSの4名は責任感を持って業務を全うした。特に、TAの2名は毎週の授業で1年生と関わり、信頼を得て活躍した。なお、特に指導を要する問題はなかった。 2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 PSは1年生の入学直後の履修登録支援や懇親会の運営、学生生活に関する相談に応じた。これにより、1年生は円滑に学生生活をスタートさせることができた。なお、定期試験に対するアドバイスは、降雪などによる休講のため実施できなかった。TAは後期の「食品衛生学実験」のサポートを行った。本来は前期の「食品学基礎実験」のサポートも予定されていたが、再履修者の関係で時間割が変更となり、後期のみのサポートとなった。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 1年間の活動は事故やトラブルなく終えることができたが、教育サポートスタッフを有効に活用できたとは言えない状況であった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 今年度はPS（ピアサポーター）の仕事が少なく、TA（ティーチングアシスタント）の業務が多かったため、来年度はPSとTAがそれぞれの役割をお互いに理解し、協力しながら業務を行う体制を構築する。具体的には、TAの業務に授業サポートに加え、1年生の学習支援や定期試験対策支援も含め、PSの業務には、履修登録や懇親会運営の支援に加え、1年生の学習サポートや試験対策支援にも関わり、TAと共に支援活動を行う。両者が交代でお互いの仕事を担当し、どちらか一方に過剰な負担がかからないようにする。 2. 今年度は再履修者が存在したため時間割に変更が生じ、TAの実験サポートが前期のみとなった。今後はそのような事態が発生しないよう、TAの活用を意識した時間割の作成を行う。 3. 栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着してきたが、他の学科コースでも取り組む意向があれば、運営面で支援を行う。

令和6年度 教育SS運営委員会 年次報告

Plan 計画

1. 教育サポートスタッフを適切に任命する。
2. TAおよびPSの活動を計画的に実施し、1年生の学習支援を円滑に進める。
3. TAおよびPSが事故なく支援活動を実践できるよう、教職員が適切にサポートする。

Do 実行

1. TA2名、PS2名をコース教職員の推薦により選定し、活動の様子や実施報告書を基に適性を判断、課題が見つければ指導を行う。
2. TAは後期の「食品衛生学実験」で補助業務を行う。PSは「履修登録補助」「1年生の懇親会運営補助」「定期試験対策支援」を行う。
3. 実験補助では、特に安全に業務が遂行できるよう留意し、TAと事前に打ち合わせを実施する。PSの業務に関しても安心して取り組み、事前に計画を相談し、打ち合わせを行う。

Act 改善

- 1 今年度はPSの仕事が少なく、TAの業務が多かったため、来年度はPSとTAがそれぞれの役割をお互いに理解し、協力しながら業務を行う体制を構築する。具体的には、TAの業務に授業サポートに加え、1年生の学習支援や定期試験対策支援も含め、PSの業務には、履修登録や懇親会運営の支援に加え、1年生の学習サポートや試験対策支援にも関わり、TAと共に支援活動を行う。
- 2 今年度は再履修者が存在したため時間割に変更が生じ、TAの実験サポートが前期のみとなった。今後はそのような事態が発生しないよう、TAの活用を意識した時間割の作成を行う。
- 3 栄養士コース内では教育サポートスタッフの活動が定着してきたが、他の学科コースでも取り組み意向があれば、運営面で支援を行う。

Check 検証

- 1 TAとPSの4名は責任感を持って業務を全うした。特に、TAの2名は毎週の授業で1年生と関わり、信頼を得て活躍した。なお、特に指導を要する問題はなかった。
- 2 PSは1年生の入学直後の履修登録支援や懇親会の運営、学生生活に関する相談に応じた。これにより、1年生は円滑に学生生活をスタートさせることができた。なお、定期試験に対するアドバイスは、降雪などによる休講のため実施できなかった。TAは後期の「食品衛生学実験」のサポートを行った。本来は前期の「食品学基礎実験」のサポートも予定されていたが、再履修者の関係で時間割が変更となり、後期のみのサポートとなった。
- 3 1年間の活動は事故やトラブルなく終えることができたが、教育サポートスタッフを有効に活用できたとは言えない状況であった。

令和6年度 「研究倫理委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：織田 芳人（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。 2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 日本保育者養成教育学会等、他の学会の倫理指針に関する情報収集に努める。 2. 教員の研究活動における倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展を支援する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認して、必要に応じて審査方法等の委員会活動を改善していく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 ・他大学（聖徳大学、西九州大学、別府大学・別府大学短期大学部、等）の倫理規程・指針等を収集した。 ・日本保育者養成教育学会誌「保育者養成教育研究」の執筆・編集に関する倫理要綱を収集した。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 令和7年2月1日に研究倫理審査申請書が1件提出された。当該研究を令和7年3月に実施する必要があるとのことだったので、早急に委員会を開催して審査を行い、令和7年2月13日付で承認した。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 令和7年2月13日付で承認した研究の他に、倫理審査の申請がなかった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。 2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。

令和6年度研究倫理委員会 年次報告

Plan 計画

1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。
2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。

Do 実行

1. 日本保育者養成教育学会等、他の学会の倫理指針に関する情報収集に努める。
2. 教員の研究活動における倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討し、研究の速やかな進展を支援する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等を確認して、必要に応じて審査方法等の委員会活動を改善していく。

Act 改善

1. 教員の研究活動における倫理に関する情報収集の継続に努める。
2. 教員の研究活動において、倫理審査が必要になった場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 倫理審査を受けた研究活動における不具合等の報告があれば、速やかに、速やかに委員会を開いて検討する。

Check 検証

1. 他大学（聖徳大学、西九州大学、別府大学・別府大学短期大学部、等）の倫理規程・指針等を収集した。日本保育者養成教育学会誌「保育者養成教育研究」の執筆・編集に関する倫理要綱を収集した。
2. 令和7年2月1日に研究倫理審査申請書が1件提出された。当該研究を令和7年3月に実施する必要があるとことだったので、早急に委員会を開催して審査を行い、令和7年2月13日付で承認した。
3. 令和7年2月13日付で承認した研究の他に、倫理審査の申請がなかった。

令和6年度 「募集・広報委員会」 年次報告書
区分： 学科専攻 ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：森口 和美（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させ、昨年度よりも多くの本学入学者の獲得に繋げる。 2. アンバサダーに協力を仰ぎ、SNS等を積極的に発信する。 3. 進学ガイダンス等へ積極的に参加し、より多くの入学者の獲得。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 昨年度のオープンキャンパスの流れをベースに、学科コースにおける時間を長く確保し、学科コース内の交流の時間を確保する。また、最後の約 20 分は自由選択の場(個別相談ブース、寮・キャンパス見学を実施)を設け、参加者の満足度を上げるプログラムを用意する。 2. 本年度も引き続き、アンバサダーに SNS の発信を依頼するが、今年度は発信頻度等に応じて謝礼を出し、アンバサダーの SNS 活用へのモチベーションを高めていく。 3. 事務局だけでなく、募集広報委員をはじめ、学内一丸となり、進学ガイダンス等へ積極的に参加する。昨年よりも多くの入学者の獲得に繋げる。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 参加者の満足度を向上させる企画を検討し、アンケートについても好評の意見が多く上がった。入試のこと（面接の口頭試問内容）を聞きたい参加者が多かったため、次年度はそこを踏まえ、中身の検討が必要ではないかと考える。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 SNS の更新頻度が低い人と多い人の差があった。もう少し、SNS 担当の学生が自ら投稿できるように考えていく必要がある。しかしながら、昨年度よりは更新頻度も高かったため、閲覧者からは良い意見があった。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 昨年の入学者よりは微増であった。総合型選抜入試の方法が変わった影響もあるかと思う。ガイダンスについては、昨年度の同時期の参加状況を鑑みて、選別しながら参加した方が良いように思われる。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. オープンキャンパスの動員向上及び参加者の満足度を上昇させるプログラムの検討 2. SNS 活用を推進していくとともに、担当学生の育成 3. ガイダンス等で使用できる広報物の作成（各学科コース独自のチラシ、動画等）

令和6年度募集・広報委員会 年次報告

Plan 計画

1. オープンキャンパスの動員向上、及び参加者の満足度を上昇させ、昨年度よりも多くの本学入学者の獲得に繋げる。
2. SNS等を積極的に発信する
3. より多くの入学者の獲得

Do 実行

1. 昨年度のオープンキャンパスの流れをベースに、学科コースにおける時間を長く確保し、学科コース内の交流の時間を確保する。
2. アンバサダーにSNSの発信を依頼するが、今年度は発信頻度等に応じて謝礼を出し、アンバサダーのSNS活用へのモチベーションを高めていく。
3. 事務局だけでなく、募集広報委員をはじめ、学内一丸となり、進学ガイダンス等へ積極的に参加する。

Act 改善

1. オープンキャンパスの動員向上及び参加者の満足度を上昇させるプログラムの検討
2. SNS活用を推進していくとともに、担当学生の育成
3. ガイダンス等で使用できる広報物の作成（各学科コース独自のチラシ、動画等）

Check 検証

1. 参加者の満足度を向上させる企画を検討し、アンケートについても好評の意見が多く上がった。入試のこと（面接の口頭試問内容）を聞きたい参加者が多かったため、次年度はそこを踏まえ、中身の検討が必要ではないかと考える。
2. SNSの更新頻度が低い人との多い人の差があった。もう少し、SNS担当の学生が自ら投稿できるように考えていく必要がある。
3. 昨年の入学者よりは微増であった。総合型選抜入試の方法が変わった影響もあるかと思う。ガイダンスについては、昨年度の同時期の参加状況を鑑みて、選別しながら参加した方がよいように思われる。

令和6年度 「紀要・図書委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：中村 浩美（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 引き続き感染症対策を行いながら利用しやすい図書館の環境づくりに努め、図書館利用の活性化を検討する。 2. 紀要論文における倫理規定案を再確認してもらい投稿者を増やす。 3. 紀要論文の向上と学術リポジトリの導入を取り入れる。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 入館者の手指のアルコール消毒やマスク着用、また観覧者同士の間隔を取り私語を慎むこと、利用後は使用した机等のアルコール消毒の徹底をおこなう。 図書館に興味を持ち利用者を増やすための呼びかけを考える。 消耗図書の処分を含め図書館のスペースを有効的に使用できるようにする。 2. 本学の倫理規定等に準じて本学紀要投稿への積極的な呼びかけを行う。投稿に当たっては規定順守のチェックシートの分野別を検討してもらう。 3. 次年度令和7年度よりスタートする準備を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・A・ <u>③</u> ・C・D」 ・感染対策は本年度もしっかりと行われ学生もマナーを持って入館、閲覧ができていた。 ・図書館利用者と貸し出しは学生数の減少やAIを使う事も考えられ昨年度よりさらに減った。 ・利用案内、情報提供は学生の目に触れやすいようメールやインスタグラムを使用した。 ・消耗図書等を処分し配置換えを行い、閲覧キャビネットの中身を入れ替えて収納スペースの有効活用を図った。 2. 自己評価「S・A・ <u>③</u> ・C・D」 ・学内紀要論文における倫理規定の再確認を各々した上で投稿できていた。 ・紀要投稿に際しての工程に期日も含めて問題はなかったが投稿者が少なかった。 3. 自己評価「S・A・ <u>③</u> ・C・D」 ・3月中に申請して次年度令和7年度よりスタートする。 ・研究活動等実績報告の記載については研究活動報告を別に行っているため本学紀要に掲載をしない事とした。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 図書館の雨漏りを修繕して書物への影響なく利用できるようにする。またその際に図書館のレイアウトも変えながら図書館に興味を持ち、利用したい環境作りをする。（学生からもアイデアを出してもらう） 2. ノートパソコン利用のために電源を増やしたが、4月の状況を見ながら再度確認する。 3. 紀要論文投稿数を増やすための方法を新たに考える。

令和6年度 紀要・図書委員会 年次報告

Plan 計画

1. 引き続き感染症対策を行いながら利用しやすい図書館の環境づくりに努め、図書館利用の活性化も検討する。
2. 紀要論文における倫理規定案を再確認してもらう。
3. 紀要論文の向上と学術リポトリジの導入を取り入れる。

Do 実行

- 1・入館者の手指のアルコール消毒やマスク直用、使用後の机上消毒を行う。
呼びかけを考える
・図書館の興味を持ち利用者を増やすための呼びかけを考える。
- 2・本学の倫理規定等に準じて紀要投稿への積極的に呼びかけを行う。投稿に当たっては規定順守のチェックシートの分野別を検討してもらう。
3. 次年度令和7年度よりスタートする準備を行う。

Act 改善

1. 図書館の雨漏りを修繕して書物への影響なく利用できるようにする。またその際に図書館のレイアウトも変えながら図書館に興味を持ち、利用しようと思う環境作りをする。
(学生からもアイデアを出してもらう)
2. ノートパソコン利用のために電源を増やしたが、4月の状況を見ながら再度確認する。
3. 紀要論文投稿数を増やすための方法を新たに考える。

Check 検証

- 1・感染対策は本年度もしっかりと行われ学生もマナーを保持して入館、閲覧できた。
・図書館利用者と貸し出しは学生数の減少やAIを使う事も考えられ昨年度よりさらに減った。
・利用案内、情報提供は学生の目に触れやすいようメールやインスタグラムを使用した。
- 2・学内紀要論文に於ける倫理規定の再確認を各々した上で投稿できていた。
・紀要投稿に際しての工程に期日も含めて問題はなかったが要綱数が少なかった。
- 3・3月中に申請して次年度令和7年よりスタートする。
・研究活動等実績報告の記載については研究活動報告を別に行っているため紀要には掲載しない事とした。

令和6年度 「学生指導委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：太田 美代（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会、学生相談室等と緊密な情報共有を行い、問題が生じたときは、小さなうちに課題解決ができるように務める。 2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。
DO(実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会、学生相談室等と情報共有していく。適切な対応ができるように、生徒指導提要等を参考に基本方針を明確にしておく。 2. 学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。 3. 学生の生活指導に関する事例をまとめる。
CHECK(検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。
1. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ □ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかった。 2. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ □ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかったため、委員会を開く必要がなかった。 3. 自己評価「 S ・ A ・ B ・ □ ・ D 」 学生を指導する案件が特になかったため、学生の生活指導に関する事例を得られなかった。
ACT(改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。 2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。 3. 学生を指導する案件が生じた場合、生活指導に関する事例をまとめて保存する。

令和6年度 学生指導委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会、学生相談室等と緊密な情報共有を行い、問題が生じたときは、小さなうちに課題解決ができるように務める。
2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 学生の生活指導に関して、事例をまとめて保存する。

Do 実行

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会、学生相談室等と情報共有していく。適切な対応ができるように、生徒指導提等を参考に基本方針を明確にしておく。
2. 学生の生活指導が必要な場合、速やかに委員会を開く。
3. 学生の生活指導に関する事例をまとめる。

Act 改善

1. 学生の生活指導に関して、本学事務局、運営委員会、学生支援委員会等と緊密な情報共有を行う。
2. 学生の生活指導が緊急に必要な場合、速やかに委員会を開いて検討する。
3. 学生を指導する案件が生じた場合、生活指導に関する事例をまとめて保存する。

Check 検証

1. 学生を指導する案件が特になかった。
2. 学生を指導する案件が特になかったため、委員会を開く必要がなかった。
3. 学生を指導する案件が特になかったため、学生の生活指導に関する事例を得られなかった。

令和6年度 「学生支援委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：野田 章子（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、 <u>学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。</u> 2. 学友自治会の活動に関しては、 <u>担当教員を中心にして連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。</u> 3. 学生数の減少、活動時間の縮小などを考慮して効率の良い取り組みを検討する。 4. 既存の枠にとらわれず、在学生の要望を参考にした、 <u>新しいアイデアを取り入れた行事運営を行う。</u>
DO(実行)： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教員のさせたいことではなく、 <u>学生の「やってみたい」を支援する。</u> 学生・教員の行事参加は(定期総会・選挙を除き)任意とする。 2. 自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を徹底させ、社会人となる準備として <u>メールやグーグルドライブを活用するよう指導する。</u> 学生が主体的に年間・月間の流れを構築し、 <u>効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。</u> また、 <u>役員の引き継ぎ業務をアッセンブリの時間に組み込むことにより、次期学友自治会への交代がスムーズに行われるようにする。</u> 3. 本年度は弥生祭をはじめ日程が早くなっているものがあるので、 <u>効率を考えた取り組みを考える。</u> 4. 自治会の人数や予算などが減少しているので、 <u>今までのものを見直し、工夫しながら新しい取り組みなどを考える。</u>
CHECK(検証)： 成果を測定(量的・質的データ)し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□(囲み線)を付ける。
1. 自己評価「 S ・ A ・ □B ・ C ・ D 」 アッセンブリを中心に学生が主体的に計画、実行することができていた。しかし、学生のスキルでは難しい作業は教員がサポートした。 2. 自己評価「 S ・ □A ・ B ・ C ・ D 」 Google ドライブやラインの活用は定着していた。様々な連絡もラインの活用が多く、トラブル等もなかった。弥生祭の特別企画や卒業記念パーティー等の外部との連絡もラインが主となり、学生が先方と進めていた。 3. 自己評価「 S ・ □A ・ B ・ C ・ D 」 日程については非常にタイトであった。選挙と弥生祭の時期が重なっていたり、幼児教育学科2年生の実習終了から10日間ほどしかなかったが、学生が時間内でできることを選択して運営することができた。 4. 自己評価「 S ・ A ・ □B ・ C ・ D 」 自治会役員や学級委員の希望者がみつからないといった問題を抱えている。
ACT(改善)： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 各業務の仕事内容を明白にし、パソコン業務などはLの学生に担当してもらうなどして、教員のサポートを減らす。学生からのヘルプがあった時に限り、教員はサポートに入るようにし、学生自身での運営を実現させる。 2. メール、グーグルドライブ、LINE の他、ZOOM や Google クラスルームなどを活用して、さらに話し合いや連絡が的確にできるように支援していく。 3. 効率の良い取り組みに関しては改善していると考えられるので、来年度も同様にすすめていきたい。 4. 今後の大きな問題は、予算の減少である。今後は行事を減らし、規模を小さくするなどして、持続可能な方法を考えなければならない。その際、学生自身の意向を踏まえ、学生が納得した形で運営されなければならない。そのためには、教員と学生の意見交換を円滑にし、学生にとって魅力ある学友会自治会にしていけることが課題である。役員、委員については、兼務も検討していく必要がある。

令和6年度 学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1. 学生生活全般、並びに学友自治会活動に関する事項について、学生の自主性を尊重し適切な支援活動を行う。
2. 学友自治会の活動に関しては、担当教員を中心にし、連絡をとりつつ、学生の主体性を養い学友自治会役員・実行委員の運営能力向上が図られるような支援を行う。
3. 学生数の減少、活動時間の縮小などを考慮して効率の良い取り組みを検討する。
4. 既存の枠にとらわれず、在学生の要望を参考にした、新しいアイデアを取り入れた行事運営を行う。

Do 実行

1. 学生の意思を尊重し、学生主体の活動となるよう関わる。教員のさせたいことではなく、学生の「やってみたい」を支援する。学・教員の行事参加は（定期総会・選挙を除き）任意とする。
2. 自治会役員から各担当教員への報告・連絡・相談を徹底させ、社会人となる準備としてメールやグループドライブを活用するよう指導する。学生が主体的に年間・月間の流れを構築し、効率よく魅力的な活動を行うための能力を身に付けられるよう支援する。また、役員の引き継ぎ業務をアッセンブリの時間に組み込むことにより次期学友自治会への交代がスムーズに行われるようにする。
3. 本年度は弥生祭をはじめ日程が早くなっていくものがあるので、効率を考え、取り組みを考える。
4. 自治会の人数や予算などが減少しているため、今までのものを見直し、工夫しながら新しい取り組みなどを考える。

Act 改善

1. 各業務の仕事内容を明白にし、パソコン業務などはLの学生に担当してもらうなどして、教員のサポートを減らす。学生からのヘルプがあった時に限り、教員はサポートに入るようにし、学生自身での運営を実現させる。
2. メール、グループドライブ、LINEの他、ZOOMやGoogleクラスルームなどを活用して、さらに話し合いや連絡が的確にできるように支援していく。
3. 効率の良い取り組みに関しては改善していきたい。
4. 今後の大きな問題は、予算の減少である。今後は行事を減らしたり、規模を小さくするなどして、持続可能な方法を考えなければならぬ。その際、学生自身の意向を踏まえ、学生が納得した形で運営を円滑にし、学生にとっても魅力ある学友自治会と学生の意見交換を円滑にし、学生にとって魅力ある学友自治会にしていけることが課題である。役員、委員については、兼務も検討していく必要がある。

Check 検証

1. アッセンブリを中心にして学生が主体的に計画、実行することができていた。しかし、学生のスキルでは難しい作業は教員がサポートしなければならぬ面がみられた。
2. グループドライブやLINEの活用は定着していた。学級委員などもLINEで連絡することが多く、学生に伝達が行き届かないなどのトラブルはなかった。弥生祭の特別企画や卒業記念パーティーなど外部の方との連絡もLINEが主となっていったため、学生自身が先方とやり取りしながら進めることができていた。役員の引き継ぎ業務なども、グループドライブを使いながら、スムーズに行えていた。
3. 日程に関しては非常にタイトであった。選挙と弥生祭の時期が重なっていったり、2Yの実習終了から10日ほどで弥生祭だったりが、学生が自分達で時間内でできることを選択し、運営することができていた。
4. 自治会の役員や学級委員の希望者がみつからないといった問題がある。

令和6年度 「障がい学生支援委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：太田 美代（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 合理的配慮が必要な学生に関する情報をとりまとめて、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ情報提供する。 2. 大学における特別支援教育について研修を行う。 3. 配慮を要する学生の把握を適切に行い、支援について検討する。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、合理的配慮に関する情報を提供し、支援を依頼する。後期授業開始後に支援の方法に不都合はないか確認する。新たに支援を要する学生がいないか再度調査を行い、情報提供を行う。必要に応じて出身高校との情報交換を行う。 2. SD研修会で取り扱いができないか相談する。可能であれば、現在在籍する学生の障がいに関しての基礎知識及び配慮すべき事項について研修を行う。 3. 「障がいではないが、大学へ通知しておきたいこと」の記述が年々増えていることから、「合理的配慮申請書」の様式が現在のままで良いか見直しを行う。 気になる学生について、運営委員会等を通じて継続的に情報収集する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 年度初めの特別な配慮を要する学生の把握と情報収集は、事務局の協力のお陰で支障なく進めることができた。出身高校との情報交換・連携は丁寧に実施できているので、今後も継続したい。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 第1回SD研修会(8月27日)において、県立鶴南特別支援学校の分藤賢之校長先生を講師として招聘し、特別な支援を要する学生への対応についての研修を実施した。「障害学生支援 - インクルーシブキャンパスの推進に必要な基礎知識」と題して、関係法や文科省からの対応方針に関する通知文に加え、障害種に応じた合理的配慮や対応の仕方等について学ぶことができた。アンケートの結果、参加者の76.6%が研修に満足と回答し、80%が業務の役に立ったと回答した。 個別具体的な事例についての話を聞きたいという要望もあったので、今後はグループワーク等で実際の事例を素材とした意見交換を行うことなども検討して良いのではないか。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 運営委員会で、年間を通して学生に関する情報共有が行われた。新年度の「合理的配慮調査書（兼申請書）」の様式については、第3回障がい学生支援委員会で内容の検討を行う。今年度、ASDの学生に対する対応で、一部職員に過重な負担をかけ、一か月の在宅勤務で何とか乗り切るといった事態となったことは残念だった。もっと早期に組織的な対応ができなかったかが悔やまれる。学生に適切な支援を届けつつ職員が安心して働ける職場環境を作るためにも、今後に向けて課題の洗い出しと支援体制の構築が必要である。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 障がい学生支援に関する基本方針やマニュアル等の整備 2. 専任カウンセラーの配置と学生の居場所づくり 3. 職員の相談先の確保

令和6年度 障がい学生支援委員会 年次報告

Plan 計画

1. 合理的配慮が必要な学生に関する情報をとりまとめ、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ情報提供する。
2. 大学における特別支援教育について研修を行う。
3. 配慮を要する学生の把握を適切に行い、支援について検討する。

Do 実行

1. 年度始めに、非常勤講師を含む各学科コースの先生方へ、合理的配慮に関する情報を提供し支援を依頼する。後期授業開始後に支援の方法に不都合はないか確認する。新たに支援を要する学生がいまいいか再度調査を行う。必要に応じて出身高校との情報交換を行う。
2. SD研修会で取り扱いきれないか相談する。可能であれば、現在在籍する学生の障がいに関しての基礎知識及び配慮すべき事項について研修を行う。
3. 「合理的配慮申請書」の様式が現在のままで良いか見直しを行う。気になる学生について、運営委員会等を通じて積極的に情報収集する。

Act 改善

1. 障がい学生支援に関する基本方針やマニュアル等の整備
2. 専任カウンセラーの配置と学生の居場所づくり
3. 職員の相談先の確保

Check 検証

1. 年度初めの特別な配慮を要する学生の把握と情報収集は、事務局の協力のお陰で支障なく進めることができた。出身高校との情報交換・連携は丁寧の実施できている。
2. 第1回SD研修会(8月27日)において、県立鶴南特別支援学校の分藤賢之校長先生を講師として招聘し、研修を実施した。アンケートの結果、参加者の76.6%が研修に満足と回答し、80%が業務の役に立ったと回答した。
3. 運営委員会で、年間を通して学生に関する情報共有が行われた。今年度、ASDの学生に対する対応で、一部職員に過重な負担をかけ、一か月の在宅勤務で何とか乗り切るという事態となったことは残念だった。もっと早期に組織的な対応ができなかったかが悔やまれる。学生に適切な支援を届けつつ職員が安心して働ける職場環境を作るためにも、今後に向けて課題の洗い出しと支援体制の構築が必要である。

令和6年度 「寮務委員会」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：宮崎 伸一郎（委員長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 外部委託している寮監業務の円滑な業務遂行に向けて連絡相談体制を構築していく。 2. 前後期各2回ずつの委員会開催。短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有。 3. 若竹寮施設設備の改修、整備
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 寮務日誌や寮監との連絡・相談を通して問題が生じていないか確認する。また、事案の程度により各部署への相談を行う。 2. 寮務委員会の計画的な実施し、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。 3. 寮生、寮監との協議を通して意見の収集を行う。また、省エネルギーへの取り組みおよび整理整頓を行う姿勢を育てていく。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。
1. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 寮務日誌や口頭での報告を受け、寮監との共通理解を行った。高校分特記事項があれば高校へのメール及び電話で情報共有を行った。 2. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 寮務委員会については今年度2月に1度だけの実施となった。寮監より短大生・高校生それぞれの生活状況の報告を受け把握することができた。特に大きな問題もなく順調に生活を送ることができたと思う。 3. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 寮生からの要望で今年度途中から食事メニューが一新され好評と聞いている。また、寮棟居室の空調設備クリーニングを行ったが、今後経年による更新が徐々に出てくると思われるので計画撤換が必要。 省エネルギーにおいて改善はみられるが、空き室時の空調のつけっ放しなどが多少みられる。省エネルギーに対しての寮生の意識を高めなければならないと感じる。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 度々寮監の入れ替わりはあるが寮監全員で協力し、寮生に対して丁寧に対応していただいております。快適に過ごせているのではないかと感じている。今後とも変わりなく寮監と協力しながら対応に当たりたい。 2. 寮務委員会を少なくとも前・後期で開催できるよう計画したい。また現場の寮監と報・連・相をしっかりとれるよう努めていきたい。 3. 寮生が快適に過ごせるよう、また寮監が不具合なく勤務ができるよう改善が必要な個所は対応していく。

令和6年度寮務委員会 年次報告

Plan 計画

1. 外部委託している寮監業務の円滑な業務遂行に向けて連絡相談体制を構築していく。
2. 前後期各2回ずつの委員会開催。短大生や高校生の日頃抱えている問題点や悩みなどを共有。
3. 若竹寮施設設備の改修、整備

Do 実行

1. 寮務日誌や寮監との連絡・相談を通して問題が生じていないか確認する。また、事案の程度により各部署への相談を行う。
2. 寮務委員会の計画的な実施し、それぞれの立場からの問題点の提示と対策を協議していく。
3. 寮生、寮監との協議を通して意見の収集を行う。また、省エネルギーへの取り組みおよび整理整頓を行う姿勢を育てていく。

Act 改善

1. 度々寮監の入れ替わりはあるが寮監全員で協力し、寮生に対して丁寧に対応していただいております。今後とも変わらなく寮監と協力しながら対応に当たりたい。
2. 寮務委員会を少なくとも前・後期で開催できよう計画したい。また現場の寮監と報・連・相をしっかりとれるよう努めていきたい。
3. 寮生が快適に過ごせるよう、また寮監が不具合なく勤務ができるよう改善が必要な個所は対応していく。

Check 検証

1. 寮務日誌や口頭での報告を受け、寮監との共通理解を行った。高校分特記事項があれば高校へのメール及び電話で情報共有を行った。
2. 寮務委員会については今年度2月に1度だけの実施となった。寮監より短大生・高校生それぞれの生活状況の報告を受け把握することができた。特に大きな問題もなく順調に生活を送ることができたと思う。
3. 寮生からの要望で今年度途中から食事メニューが一新され好評と聞いている。また、寮棟居室の空調設備リニューアルを行ったが、今後経年による更新が徐々に出てくると思われるので計画敵的取替が必要。省エネルギーにおいて改善はみられるが、空き室時の空調のつけっ放しなどが多少みられる。省エネルギーに対する寮生の意識を高めなければならぬと感じる。

令和6年度 「学生相談室」 年次報告書
区分： 学科コース ・ <u>委員会等</u> ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：小槻 智彩（室長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 相談室メンバーの変更にともない、各学科コースとの情報共有を充実させる。 2. 相談室メンバーの変更にあわせて、学生相談室の広報活動を丁寧に行う。 3. 学生に対する支援を充実させる。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 必要に応じ、各学科コースの長や担当教員と情報を共有する。 2. ポスター掲示内容や全体説明内容をわかりやすいものにする。 3. 相談にきた学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨む。また、相談内容に応じて各学科コース担当教員や学内他部署と連携を行う。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 今年度の相談室運営について、年度初めに相談室メンバーと検討し、その内容を確認した。また、年度途中にも運営に関する検討を行い、各学科コースの状況を共有した。
2. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 学生が自ら来室する場合もあり、広報活動は効果があったと思われる。特に、年度初めのガイダンスでの案内が周知に寄与したと考えられる。
3. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 相談への対応方法については、年度初めに相談室メンバーで確認を行い、受容的・共感的態度で支援に臨んだ。相談内容や学生の希望に応じて、各学科コース長やチューターと情報共有を行いながら支援を進めた。また、実情に応じて相談対応記録の修正も行った。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 相談室メンバーが変更した場合でも、年度初めから適切な支援を提供できる体制を整備する。 2. 広報活動においては、入学直後の学生も利用しやすいよう、相談室の案内や担当者の紹介を具体的かつ分かりやすく行う。 3. 各学科コースや学内他部署との情報共有が必要な場合、連携方法を確認し、適切な支援体制を構築する。

令和6年度 学生相談室 年次報告

Plan 計画

1. 相談室メンバーの変更にともない、各学科コースとの情報共有を充実させる。
2. 相談室メンバーの変更にあわせて、学生相談室の広報活動を丁寧に行う。
3. 学生に対する支援を充実させる。

Do 実行

1. 必要に応じ、各学科コースの長や担当教員と情報を共有する。
2. ポスター掲示内容や全体説明内容をわかりやすいものにする。
3. 相談に来た学生に対しては、各担当、受容的・共感的態度で支援に臨む。また、相談内容に応じて各学科コース担当教員や学内他部署と連携を行う。

Act 改善

1. 相談室メンバーが変更した場合でも、年度初めから適切な支援を提供できる体制を整備する。
2. 広報活動においては、入学直後の学生も利用しやすいよう、相談室の案内や担当者の紹介を具体的かつ分かりやすく行う。
3. 各学科コースや学内他部署との情報共有が必要な場合、連携方法を確認し、適切な支援体制を構築する。

Check 検証

1. 今年度の相談室運営について、年度初めに相談室メンバーと検討し、その内容を確認した。また、年度途中にも運営に関する検討を行い、各学科コースの状況を共有した。
2. 学生が自ら来室する場合もあり、広報活動は効果があつたと思われる。特に、年度初めのガイダンスでの案内が周知に寄与したと考えられる。
3. 相談への対応方法については、年度初めに相談室メンバーで確認を行い、受容的・共感的態度で支援に臨んだ。相談内容や学生の希望に応じて、各学科コース長やチャーターと情報共有を行いながら支援を進めた。また、実情に応じて相談対応記録の修正も行った。

令和6年度 「地域連携・子育て支援センター」 年次報告書																																			
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）																																			
氏名：太田 智子（センター長）																																			
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。																																			
1. 公開講座について地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、参加人数の増加や満足度向上につなげる。 2. 親育ち講座、高大連携を含む地域連携活動について、本学全体で取組む意識をさらに高める。 3. ボランティアを希望する学生が安心して参加できるような支援体制の整備を構築し、連携を強化する。																																			
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。																																			
1. 公開講座の参加者数増加および満足度向上 ・ 各学科コースへの公開講座実施依頼（各1講座以上） ・ 参加者募集方法の見直しと満足度向上への取り組み実施 2. 親育ち講座の実施と高大連携の強化 ・ 親育ち講座の円滑な実施と参加者ニーズに応じた内容の検討 ・ 県内3高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との連携体制の強化 ・ 長崎女子高との連携と情報共有体制の構築 3. ボランティア活動の実施 ・ 受付対応・学生への呼びかけ等をスムーズに実施する																																			
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに口（囲み線）を付ける。																																			
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・ ビジネス・医療秘書コース2講座、栄養士コース3講座、幼児教育学科2講座の計7講座を実施した。定員の85%の満了申し込みがあった。申込者の参加率は94%であった。 ・ 講座により内容は異なるが、参加者アンケートでは概ね高い満足度が得られた。今後はアンケートの設問や回答形式を統一化するなど、比較・検討方法を考える必要がある。 ・ 募集方法は、短大HP、NRへの掲載、ながさき県民大学連携講座への登録、各担当者による近隣への広報活動などであった。今後はInstagramの効果的な活用や公共施設でのポスター掲示など、新たな募集方法を取り入れて参加者増を図る必要がある。																																			
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・ 親育ち講座は7～12月の6日間、12講座を実施し延べ37名が受講した。毎回のアンケート結果によると、内容、難易度ともに適切であったと思われる。 ・ 長崎明誠高校および長崎女子高校を対象に体験授業を行った。今年度は長崎女子高校での進路ガイダンスは実施しなかったが、特に問題はみられなかった。																																			
3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>時期</th> <th>内容</th> <th>参加人数（延べ）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>5～2月</td> <td>愛宕小学校パワーアップ教室</td> <td>S1名 Y9名</td> </tr> <tr> <td>5・7月</td> <td>子ども食堂</td> <td>S9名・教員2名</td> </tr> <tr> <td>6・11月</td> <td>NAGASAKI しごとみらい博2024</td> <td>L4名</td> </tr> <tr> <td>6・8・12月</td> <td>読み聞かせイベント（於ミライ on 図書館）</td> <td>Y20名・教員3名</td> </tr> <tr> <td>7月</td> <td>カエルの出前授業（長崎特別支援学校）</td> <td>Y6名・教員1名</td> </tr> <tr> <td>10月</td> <td>第12回ゆうほまつり</td> <td>Y4名</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td>第15回まちあるき双六大会</td> <td>Y5名・教員1名</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td>スポーツお楽しみ会</td> <td>Y13名・教員1名</td> </tr> <tr> <td>11月</td> <td>読み聞かせイベント（於ココウォーク）</td> <td>Y10名・教員1名</td> </tr> <tr> <td>12月</td> <td>音楽ボランティア</td> <td>Y11名・教員1名</td> </tr> </tbody> </table>			時期	内容	参加人数（延べ）	5～2月	愛宕小学校パワーアップ教室	S1名 Y9名	5・7月	子ども食堂	S9名・教員2名	6・11月	NAGASAKI しごとみらい博2024	L4名	6・8・12月	読み聞かせイベント（於ミライ on 図書館）	Y20名・教員3名	7月	カエルの出前授業（長崎特別支援学校）	Y6名・教員1名	10月	第12回ゆうほまつり	Y4名	11月	第15回まちあるき双六大会	Y5名・教員1名	11月	スポーツお楽しみ会	Y13名・教員1名	11月	読み聞かせイベント（於ココウォーク）	Y10名・教員1名	12月	音楽ボランティア	Y11名・教員1名
時期	内容	参加人数（延べ）																																	
5～2月	愛宕小学校パワーアップ教室	S1名 Y9名																																	
5・7月	子ども食堂	S9名・教員2名																																	
6・11月	NAGASAKI しごとみらい博2024	L4名																																	
6・8・12月	読み聞かせイベント（於ミライ on 図書館）	Y20名・教員3名																																	
7月	カエルの出前授業（長崎特別支援学校）	Y6名・教員1名																																	
10月	第12回ゆうほまつり	Y4名																																	
11月	第15回まちあるき双六大会	Y5名・教員1名																																	
11月	スポーツお楽しみ会	Y13名・教員1名																																	
11月	読み聞かせイベント（於ココウォーク）	Y10名・教員1名																																	
12月	音楽ボランティア	Y11名・教員1名																																	
・ 令和6年度の活動状況を上表に示す。全学科コースから学生92名、教員10名、延べ102名がボランティア活動に参加した。ゼミ単位で活動が多く、教員とともに参加することで学生が安心する環境づくりをすることができた。																																			
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。																																			
1. 公開講座一覧のポスター作成やInstagramでの発信を行う。アンケート内容の見直しと統一化を進める。 2. 親育ち講座は、引き続き高い満足度が得られる内容等を検討する。高大連携は相互協力の意識を高めていく。 3. 現在の体制を維持するとともに、より多くの学生にボランティアの周知ができる方法を検討する。																																			

令和6年度 地域連携・子育て支援センター 年次報告

Plan 計画

1. 公開講座について、地域ニーズの把握・精緻化をすすめるとともに、参加人数の増加や満足度向上につなげる。
2. 親育ち講座、高大連携を含む地域連携活動について、本学全体で取組む意識をさらに高める。
3. ボランティアを希望する学生が安心して参加できるような支援体制の整備を構築し、連携を強化する。

Do 実行

1. 公開講座の参加者数増加および満足度向上にむけ、全学科コースが満足度向上を念頭に置いた講座を開講する。また、参加者募集方法の見直しを行う。
2. 親育ち講座の円滑な実施と参加者ニーズに応じた内容の検討を行う。県内3高校（長崎明誠、長崎玉成、長崎女子）との連携体制の強化し、長崎女子高との連携と情報共有体制の構築を目指す。
3. ボランティア担当委員の継続配置により、受付対応・学生への呼びかけ等をスムーズに実施する

Act 改善

1. 参加者増加にむけて募集方法の見直しや効率化を図る。また、比較検討のためアンケート内容の統一化を進める。
2. 親育ち講座は引き続き高い満足度が得られる内容を検討する。高大連携は高校、短大とともに相互協力の意識を高めていく必要がある。
3. 現在の体制を維持するとともに、より多くの学生へボランティアの周知ができる方法を検討する。

Check 検証

1. 計7講座を実施した（L2, S3, Y2）。アンケートによると概ね高い満足度を得ることができた。
2. 親育ち講座は12講座を実施し、延べ37名が受講した。アンケート結果より、内容、難易度ともに適切であった。高大連携では体験授業を行った（長崎玉成を除く）。
3. 全学科コースから学生92名、教員10名の延べ68名がボランティアに参加した。ゼミ単位での活動が多く、学生への呼びかけは円滑に行われた。

令和6年度 「情報管理センター」 年次報告書
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）
氏名：山口 洋（センター長）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。
1. 学務システムのサーバー移設及びその後のシステム保守について検討する。 2. 令和7年度以降入学者のノート PC 必携化について検討を進める。 3. 学務システムの改修による教職員の業務効率化及び IR 情報の整備に向けた活動を行う。
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。
1. 前期中をめぐり移設作業を完了させる。移設後のシステム保守については、センター内及び法人本部等関係者で協議の上、方針を決定する。 2. 端末スペックの要件、必要となる学内の体制整備及び授業等における端末の運用方法について検討を行う。 3. 事務局並びに他の委員会等（教務委員会及び IR 推進室が主となるものと想定）と共同して学務システムの改修を検討・実行する。
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 移設作業は前期中に完了したが、動作環境の各種バージョンアップ（PHP 等）は実施していない。また、保守の依頼先は開発元会社のままであり、他社への依頼は難しい状況である。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 推奨スペックを提示し、必須ソフトウェアのインストール及び、在学期間中の保守を含めた形で新入生へのサービス提供を行った。また購入前アンケートを実施して、経済的な負担解消の為のレンタル PC の希望状況や独自購入希望者の数を把握するようにした。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 学務システムの改修については、単発的な改善にとどまった。他の委員会と連携した改善計画の方針を立てるところまでは行かなかった。
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。
1. 教職員の PC に加え、新入生のノート PC についても（ESET）によるコンピュータウィルスの検出管理を実施し、継続的に毎日監視する。 2. 学務システムの蓄積データから IR 関連、及び他の委員会と関連したデータ抽出モデルを試験的に実装する。 3. セキュリティポリシーに沿った学内資産の重要区分を検討しリスト化する。

令和6年度 情報管理センター 年次報告

Plan 計画

1. 学務システムのサーバー移設及びその後のシステム保守について検討する。
2. 令和7年度以降入学者のノートPC必須化について検討を進める。
3. 学務システムの改修による教職員の業務効率化及びIR情報の整備に向けた活動を行う。

Do 実行

1. 前期中をめぐりに移設作業を完了させる。移設後のシステム保守については、センター内及び法人本部等関係者で協議の上、方針を決定する。
2. 端末スペックの要件、必要となる学内の体制整備及び授業等における端末の運用方法について検討を行う。
3. 事務局並びに他の委員会等（教務委員会及びIR推進室が主となるものと想定）と共同して学務システムの改修を検討・実行する。

Act 改善

1. 学務システム移設後の動作環境については、PHPや使用しているライブラリについてのバージョンアップが必要である。
2. 新入生のノートPC必須化に伴い、学内LANへのアクセスが必然的に増加することによるコンピュータウィルスの検出状況进行管理する。具体的にはウィルス管理サーバー（ESET-PROTECT）を設置し、新入生のノートPC（ESET-Endpoint）からの情報を都度収集し、それを監視する。
3. 学務システムの蓄積データからIRに関連するデータ抽出方針を決定し、それを基にアプリケーションサーバーを試験実装する。

Check 検証

1. 移設作業については前期中に完了した。移設後の環境要因による障害についても都度改修をおこない、現状は安定稼働している。システム保守については、これまで通り開発元へ依頼しており、他社への依頼は難しい状況。
2. 情報管理センターにて推奨スペックを提示しノートPC調達先での必須ソフトウェアのインストール、及び在学期間のサポート期間含めたパッケージ内容で新入生への提供を行った。
3. 学務システムの改修については適宜実施できたが、業務効率の改善までは到達できなかった。またIR情報の整備についても検討段階にとどまった。

**令和6年度
「個人別報告書」**

令和6年度 「橋本 剛」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：大学運営	職名：学長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学長職 本学全体・学科・コース特色づくりを推進し、令和7年度の入学定員170名の充足を目指す。 2. 教授職 「初年次セミナー」及び「長崎観光入門」について、単に知識の習得ではなく、社会に関わり「こうしたい」を実現する姿勢を学ぶ場として発展させる。 3. 学校法人理事長兼務 理事長兼務を最大限活用し、高大連携・幼大連携を積極的に推進する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学長職 ① ビジネス・医療秘書コースの「地域未来創生コース」への発展を具体化し、地域社会に浸透させる。 ② 栄養士コースの各種地域連携を支援しつつ、成果を社会に発信する。 ③ 幼児教育学科と附属幼稚園の連携を強力に推進する。 2. 教授職 ① 初年次セミナーは、オムニバス形式の教養科目という特色を活かし、オピニオンリーダーを投入する。 ② 長崎観光系科目は、長崎観光を創造してきたフロントランナーをゲストに迎え包括的理解を促進する。 3. 学校法人理事長兼務 ① 高大連携は学ぶ側の接続性を高める取組を行う。 ② 幼大連携は附属幼稚園サイドの要望を踏まえ、できる限り多様なプログラムを実施する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ① 地域未来創生コースの準備は整ったが、地域社会への浸透は道半ば。 ② 栄養士コースは九州農政局との連携（おいしいお米料理コンテスト、波佐見町とのコラボ）が進み、オーガニックマルシェでの一般への浸透も実施できた。 ③ 附属幼稚園との連携は、栄養士コースの食育、幼児教育学科の実習等、想定の一部にとどまった。 2. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 ① 初年次セミナーは鈴木市長はじめとした各界のオピニオンリーダーを投入でき、成功した。 ② 長崎観光入門は「ゼロからイチをつくった人々」のゲスト講話でよい成果を挙げた。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ① 高大連携は、検討会議は開催できたが、実際の取組は従来のものから踏み出すものとならなかった。 ② 幼大連携は、幼稚園サイドの多忙さ（4時間保育）のため、食育と幼児教育学科交流にとどまった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学長職 地域未来創生コースの浸透・改善に全力を挙げ、同時にコースの特色づくりを推進し、令和8年度の入学定員170名の充足を目指す。 2. 教授職 「初年次セミナー」について、単に知識の習得ではなく、社会に関わり「こうしたい」を実現する姿勢を学ぶ場として発展させるため、授業内容にアクティブラーニング的な要素を増やす。 3. 学校法人理事長兼務 学園国際化推進の旗振りを通じ、短大にも留学生を受け入れる体制を構築する。	

令和6年度 「森 弘行」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 情報管理センターとともに学内情報システムの安定稼働に努める。 2. 統計処理に関する学外との共同研究に参加する。 3. 新規開講科目「データサイエンス基礎」の教材開発。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. Linux のサーバーコンピュータ更新に伴う移行作業支援、学生情報データベースの維持更新など。 2. 他学との研究グループに参加し、シミュレーションプログラムなどを分担する。 3. 「データサイエンス基礎」の授業進行に合わせ、教材を作成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学務システムと学生情報データベースのデータ同期を継続するとともに求人情報の検索機能を学生情報データベースへ移行、10 項目の学修成果に対応したグラフ機能を追加した。また、Windows PC に Nginx と PHP による開発環境を構築した。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 SAS によるシミュレーションプログラムを提供し、「On concerns with cause-specific incidence and subdistribution hazard」(https://link.springer.com/article/10.1007/s42081-024-00274-x) で公表された。整形外科医より「腓骨マレット指の保存療法（ギプス療法）」、「デュプイトレン拘縮の手術療法」についての臨床データ分析について相談を受け、統計解析およびその解釈について助言した。この結果については6月の長崎県理学療法士学会で発表予定。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 データサイエンス基礎では従来の統計処理の授業では扱っていなかった統計手法が含まれており、新たに Excel による演習プログラムを開発した。しかし、学生がその原理や思考の過程を理解するのは困難が伴う。計算より思考の過程を理解することが重要であり、再検討を要する。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生情報データベースの使いやすさを向上させ、学生・教職員が情報にアクセスしやすくするため、より直感的なインターフェースを導入する。また、プログラムのコードを再検討し、メンテナンス作業時間を短縮できるよう改善する。	
2. 研究グループで研究成果をさらに高め、発表の質を向上させる。	
3. 計算の過程ではなく、思考プロセスや原理の理解を優先するため、統計手法を視覚的に解説する教材の開発や、原理理解を促すシナリオ型を検討するとともに Excel の分析ツールなどをより積極的に活用する。	

令和6年度 「織田 芳人」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」で、保育の5 領域における指導案作成に活用できるように、「保育指導案」の作成に必要な Word の学修を実施する。 ②2 年次必修科目「保育方法論」の分担部分「ICT 活用」で「保育指導案」及び「実習日誌」の作成に必要な Word の学修を実施する。 ③1 年次必修科目「保育と ICT 活用」で「園だより」の作成に必要な Word の学修を実施する。 2. ①研究倫理委員会の業務を遂行する。 ②教職課程委員会の業務を遂行する。 3. ①Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査をまとめる。 ②ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査をまとめる。 ③保育の表現活動における ICT の活用に関する情報を収集する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」で Word による「保育指導案」作成を4 回程度で行う。 ②2 年次必修科目「保育方法論」で Word による「保育指導案」と「実習日誌」作成を各3 回程度で行う。 ③1 年次必修科目「保育と ICT 活用」で「園だより」の作成に必要な Word の学修を実施する。 2. ①研究倫理委員会について、必要が生じた場合に早急に対応していく。 ②教職課程委員会として令和4 年度教職課程自己点検・評価報告書の原案を作成する。 3. ①Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査を行う。 ②ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査を行う。 ③保育の表現活動における ICT の活用に関する情報をまとめる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ①1 年次必修科目「情報科学」で Word による「保育指導案」作成を行った。 ②2 年次必修科目「保育方法論」で Word による「保育指導案」・「実習日誌」作成、及び、PowerPoint による「紙芝居」制作を行った。 ③1 年次必修科目「保育と ICT 活用」で Word による「園だより」作成、及び、PowerPoint による「紙芝居」制作を行った。 2. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 ①令和7 年2 月1 日に研究倫理審査申請書が1 件提出された。当該研究を令和7 年3 月に実施する必要があるとのことだったので、早急に委員会を開催して審査を行い、令和7 年2 月13 日付で承認した。 ②令和7 年2 月に令和4 年度教職課程自己点検・評価報告書の原案を作成した。令和7 年3 月に公表予定。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 ①Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査を行った。 ②ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査を行った。 ③保育の表現活動における ICT の活用に関する情報をまとめた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ①1 年次必修科目「情報科学」で、必携化されたノート PC の適切な活用を図る。 ②1 年次必修科目「保育と ICT 活用」で、PowerPoint による「紙芝居」制作を行う。 2. ①研究倫理委員会について、必要が生じた場合に早急に対応していく。 ②教職課程委員会について、令和5 年度教職課程自己点検・評価報告書の原案を作成する。 3. ①Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査を行い、まとめる。 ②ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査を行い、まとめる。 ③授業での配布資料に対する情報整理の意識付けを図る。	

令和6年度 「中澤 伸元」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授 中澤 伸元
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 決意・エネルギー・イメージの意識。 2. 五感・感情 3. 表情・言葉・行動	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 決意・エネルギー・イメージの実践（潜在意識） 2. 五感・感情表現の実践 3. 表情・言葉・行動の実践（顕在意識）	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 自己肯定感の徹底が必要。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 五感・感情については積極的に前向きであった。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生達はよく頑張っていた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. もっと深いポイントの説明の必要性和実践をする。 2. 授業中だけでなく、復習でも訓練するようにする。 3. 個人差が大きいので、各自、日頃の訓練を習慣づけさせる。	

令和6年度 「松尾 公則」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名：教授（特別基幹教授） 松尾公則
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 「栄養士の科学」は、化学の基礎を理解させる。 「ヒトと生物」は、生物への関心を高めることで地球上の生態系について考えさせる。 2. ゼミナールでは、就職先において環境教育の指導ができる人材の育成を目指す。 3. 講演活動を通じて生態系の保全について啓蒙する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 化学式やモル濃度を理解させることを目的とし、丁寧に解説し復習等も徹底する。 学生の興味がある動物の話題を中心として講義を展開する。講義一辺倒にならないように、動画や標本・実物を使つての90分とする。 2. 今年は、今までで一番少ない人数の7人であるが、きめ細かい指導をしていきたい。 3. 学童や幼稚園・保育園の講演（本物との触れ合い）を重視し、園児にとって原体験となるよう努力する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 高校時代に化学を受講した生徒が大半であったが、もう一度基礎からの内容として展開した。化学の基礎知識は大体理解させることができた。 学生全員が受講したので充実した講義を展開することができた。現場で使える生きものの知識であったため学生の取り組みも積極的であった。 2. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 7名であったが、一人休学がでたため途中から6名となった。ゼミの時間をフルに使い自然体験や幼児指導に取り組ませることができた。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D」 一般や学童、幼稚園などで多くの講演や授業を実施できた。その際には、必ず研究室で飼育しているカエルたちを持参し、本物との触れ合いを重視した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 基礎学力のない学生に対する配慮や指導を改善し、強化していきたい 2. 「子どもと自然環境」ゼミでよかったと思わせる自然体験をもっと増やしていきたい。 3. 講演や出前授業の中の自然体験や疑似体験をふやし、自然好きの子供たちを増やしていきたい。	

令和6年度 「福井 昭史」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業時数の削減など教育課程の実情と、教育実習等の学生の課題とに対応した教育実践を行う。 2. 音楽の実技指導における学生の実態に合った指導方法の研究と教材の開発を行う。 3. 音楽教育の実態に沿った指導方法と評価、教材の研究を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. カリキュラム変更に伴う授業内容の精選と焦点化、指導方法の改善等、教育実習に臨む学生の実態と課題に対応した教育計画の作成と教育実践に取り組む。 2. ピアノ初心者に対する実技の指導計画作成と指導の実践、教材の開発に取り組む。 3. 各種学校園における音楽教育の実態を踏まえ、それに合った教育の在り方を研究する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
<p>1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」</p> <p>授業時数が半減した「子どもと音楽表現」では昨年度と同様に、音楽の基礎的な理論、音楽の感受と表出、それによる教育の在り方、創造的な表現活動とその教育効果に内容を精選するとともに、体験を通して知識を身に付けることができるような指導計画を作成し授業にあたった。</p> <p>基礎科目の「生活と音楽」は授業時数が半減に伴い内容の精選を図った。特に創造的な表現の活動は多くの活動時間を要することから、学生の興味・関心を高めながら指導できるよう内容を厳選した。その結果、学生の授業評価も概ね好評であった。</p> <p>音楽の表現技能に関する授業科目の「子どもの歌と伴奏法」（2年）が選択教科となったことから、1年次の「保育と音楽表現」で基礎的な技能の定着が課題となり、担当する学生の能力や技能に合った教材の開発し使用するとともに、学生個々の技能の向上を主として評価する縦断的な個人内評価の視点で学習を展開し、学生が意欲をもって学習に取り組めるように努めた。その結果、学生の授業評価では概ね好評であった。</p> <p>2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」</p> <p>音楽の表現技能向上を目指す1年生の授業科目「保育と音楽表現」のピアノ授業では、昨年度と同様に能力別のクラス分けによる指導体制とし、その中の未経験者を担当した。授業で使用する初心者用のピアノテキストは本校独自のもので、それを活用しての指導の結果、学生は技能の向上を自覚でき授業評価では概ね好評であった。</p> <p>2年生の音楽実技科目「子どもの歌と伴奏法」では市販のテキストを用いているが、学生によっては伴奏編曲の難易度が高いことから簡易伴奏を作成し指導に当たった。その結果ピアノ演奏の得意でない学生もレパートリーを増やすことができた。</p> <p>3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」</p> <p>昨年度に調査し紀要に記述した幼稚園で歌われている歌を主に、ピアノ演奏を不得手とする学生にも演奏できる簡易伴奏を作成した。その楽曲を2年生の授業科目「子どもの歌と伴奏法」の教材とした。同授業科目では後期にはピアノ連弾を課しているが、学生の好みとする楽曲で技能のレベルに合ったものが少ないことから、昨年度に引き続き教材の開発を行った。これらの結果、授業評価では概ね好評であった。</p>	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 授業時数の削減、必修科目から選択科目への変更がある科目の教育内容や方法、教材の検討を行う。 2. ピアノ授業の教材開発とその活用方法を研究する。 3. 学生の技能や能力の実態に即した教育の在り方について研究する。	

令和6年度 「濱口 なぎさ」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： ビジネス・医療秘書コース	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生が基本的な知識と技能を身に付けた上で、応用力を育むような指導を行う。 2. 学生の動向については、コース内での情報共有を行い、問題の早期発見と解決を図る。就活支援もきめ細かく行う。 3. 実践型教育プログラム期間に学生が行う活動をサポートするための体制を強化する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生が客観的な指標で自分の実力を確認できるように日商 PC 検定や MOS 試験等の検定試験への挑戦を促す。日商 PC 検定（文書作成）3 級は 2 年生全員、1 年生は 1 年次に半数以上の合格を目指す。 2. 学生が休退学に至らないような指導・助言を行う。面接指導や履歴書・エントリーシートの添削なども学生が頼みやすいような指導を心がける。 3. 6 月から実践型教育プログラムを充実させるためのシステム作りを行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 今年度の日商 PC 検定（文書作成）の受験者は 3 級が 2 年生 3 名、2 級が 1 名、1 年生の受験はいなかった。MOS 試験の受験希望者もいなかった。2 年生の 3 級取得率は 61.1%と昨年度の 2 年生の 94.1%より大幅にダウンした。3 級取得は医療事務資格の条件の一つであったため昨年度までは受験者も多かったが、2 年生の医療事務資格の希望者が 3 割程度（6 名）であることも影響したと感じている。1 年生はこれまで受験実績がほとんどなかった日商 PC 検定（データ活用）3 級を全員が受験し、92.9%の取得率となったことが影響し、文書作成の受験者がいなかった。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 コース教員 4 名中 1 名が年度当初より病気療養となったが、コース内で連携しながら学生への指導・助言を行った。残念ながら後期に 2 年生 1 名が休学、1 年生 1 名が退学となったが、予兆が無く突然の申し出であり家庭内の問題やメンタルの問題が主な理由であったため手の出しようがなかった。就職活動のサポートについては、学生への声掛けやメールでの指導・助言をきめ細かく行ったが、そのことをプレッシャーに感じる学生もおお対応の難しさを感じた。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 コース教員の突然の病気療養という不測の事態の影響もあり、予定どおりのシステム作りはできなかったが、実践型教育プログラムに取り組むための PDCA の自己評価シートを作成して記録するよう促す取り組みを行った。学生に対して定期的な更新を行うよう指導し、2 年生については面談での確認も行ったが、1 年生に対する指導・助言が十分にできなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 地域未来創生コース初年度にあたり、ノートパソコン必携の学生に対する演習授業の実施方法について、状況を確認しながら効果的な指導法を確立する。学修奨励奨学金制度の周知を図り、学生の検定受験のモチベーションを上げ、本コースでの学びに対する達成感や満足度アップを図る。 2. 新任教員との連携と情報共有を密に行い、学生が休退学に至らないような指導・助言を継続する。面接指導や履歴書・エントリーシートの添削なども学生が頼みやすいような指導を心がける。 3. 実践型教育プログラムの運用について、2 年生については従来通り 2 年後期が中心となるが、前期から自己点検評価シートを活用した取り組みを支援する。1 年生については入学時から 2 年間の活動目標の設定と自己点検評価シートへの定期的な記録をサポートする。	

令和6年度 「本村 弥寿子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ＜授業＞ ・「保育内容総論」「保育方法論」の成績でC評価が30%未満になるようにする。 ・授業評価アンケートにおいて、すべての科目で満足度80%以上を目指す。 2. ＜学務＞ ・学生満足度80%以上、就職率100%を目指し、“保育を学ぶなら女子短”を浸透させる。 ・幼大連携の取り組みの充実を図る。 3. ＜研究＞ ・担当科目の学習内容の検証を行い、授業内容改善に向けて研究を進める。 ・保育者養成校と実習施設の連携について考察を進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ＜授業＞ ・レジュメの工夫、DVDの活用等により一層理解が進む授業方法を模索する。 ・「保育実習指導」の内容の見直しを進め、学習したことが実習で活用できるようにする。 ・公開講座、ボランティア活動等地域での講演及び実践に積極的に取り組む。その際、学生の力を活かす内容で構成し、学生の学びが広がる機会となるようにする。 2. ＜学務＞ ・学生との面談や学科会議において、授業や学校生活に対する学生の思いを探り、学習及び生活支援に活かす。また、就職に対する考えを探り、キャリア支援センターをはじめた教員と連携し、適切な支援を行う。 ・附幼体験学習を基盤とした附幼との連携を模索し、学生の保育実践力の向上に活かす。 3. ＜研究＞ ・実習における指導案作成に関するアンケートを実施し、「カリキュラム論」で力を入れるべき内容についての洗い出しを行う。 ・「環境」指導法における模擬保育の充実を図り、学生の学習内容の習熟度を検証する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・「保育内容総論」「保育方法論」は、C評価が35.5%・38.9%であった。しかし、全ての科目において満足度は90%以上であり、レジュメの工夫やDVD視聴、遊びの体験の取入れなどにより、学生は授業に満足していることが分かる。 ・ゼミにおいてボランティアや公開講座等の学生が保育を実践する機会を多く取り入れたことで、満足度が上がり、S評価が80%、A評価が20%という結果が得られた。 2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・学生の学校全般に関する満足度は96%であり、学習面生活面共に充実していたと感じられるものであったようである。 ・就職活動への取り組みに個人差が見られたが、学生自身のペースで進めることができ、卒業式の時点で98.4%の就職率であった。内定先未決定の1名も活動を続けており、励ましつつ見守っているところである。 3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ・「カリキュラム論Ⅱ」のC評価が6.4%とかなり低い割合になった。指導案作成の約束事の理解が進み、加えて保育をイメージするしながら文章作成ができたものと思われる。 ・領域「環境」の指導法Ⅱは94.0%が満足した結果であった。模擬保育への取り組みに対するものであると思われる。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. すべての科目において、C評価を30%未満にするための授業改善を行う。 2. 幼大連携の充実に向けた取り組みを模索する。 3. 模擬保育の実践が実際の保育にどのように活かされるのか検証し、“指導法”の授業の充実を図る。	

令和6年度 「中村 浩美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. ①マスク着用の際にも表情豊かに明瞭な発音と歌唱指導、またイメージ力を持った音楽表現指導を強化する。 ②個人の声は個性と捉える事から人前で歌う羞恥心を軽減しながら保育現場で子どもと歌う喜び楽しさを感じ取れる指導に取り組む。 2. 学生のアドバイスや指導には学生自身が責任を持った取り組みになるよう試みる。また相談悩みを持った学生への対応には状況を見極めながら学生の話をしきようにする。 3. ①2点G・Aまでを息の流れによって無理なく出し、言葉を重んじる楽曲を奏でられるようにする。 ②学生が子どもの大好きな手遊びうたや子どもの歌に積極的に取り組める独自の教材を研究する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ①歌詞の理解やイメージ力を重んじる事から歌唱法に繋がる事を確認する。 ②歌唱法のために体幹を意識した姿勢やスクワットで使いやすくなる腹筋と腰筋、背筋の使い方、口角や表情筋アップによって出しにくかった声、出せた事のない初めての声を発見できるレッスンの積み重ねで、学生に歌唱への興味や喜びをコンプレックスなく自信を持ってたくさんの曲に触れられるよう曲の提供にも工夫をする。 2. 学生が他人事ではなく、常に協力体制を持てるための指導に取り組む。 3. ①ブレスは呼吸だけではなく楽曲のフレーズとして捉える事で曲想に色がついて動きが見えてくる。体を使う事と出したい声のイメージを持つ意識と共に体幹を鍛える意味も含めてスクワットで丹田や腹筋を強化し、上半身自身の力を抜いて出しにくい高音が出やすくなり歌唱法に繋がれる演奏を目指す。 ②学生の子どもに向ける表情豊かさ、子どもの声を拾えるための声掛けから手遊びや歌唱に移行を考察しトライしてみる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ①歌詞読みからその意味を読み取りイメージに繋げて楽曲が何を伝えているのか、何を重んじているのかを学生からの意見や思いを引き出しながら時代背景や言葉の意味も大切である事を指導し、学生も歌詞の理解とイメージで楽曲が歌いやすく音楽的になってきた事を確認できた。 ②任意ではあるがマスクを取って姿勢や表情筋、口開け、動かし方を鏡で確認しながら歌った。口角アップでの表情筋が明るい声、楽しめる歌になる事、腹筋、腰筋、背筋はスクワットを始めとした独自の体の使い方が出にくかった音域に変化が見えた。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 グループ活動でのコミュニケーションからお互いに自身の事を話す事で、人間関係の構築に値する人を受け入れながら協力体制を取れる事を指導したが、学生によるリーダー的存在によっての成果が大きかった。 3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 ①ブレスは息を吸うだけではなく、次のフレーズに移行するための大切な音楽要素であり、上半身と下半身の引き合い方で声の伸びを出しながら息の流れに沿った自然な声を出せる方法を模索しながら指導できた。 ②表情豊かな歌唱は子どもへの大きな影響を与えイメージ力を養う事になる歌唱法を指導し、子ども独自の音楽への感情を否定せず、その子が感じた声を拾いながら固定観念をもたずに進めていけるよう受講者が先生役と子ども役に分かれての授業進行は学生達の意識に変化をもたらす事ができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 任意ではあるがマスクをしていても口を大きく開けて口角をアップさせながら表情豊かな声楽授業、特に子どもの歌を子どもが楽しく興味を持って歌えるための基礎、羞恥心を少しずつ軽減できるよう工夫する。何より学生自身歌が好き、好きになったと言う声を聞けるような授業展開をする。 2. 予習・復習・調べると言った取り組みがない学生に於いて、何故それが必要であり保育現場に生きるかを意識できる授業内容の工夫をする。 3. 自身の声質、音域などにコンプレックスを持たせないための成長に繋がる歌唱レッスンを行う。	

令和6年度 「太田 美代」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：准教授
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率60%以上を目指す。 2. (学務) 食を通して社会に貢献し、自らも夢の実現に向けて前向きに努力することのできる学生を育てる。(就職率並びに学生アンケート等を指標とする) 3. (研究) 子どもを対象とした食育に関する取組を、学外の協力を得て進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 1年生の授業ではスライドとワークシートを活用し、まとめて過去問にもあたらせて知識の定着を図る。またリアクションペーパーを使って個別対応を行い、学習への意欲を喚起する。2年生は「チャレンジタイム」での修得度別グループ学習に加え、eラーニングの活用を勧め、主体的な学習を促す。担当科目の KENS の問題数を増やす。学力に関して心配な学生も多いので、可能な限り個別にきめ細かな対応で支援する。 2. キャリア支援センターとの連携のもとコースのキャリア支援の取組を進め、学生の夢の実現を後押しして就職率100%を目指す。 学生の主体的な学びを支援するとともに、学生の活躍の場を設けて自己肯定感を高め、本学での学びが将来に活きると考える学生90%以上を目指す。 3. ゼミナール活動と連携して「子ども食堂ひがなが」「附属幼稚園」等において「食育」の視点でどのような働きかけを行うことができるか方策を考え実践する。また、小学生の子どもと保護者を対象に学校保健員会で講話を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。	
1. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 栄養士実力認定試験における「給食経営管理論」での正答率は52.23%と、目標に届かなかった。7点中4点以上が19名(59%)、3点が7名(22%)、2点が4名(13%)、1点が2名(6%)と、得点が半数に満たない学生が4割を占め、中でも2点・1点しかとれない低位者が6名もいた。KENS の問題は増やしたが、活用状況の把握が不十分だった。 2. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 今年度は学生の就職活動のスタートが遅く、3月7日現在、内定率者が88%。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 「子ども食堂ひがなが」では、夏野菜についてのクイズを実施して、学生と子どもたちの交流を図った。「附属幼稚園」では、和風だしの飲み比べやみそ汁の提供を通して、体験的に日本の食文化の伝承を図る取組を実施した。自分たちが選んだ「だし」と収穫した野菜を使って「みそ汁」を調理してもらい味わう体験は、学生の参加があっただけで実施できた食育活動であったと思う。 小学校では、朝日小学校と坂本小学校の2校で「朝ごはんの大切さ」について親子で講話を聞いてもらった。子どもたちで「朝ごはんを食べるとどんないいことがあるか」グループワークで話し合いを行ったが、家庭科で学んだ知識を生かして、多様な意見の集約ができた。家庭でも話題にしていいただくことができた聞き、親子で参加する意義を感じた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. KENS を授業でも活用し、○×問題にあたる機会を増やす。卒業後の業務で重要な科目であることを折りに触れて認識させる。 2. 就活状況の把握を定期的に行い、キャリアセンターやチューターと連携して、就職活動の後押しを強化する。 3月末で退職のため、研究に関する改善策は記載なし。	

令和6年度 「古賀 克彦」 年次報告書																							
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）																							
部署名： 栄養士コース		職名： 准教授																					
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。																							
1. 栄養士養成施設協会が実施する栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】。 2. 学外実習の円滑な運営（実習先評価が A 評価の学生が 80%以上）【学務】 3. 紀要の執筆【研究】																							
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。																							
1. 栄養士実力認定試験において、担当科目である臨床栄養学と栄養教育指導論の成績向上【授業】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 毎回授業前に栄養士実力認定試験問題出題し解説を実施。また、授業において頻出分野の解説強化 ・ 定期試験に栄養士実力認定試験を一部採用 ・ 栄養士実力認定試験対策（スキルアップ特講）の内容充実 2. 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱにおいて、実習先の評価向上【学務】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 学外実習総合演習での指導強化（特にマナー指導の強化と、献立作成の能力向上） ・ 学外実習Ⅰおよび学外実習Ⅱの直前指導および事後指導強化 3. 紀要執筆【研究】 <ul style="list-style-type: none"> ・ （新たにコース長と栄養士会会長崎支部長に就任して業務量が増えたが）計画的に準備を行い執筆する。 																							
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。																							
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和6年度栄養士実力認定試験の正答率は昨年より上昇し、平均点も短大平均を下回る結果となった。臨床栄養学は昨年度より正答率が上昇し、平均得点も短大平均を上回った。しかしながら栄養指導論の正答率は昨年を下回り、平均得点も短大平均を下回る結果となった。今年度は全体の点数が短大平均をわずかに上回っており、成績は若干、上昇傾向にあると思われた。次年度は全国平均を超える成績を目指し、過去問を繰り返し説くだけでなく内容を正確に理解できるように、栄養士実力認定試験対策講座の内容をさらに充実させていきたい。 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th>科目名</th> <th>全国平均(正答率)</th> <th>短大平均(正答率)</th> <th>本学(正答率)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>臨床栄養学 (6 点満点)</td> <td>4.29 点 (71.5%)</td> <td>3.92 点 (65.3%)</td> <td>4.00 点 (66.7%)</td> </tr> <tr> <td>栄養指導論 (6 点満点)</td> <td>4.12 点 (68.7%)</td> <td>3.66 点 (52.3%)</td> <td>3.13 点 (52.2%)</td> </tr> <tr> <td>全体 (85 点満点)</td> <td>54.99 点 (64.7%)</td> <td>50.65 点 (59.6%)</td> <td>51.50 点 (60.6%)</td> </tr> </tbody> </table>				科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)	臨床栄養学 (6 点満点)	4.29 点 (71.5%)	3.92 点 (65.3%)	4.00 点 (66.7%)	栄養指導論 (6 点満点)	4.12 点 (68.7%)	3.66 点 (52.3%)	3.13 点 (52.2%)	全体 (85 点満点)	54.99 点 (64.7%)	50.65 点 (59.6%)	51.50 点 (60.6%)				
科目名	全国平均(正答率)	短大平均(正答率)	本学(正答率)																				
臨床栄養学 (6 点満点)	4.29 点 (71.5%)	3.92 点 (65.3%)	4.00 点 (66.7%)																				
栄養指導論 (6 点満点)	4.12 点 (68.7%)	3.66 点 (52.3%)	3.13 点 (52.2%)																				
全体 (85 点満点)	54.99 点 (64.7%)	50.65 点 (59.6%)	51.50 点 (60.6%)																				
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 令和6年度の学外実習Ⅰ・Ⅱの評価は以下のとおりとなった。受講態度は昨年度と比較し二極化しているのは例年通りだが、全体的は S や A の成績の学生が増加した。来年度も S や A の成績の学生の割合は維持しつつ、C 評価の学生が減るように、低評価になりそうな学生の指導にも注力していきたい。 <table border="1" style="width: 100%; text-align: center;"> <thead> <tr> <th></th> <th>S</th> <th>A</th> <th>B</th> <th>C</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>学外実習総合演習</td> <td>5 名(15.63%)</td> <td>18 名(56.25%)</td> <td>7 名(21.88%)</td> <td>2 名(6.25%)</td> </tr> <tr> <td>学外実習Ⅰ</td> <td>7 名(21.88%)</td> <td>10 名(31.25%)</td> <td>12 名(37.5%)</td> <td>3 名(9.38%)</td> </tr> <tr> <td>学外実習Ⅱ</td> <td>6 名(18.75%)</td> <td>6 名(18.75%)</td> <td>15 名(46.88%)</td> <td>5 名(15.63%)</td> </tr> </tbody> </table>					S	A	B	C	学外実習総合演習	5 名(15.63%)	18 名(56.25%)	7 名(21.88%)	2 名(6.25%)	学外実習Ⅰ	7 名(21.88%)	10 名(31.25%)	12 名(37.5%)	3 名(9.38%)	学外実習Ⅱ	6 名(18.75%)	6 名(18.75%)	15 名(46.88%)	5 名(15.63%)
	S	A	B	C																			
学外実習総合演習	5 名(15.63%)	18 名(56.25%)	7 名(21.88%)	2 名(6.25%)																			
学外実習Ⅰ	7 名(21.88%)	10 名(31.25%)	12 名(37.5%)	3 名(9.38%)																			
学外実習Ⅱ	6 名(18.75%)	6 名(18.75%)	15 名(46.88%)	5 名(15.63%)																			
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 令和6年度の紀要は必ずしも計画的に執筆されたとは言えない状況であった。コース長業務に加え、本学代表として栄養士会の業務、学外実習関連の業務を行いながら研究活動を行うことは難しく、次年度も同様の状況が続くが、令和7年度はなんとか改善できるように改善したい。																							
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。																							
1. 栄養士実力認定試験の成績向上(授業) 栄養指導論の成績向上のため、頻出分野を分析し、授業内の演習量を増やす。また、過去問の反復だけでなく、理解度向上を目的とした解説教材を作成し、受講生に配布する。更にスキルアップ特講の受講率向上のために動機づけ施策を講じる(例:小テスト実施による達成感の提供、フィードバック強化)。																							
2. 学外実習の評価向上(学務) 低評価になりそうな学生への個別指導を実習前に強化し、マナーや献立作成スキルの補強を行う。また、実習後の振り返りをより充実させ、学生の反省点と成功例を共有する場を設ける。更に実習先との連携を強化し、具体的な改善要望を収集し、指導方針に反映する。																							
3. 紀要執筆(研究) スケジュールを再調整し、業務時間内に短時間でも研究活動に取り組める時間を確保する。また、研究テーマを学外実習や授業と関連づけ、実務と研究の相乗効果を生むように工夫する。																							

令和6年度 「荒木 正平」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当授業の内容充実と、学習成果の向上。保育実習Ⅲの実施体制の強化（担当教員変更に伴う情報共有等も）。 2. 「学生相談室」に関する連携体制の確立と、「キャリア支援」における業務の充実化（いずれも、担当教員変更に伴う情報共有等も）。 3. 学会・研究会に向けて研究成果をまとめ、報告を行う（論文掲載、または学会での発表）	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 講義形式の科目では、教科書を中心に知識の定着を図る。あわせて、学生が興味を持って取り組めるよう保育現場での支援を具体的に想定した資料、DVD などの教材も活用する。演習形式の授業では、個別・グループでのワークを組み合わせ、学習効果向上に努める。保育実習Ⅲについては、学生の卒後のキャリアも見据えつつ、意向をよく確認しながら実施を進める。 2. 「学生相談室」については、担当教職員の変更に伴い、連携体制の確認・強化に適宜関与し、学生等にとってより適切な支援を実施できるよう努める。「キャリア支援」については、支援センター長とも連携し、より充実した体制整備を進める。 3. テーマごとにデータ収集を早期から計画的に進め、研究成果報告につなげる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 本年度も引き続き通常授業による基礎知識の定着と、演習形式での授業実践を併せて実施した。幼児教育学科だけでなく、生活創造学科においても、テーマを設定してのレポート学習を導入し、学生の意欲を引き出す取り組みが実施出来た。保育実習（施設実習）については担当教員の変更に合わせて、情報共有と引継ぎを行いながら協力しての実施体制を整えることで、施設との連携、学生指導含めて前年と変わらず円滑に実施できた。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 「学生相談室」業務においては、常勤の相談室長に情報共有と引継ぎを行い体制の充実をはかることができた。「キャリア支援」についても、これまでの支援内容と支援体制を見直し、継続するものと廃止するものを分けて実施することができた。県こども未来課との協力や、諫早市保育会による学内説明会なども体制を見直し、よりよい学生支援につなげることができた。	
3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 前年度の学会発表をもとに、査読付きの学会論文への投稿準備を進めている。。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 令和6年度末で退職となる。 2. 3.	

令和6年度 「船勢 肇」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 講義の授業について、専門的な論文を読むアクティブラーニングを取り入れる。 2. 教務委員長として、他の委員の意見を取りいれつつ、各教務事項の向上を図る。 3. 学会誌への投稿を目標とする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生の理解の定着を確認しながら、専門論文を紹介し、発表・課題提出をおこなう。 2. 特に、事務局との連携をとりながら、教務の円滑な遂行と向上につとめる。 3. 研究時間の確保に努める。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生は難しいと感じつつも、論旨を理解することには到達できたと思われる。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 特に教務委員会は発言しやすい雰囲気が保たれていたと思われる。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 研究時間はやや確保することが出来た。次年度に具体的に進捗するための準備をおこなえた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ひきつづき、新聞や論文に挑戦してもらいたいが、最新の行政の情報を取り入れておこなう。 2. 3. 紀要論文に加え、学会誌の掲載を目指す。	

令和6年度 「野田 章子」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学内業務を把握し、積極的に活動する。 2. 授業の質を高め、学生の満足度を向上させる。 3. 論文や学会発表で研究成果を発表する	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生支援委員長としての責務を果たす。 2. 授業形態、配布資料などを工夫し、学生の理解を助長する。 3. 学会発表および論文の投稿をする。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 1年間学長支援委員長として、業務を遂行することができたことは成果である。 しかしながら未だ多くの問題点を抱えているため、来年度はすこしずつ改善していきたい。 2. 自己評価「 S・ <u>A</u> ・B・C・D 」 多くの学生が満足してくれているので、授業の質は担保できたと思う。 来年度も継続したい。 3. 自己評価「 S・A・ <u>B</u> ・C・D 」 学会発表は日程があわずできなかったが、長崎女子短期大学の紀要に論文を投稿することができたのは成果である。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生支援委員長として新しい取り組みを提案し、問題を解決する。 2. グーグルクラスルームなどを使って授業を改善する。 3. 論文と学会発表に取り組む。	

令和6年度 「桑原 真美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 栄養士コース	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 1年次開講科目の「食品衛生学」「栄養学Ⅰ(基礎栄養学)」について、学生による授業評価アンケートにおける「全体的な満足度」の平均4.5以上を目指す。 2. 募集広報委員として、令和7年度栄養士コース入学生の定員充足率8割以上を目指す。 3. 紀要を最低1本執筆する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 昨年度の授業評価アンケートでは、全体的な満足度が食品衛生学(4.4)、栄養学Ⅰ(4.3)であった。学生の学習意欲や理解度がこの満足度に影響していると考えられる。今年度はKENSを利用し、授業の冒頭に復習を目的とした確認テストを行うことで学生自身に理解度を把握させ学習意欲の向上につなげる。また、教員側も学生の理解度が低い内容についてリアルタイムでフォローを入れることで学生の理解度の向上に努める。 2. オープンキャンパスや体験学習、料理レッスン等、外部への情報発信に関わるイベントに力を入れる。また、SNSの更新などの広報活動も積極的に行う。 3. 昨年度から導入しているeラーニングシステム「KENS」についてその効果の検証のためのデータ収集および分析を行う。今年度は1年次開講科目でのKENSの使用実績を作り、成績や満足度に与える影響についても検証を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 学生による授業評価アンケートにおける「全体的な満足度」は、「食品衛生学」が4.5、「栄養学Ⅰ(基礎栄養学)」が4.4であった。栄養学Ⅰは目標に0.1ポイント届かなかったものの、前年度より0.1ポイント上昇した。学生の学習意欲についての評価は両科目とも4.5以上であり、意欲的に取り組んだ学生が多かったことが伺えた。しかしながら理解度については「食品衛生学」が3.8、「栄養学Ⅰ(基礎栄養学)」が3.6にとどまった。 2. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 昨年度のオープンキャンパス参加者アンケートにて「学生が作ったものを食べてみたい」という意見があったため、今年度は栄養士コース体験学習にて学生が製造したパンをビュッフェ形式で参加者へ提供した。また、料理レッスンは3回の開催を予定していたが、2月実施分は積雪のため中止となり、計2回の参加者数は延べ10名(実人数8名)にとどまった。残念ながら今年度の料理レッスン参加者からの入学はなかった。SNSについては積極的に更新することができなかった。3月14日時点での栄養士コース入学者の確定数は29名であり、共通テスト利用選抜の2名が入学した場合でも31名に留まる。定員充足率72.5%～77.5%という結果となり、目標の80%には届かなかった。 3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 今年度は、長崎女子短期大学紀要第50号に栄養士養成のためのeラーニングシステム導入についての研究報告を1本執筆することができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学生による授業評価アンケートにおいて全体的な満足度や学習意欲は高い値を示したものの、学生の理解度は3点台後半となっている。今後の授業改善のためには理解度をいかに向上させるかが課題となる。入学して初めて履修する科目であることに加え、生物化学の知識が必要な科目であることから理解度を向上させるのは簡単ではない。次年度入学生からPC必携化となるため、Google クラウドルーム等を活用した質問受付なども実施したい。 2. 次年度は募集広報委員会所属ではなくなるが、オープンキャンパスや料理レッスン等引き続き力を入れて行っていく。また、入学者増へ向けての取り組みについてコース内で協議し実行していきたい。 3. 今年度はeラーニングシステム導入の効果については未検証であるため、次年度は栄養士実力認定試験の成績に及ぼした影響について経年変化を含めた検証を実施したい。	

令和6年度 「三原 ミヨ子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当教科の授業内容の充実を図り、わかる授業を目指す。保育の専門知識、技術の習得。 2. オープンキャンパスや学外活動を通して、学科の魅力や乳児保育を学ぶ楽しさを伝える。 3. 幼児教育や保育の研究会へ参加し、教員としての資質能力向上に努める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業の構成、講義資料や教材を練り、ジグソー教育やグループワーク等、主体的な学びができるような活動場面を取り入れ、学生に興味や関心が湧く授業を実践する。ICTの活用、視聴覚教材の効果的な導入 2. オープンキャンパスでは、参加高校生が学ぶ楽しみを実感できるような保育実技の体験、展開をする。ボランティアを希望する学生への呼びかけや安心して参加できるような支援体制づくりを行う。 3. 研究会や教育に関する講座等に積極的に参加し、自己研鑽を積む。 研究テーマに沿って、計画的に進め、論文を作成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・授業後のリフレクション、学生の意見をもとに構成を考え授業展開していった。PowerPointによる講義や、映像視聴、事例問題では、ジグソー教育やグループワークによる協働学習により、学生に考えさせる場面を設けた。学生参加型の展開をすることで意見発表や学びの共有もでき、学生の満足度も得られた。	
2. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・夏のオープンキャンパスでは、多くの参加者があり、沐浴体験を実施。高大連携の取り組みでは、1年生を対象に新生児の特徴を知ること、抱っことおんぶの体験を実施。アンケート調査では参加者より概ね高い満足度が得られた。参加者が興味関心を寄せ、保育実技の体験ができるようさらなる工夫を凝らしていきたい。 ・学生へのボランティア参加の呼びかけを実施。また、まち歩き双六大会では、学生と伴に参加した。ゼミナール活動において、図書館の担当者と事前打ち合わせを行い、就学前の子どもたちへ絵本の読み聞かせや親子でふれあい体験活動の実施ができた。	
3. 自己評価「S・ A ・B・C・D」 ・医療的ケアの研究会や防災セミナー、Web研修、看護教育研究会へ参加した。全国保育士養成協議会九州ブロックセミナーが県内の大学会場で行われ、他の養成校の教員と意見交換ができ、学びとなった。 ・担当している科目の子育て支援に関する研究をまとめ、本学の紀要へ投稿を行った。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 教科指導力に努め、「わかる授業」を目指す。リフレクションシート活用の継続。ICT活用としてもっとGoogleclassroomを使用し、小テストや課題の添削等、教材研究をし、学生参加型の授業構成・展開を実践していく。 2. オープンキャンパスや高大連携の授業では、保育の実践演習の創意工夫を行い、参加者のさらなる満足度向上を図る。ボランティア活動の活性化 3. 本学紀要への論文投稿の作成、学会への論文投稿へ向けて研究を計画的に進める。 今後も研究会やセミナーへ参加し、自己啓発を図る。	

令和6年度 「山中 慶子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生が保育現場で活かすことができる知識・技術の習得を図る。選択科目を履修する学生には、学生の実態に寄り添い、より実践的な学びが出来るようなカリキュラム構成を目指す。授業評価 4.2 以上。 2. オープンキャンパスや公開講座など学外への広報活動を実践する。また、学生支援委員会による学友自治会の支援体制を整え、スムーズな運営ができるようにする。 3. 博士後期課程において幼児造形についての学びを深め、自身の研究に活かす。幼児期の造形活動における自己決定要因の研究を軸に、研究活動を進める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 「子どもと造形表現（基礎）」から、「子どもと造形表現（応用）」「子どもの絵と製作Ⅰ・Ⅱ」へステップアップできるようなカリキュラム構成を検討する。より学生の実態に即した内容にする。 2. 夏休みの小学生親子対象の公開講座を継続する。学生支援委員会では、特に弥生祭のスムーズな運営を支援する。 3. 幼稚園、及び小学校での観察・分析を基に、学術論文を1本以上執筆する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 「子どもと造形表現（応用）」（選択科目）を履修した学生は、34名。「子どもの絵と製作Ⅰ」（選択科目）を履修した学生は45名であった。1年生63名のうち、どちらの選択科目においても半数以上の学生が履修し、造形に関する学びを得ることができたのではないかと考える。 2. 自己評価「S・ <u>A</u> ・B・C・D」 今年度も公開講座を実施し、定員を満了参加があった。また、これまでの公開講座の実施内容をまとめ、造形表現における公開講座の課題を紀要として執筆することができた。弥生祭は、学生を主に運営できたと思う。 3. 自己評価「 <u>S</u> ・A・B・C・D」 今年度は、学会論文2本、実践学論集1本を投稿し、採録された。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 昨年に比べて、選択科目の履修者が多く、作品制作の進捗にばらつきがあった。これまでは、比較的得意な学生が多かったが、苦手だけれど学びたいという学生にも対応した内容や、シラバスの内容を検討する必要がある。 2. 今後、公開講座では、補助員として参加の学生（ゼミ生）の学びになるような構成も考えていきたい。 3. 次年度、これまでの論文を整理し、博士論文としてまとめていきたい。	

令和6年度 「小槻 智彩」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名： 幼児教育学科	職名： 講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 担当授業について、受講生が各授業で定められた到達目標を達成できるように授業を行う。 2. 学生相談室について、学生が学校生活を安心して送ることができるような対応を行う。 3. 研究活動について、幼児期の人間関係として子どもの約束の発達過程を検討し、心理学の視点から保育・教育実践に資する研究成果をまとめる。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 受講生が授業内容に関心をもつことができるよう視聴覚資料や事例を使用する。また、受講生が授業内容や指示を理解しやすいように説明や教材を工夫するとともに、ミニツツペーパーや小テスト、課題を使用して受講生の理解度を把握しながら授業を行う。 2. 個々の学生の状況を理解しながら対応し、必要に応じて関係部署・教職員と連携しながら相談対応を進める。 3. すでに収集している観察データを用いて、子どもの約束の発達過程に着目した分析を行い、学術論文として発表する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 授業評価アンケートの結果をふまえると、総じて受講生の興味・関心に合った、適切なレベルの授業を実施することができ、受講生の全体的な満足度に繋がったと考えられる。学生の理解度については、受講生にとって内容やレベルは適切だと感じられても、授業内容を理解している実感が伴っていない可能性があるため、授業期間を通して受講生の理解度を把握する必要がある。また、受講生によって理解度に差異があるため、授業内容や実施方法を検討する必要がある。	
2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 相談室員および関係部署・教職員と連携しながら相談対応を進めた。学内での連携方法については、相談ケースに応じて検討する必要があった。	
3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 収集した観察データを用いて、子どもの約束の発達過程に着目した分析を行い、本学紀要に論文を投稿した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 担当授業：今年度の活動内容や方法を基本的に継続する。ただし、受講生の理解度向上を目的として、ミニツツペーパー等を活用し、定期的に理解度を把握する。その内容をもとに、授業内容や実施方法を改善する。また、受講生が授業内容を理解した実感を持てるよう、よりわかりやすい説明を行うとともに、学習到達度を振り返る機会を定期的に設ける。さらに、個々の受講生の理解度に応じた課題を設定し、受講生が満足できる授業設計を行う。 2. 学生相談室：学内外との連携方法を引き続き検討し、適切な支援体制の構築を進める。 3. 研究活動：心理学の視点から、保育・教育実践に貢献する研究を継続して行う。	

令和6年度 「江頭 万里子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：ビジネス・医療秘書コース	職名：特別基幹講師
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 授業：学生の満足度を上げる。 2. 研究：ゼミナール活動で学生が身に付けることについて 3. 学生支援：学生が研究室を訪問しやすい環境をつくる 4. その他：マナー指導を徹底する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 授業：マナー学では、資料の形式をパワーポイント形式に変えた。秘書実務では、予習用のワークシートを回収後、コメントを入れて返却し不明な点を残さないようにした。 2. 研究：ゼミナール活動で磨かれた能力について研究活動報告書に報告した。 3. 学生支援：オフィスアワー指定の時間外でも、在室時は随時訪問を受け付けた。 4. その他：授業時の出席確認の時間に、学生に自信のマナーについて実践目標を設定させ、実践後の振り返りを行わせた。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 個人が担当した科目において学生による授業評価の「授業の全体的な満足度」は 4.2～4.6 で、秘書実務2（4.4）を除き、全ての科目で前年度より上がった。	
2. 自己評価「 S・ A・ B ・ C・ D 」 紀要にまとめることができなかった。	
3. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 検定試験に関する相談・質問、就職面接試験の相談、履歴書の添削依頼などの訪問に対応した。	
4. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 学生が書いたマナー実践・振り返りシートは、毎回提出させ、数名ずつコメントを入れて返し学生がモチベーションを維持するように心がけた。今年度も近隣からバスマナーに関してクレームを受けることはなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ワークシートや資料の内容を検討し、学生の理解度を上げる。 2. 次年度もマナー実践・振り返りシートを使用し、学生が日常においてマナーを心がけるように促す。	

令和6年度 「太田 智子」年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：助教
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 調理学における学生の理解度向上を図り、授業アンケート 4.0 以上を目指す。 2. 紀要・図書委員会として、図書館利用者を増加させる。 3. 紀要を1本以上執筆する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. Google Classroom を活用して授業のまとめや質問事項などを毎回提出してもらい、疑問点はすぐに解決できるよう努める。また、学習を習慣づけるため、定期的に練習問題を配信する。 2. 授業で図書館を利用する機会を設ける。さらにレポートの参考文献には書籍を含めることとし、利用者の定着を図る。 3. 計画的に取り組み、年内に完成させる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「S・A・B・ C ・D」 調理学では主に資料の配付（紙媒体も併用）、練習問題の出題、リアクションペーパーの役割として Google Classroom を活用した。練習問題はあくまでも自主的な学習習慣を身につけるためのツールであり、解答は任意とし成績へは反映しないこととした。その結果、定期的に解答した学生は2～3人に留まった。試験前には10名前後に増加したものの、全体の1/3程度しか利用しておらず、学習習慣を身につける手段にはならなかった。また、リアクションペーパーの役割として授業後に質問等を受け付けており、質問があった際は次の授業や個別の返信で回答していたが、15回の授業で3件程度であった。	
2. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 ゼミナールを図書館で実施する機会を設けた。また、調理学実習Ⅱ、Ⅲにおいてレポートの参考文献に書籍を用いることを推奨した。しかし、教科書を用いる学生が多く、利用者の増加および定着には至らなかった。	
3. 自己評価「S・A・ B ・C・D」 紀要1本を執筆したが、年内に完成させることはできなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. Google Classroom を有効に活用できるよう、まずは使い方を丁寧に伝えて学生が理解できるよう努める。また、引き続き練習問題を出題し、学習習慣づけのツールとなるかどうか検証を行う。 2. レポート作成時には書籍を用いることとする。さらに、書籍の紹介や図書検索のキーワードなどを伝え、まずは「書籍から必要な情報を探す」ことの難易度を下げる。これを繰り返し図書館利用者の増加と定着を図る。 3. 研究テーマを早期に設定し、夏季休業中に進められるよう計画的に取り組む。	

令和6年度 「石橋 花琳」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 実習助手間や教員との報告・連絡・相談を徹底する 2. 調理実習が時間内に終了できるようサポートを行う。 3. 課題等の遅れや未提出がないよう、学生のサポート行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生の様子で気になる点や授業に関することについて、報告・連絡・相談を行い情報を共有する 2. 授業内容を把握し、事前準備を十分におこなう。 必要な器具等を記録しておくなど、次年度を見越した行動をとる。 学生の様子をよく観察し、素早い行動を促す。 3. 全体へのアナウンスをメインにサポートする。課題の提出遅れ等が目立つ学生には、個別に声掛けをおこなう。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ <input type="checkbox"/> A・B・C・D 」 学生の様子について気になる点があった場合には、その都度報告・連絡・相談をおこない、情報を共有するよう努めた。	
2. 自己評価「 S・A・B・ <input type="checkbox"/> C・D 」 今年度新しく担当することになった科目が多く、余裕を持った行動ができていなかった。引継ぎの不足や教員への確認が不足していた点もあり、事前準備が十分にできていたとはいえない結果になった。しかし、今年度の授業準備に関しての気づきを記録しておくことで、次年度、スムーズに授業のサポートができるような行動を心掛けた。学生の様子はよく観察し、班内での協力を促す、効率の良い行動の仕方を指導する等の声掛けをおこなったが、全体的に授業時間を超過することが多かった。	
3. 自己評価「 S・A・B・ <input type="checkbox"/> C・D 」 まずは全体へのアナウンスを口頭だけでなく、板書やメール等も活用し実施した。課題の提出遅れが目立つ学生に対しては、個別に声掛けやメールでの連絡を実施し提出を促すことができた。しかし、それでも提出が滞る者もいた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 次年度は、さらに助手・教員間での報告・連絡・相談を徹底し、情報を共有していく。確認をこまめに行う。 2. 引き続き、授業準備についての気づきは記録を行い、次年度を見越した行動を意識する。 自身が助手を担当している科目の、担当教員が変わるため、今まで以上に確認を密に行っていく。 学生の意識が改善するような声掛けの方法を模索する。 3. まずは学生の主体性を尊重し、全体へのアナウンスをメインに今年度同様サポートをおこなっていく。	

令和6年度 「有得 結」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教員や他助手との報告・連絡・相談を密に行う。 2. 授業がスムーズに行えるように準備を行う。 3. 「栄養士実力認定試験の短大平均を上回る者 60%以上および A 認定 50%以上」というコースの目標を達成できるよう、主に資料準備・分析でサポートする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 日頃から目配りを心掛け、授業に関することや学生の様子など気になった点は報告・連絡・相談をする。 2. 昨年の記録を基に、授業日から逆算し計画的に行動する。 担当教員との事前打ち合わせもしっかり行う。 3. 実力認定試験前に開講される栄養士スキルアップ特講において、模擬試験準備等でサポートにあたる。また、各自の得意分野・苦手分野を把握できるようなデータを作成する。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 教員や他助手との報告・連絡・相談に関してはコース会議等で意識して行うことができた。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 授業がスムーズに行われるよう、事前に担当教員との打ち合わせや実験試料・試薬の準備を計画的に行った。1年生の実験において TA（ティーチングアシスタント）の実験操作等の補助があり、授業をスムーズに進めることができた。	
3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 栄養士実力認定試験の結果、短大平均を上回る者は 50%（16 名／32 名）、A 認定は 50%（16 名／32 名）と短大平均・A 認定を上回る目標は達成できなかった。「栄養士スキルアップ特講」では、問題毎に正答率を算出しまとめた資料を毎試験ごとに作成した。コース教員全員に配布し、学生に正答率が悪い分野について伝えることができた。しかし各自の得意分野・苦手分野を把握できるデータを作成することができなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 報告・連絡・相談は引き続き意識して行い、学生への支援・声掛けは必要であれば行う 2. 今年度の授業記録を基に、授業の準備を行う。 3. 正答率の分析は引き続き行っていきたい。分析結果や学生の話から「生化学」「解剖生理学」「食品学」に苦手意識がある学生が多いことがわかった。栄養士実力認定試験において問題数も多く重要な教科である。チャレンジタイム等を利用して知識・理解を深められるよう対策を考える。	

令和6年度 「松尾 知華」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：栄養士コース	職名：実習助手
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 教員、実習助手間での情報共有を密にし、状況を把握した上で対応する。 2. 授業が円滑に進むよう、準備・補助を行う。 3. 調理実習が円滑に進むよう、準備・補助を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生については、授業の様子、学生生活状況を随時報告し共通理解を図る。 行事等の業務においても進捗状況など密に報告し進めていく。 報告・連絡・相談を徹底する。 2. 授業内容に不明な点がある場合は、事前に担当教員に確認を行う。 授業中は周囲をよく観察し、教員や学生を補助し円滑に授業が進むように努める。 3. 実習内容を頭に入れ、示範がスムーズに行えるよう、教員の補助を行う。 学生の様子を把握し、積極的に声掛けを行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 情報共有においては、毎週行われるコース会議で密に行えた。助手間及び担当教員とも密に声掛けを行いながら業務にあたることができた。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 計画書や昨年度の授業ファイルを確認し、不明な点は担当教員に指示を仰ぎ、事前に準備するよう徹底した。しかし、実際授業が始まった際、十分に対応できず迷惑をかける部分があった。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 示範を行う工程の確認を事前に行い、準備はできたが、示範中の補助が的確にできなかった。 学生の様子は観察が必要な学生にばかり目が行っていたため、全体的な把握ができていなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 次年度も栄養士コース会議が1週間に1回と密に行われるため、気になる事項については引き続き情報共有を行いながら業務にあたる。 2. 計画書を見て細かく把握することに加え、各回の授業の前にも担当教員と密に確認、準備を行う。 3. 事前に示範の工程確認を引き続き行い、示範中も教員の様子を見て器具出しや調理補助を徹底する。 調理実習は毎回班が編成されるため、学生の様子を見て、遅れている班には声掛け、指導を徹底する。	

令和6年度 「高井 達司」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務局長兼入試広報室長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
<p>1. 自身も含め、個人の事務処理能力を超える業務量とならないよう業務分担を図りたい。入試業務についてはこれまでも他の職員の助けを借りてきたが、その他の業務についても他の職員の協力を仰ぎたい。自身の能力と相談しながら最大限のパフォーマンスを発揮したい。</p> <p>2. 事務局職員の能力を最大限に引き上げる。</p> <p>3. 学長運営方針を常に意識し、その実行を最優先させる。</p>	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
<p>1. 職員の産休取得に伴い、特に学生課・入試課における業務体制の変更を余儀なくされた。然しながら募集活動の停滞は許されないので、他者の協力を仰ぐとともに、自身の能力と相談しながら最大限のパフォーマンスを発揮したい。</p> <p>2. 潜在能力の高さにも関わらず、大学職員として、その能力を引き出す機会が少ない。昨年度に継続して事務局会議を定期的に行うことで、事務局職員一人ひとりが学校改革に向けたその当事者であることを再認識させたい。そのためにも運営委員会等において、提案・発言する機会を作りたい。</p> <p>3. 本年度学長運営方針に掲げた4つの努力目標達成には、何れも高い提案力と職場へのロイヤリティーが求められる。自身も含めその体現者となる。</p>	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
<p>1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 事務局長と入試広報室長との兼務がもたらす弊害は大きく、昨年度多くの業務が綱渡りの状態であった。それは業務範囲、事務量ともに通常想定されるものを超えており、これにより大学が抱える大きな課題や、重要テーマに向かう余裕、加えて学長補佐が出来ないことにあった。</p> <p>2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 文書会議を含め、今年度も2回の事務局会議を開催した。日常において学校改革の当事者であることを認識していることが垣間見えた。</p> <p>3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 学長交代があったことに加え、本年度も多忙を理由に時間を掛けこれに取り組む余裕がなかった。</p>	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
<p>1. 学内分掌の見直しを図り、次年度より各部署複数対応を可能とした。これにより垣根を越えた協同体制を確固なものとしたい。</p> <p>2. 次年度も継続してこの会を充実したものとしたい。</p> <p>3. 学長の運営方針を行動規範とし、これを全ての教職員が共有するよう心掛けていきたい。</p>	

令和6年度 「原田 実輝」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：キャリア支援センター	職名：キャリア支援センター長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. キャリア支援センター利用の活性化を図ると共に、学生が利用しやすい環境を整備する。 2. 業務内容を見直し、業務の効率化を図る。 3. 事業主や各種団体等との情報交換に努める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 学生が知りたい情報に素早くたどりつけるよう、わかりやすいファイリングを行う。 2. 引き続き業務の分類、見直しを行ない、基本的なマニュアルを作成する。 3. 事業主側から卒業生の情報や企業の求める人物像、業界の情報等を収集し、応募する学生とのマッチングを図る。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 保育職の県外求人資料の整理と県内の地域別クリアケースの整備、一般企業のパンフレットを業界別に分類してファイリングし、学生がより簡単に探せるように配置した。 学生のキャリア支援センター利用に関しては、頻繁に相談、報告に来る学生と、ほぼ利用しない学生との二極化が顕著であった。 2. 自己評価「 S・ A・ B ・ C・ D 」 派遣職員との業務分担が思ったようには進まず、効率化は図れなかった。 マニュアル作りはまだ一部ではあるが、少しずつ着手することができた。 3. 自己評価「 S・ A ・ B・ C・ D 」 事業主や各種団体からの訪問希望には可能な限り応え、情報交換は積極的に行うことができた。 どこも人手不足で学生の紹介を切に希望されており、その都度学生に紹介したが、なかなか学生の希望とはマッチせず、応募に至らないケースの方が多かった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. ガイダンス等を通じて、キャリア支援センターの利用を促していくと共に、引き続き学生が利用しやすいよう環境整備を行う。 2. キャリア支援委員のメンバーと派遣職員も新しく変わるので、業務の分類、役割分担の見直しを図り、円滑な業務の遂行に努める。 3. 就職先調査に備え、事業主との関係性を高められるよう、日頃から密にコミュニケーションを図る。	

令和6年度 「宮崎 伸一郎」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務次長
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 会計課業務の効率的かつ正確な遂行を目指す。 2. 事務局全体において業務分担や連携ができるよう情報共有の体制強化。 3. 国の修学支援等の学生支援に係る業務の理解、遂行 4. 施設設備の点検、整備、改修	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 計画的かつ早期の対応・処理。毎月の補助資料作成・活用。 2. 報告・連絡・相談、および協力体制の確立。 3. 国の修学支援制度の的確な運用・各部署との連携。 4. 経年による不備個所の確認可能であれば改修。照明のLED化の推進。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 会計課1名は採用後1年以上が経過。お互い相談、確認を行いながら業務を行い、滞りなく対応、処理ができた。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 今年度より事務局職員が1名増え業務の細分化ができ、例年に比べ格段に情報共有ができたと思う。	
3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 主担当の学生課職員が産休等により新しい担当で対応・処理を行ったが、大きな不具合もなく処理ができたと思われる。また申請が遅れて後期直前の採用された学生もいたが、問題なく処理ができた。	
4. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 年度初めの予算確保分についてはもちろんだが、施設設備の改修にも滞りなく対応できた。しかし、施設が老朽化しているため、耐震化も含め検討が必要と考えられる。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 会計担当者の業務知識・経験の手助けを行い、会計業務の遂行を行う。 2. 事務局会議（SD 研修）等を行う。更に各自のスキルアップに努める。 3. 事務局職員全員が理解し対応ができるような体制づくりが必要と思われる。 4. 修理、更新が必要な個所の計画的な対応を行う。	

令和6年度 「森口 和美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 入試広報室の業務を兼任していることから、計画的に課員と連携を図り、教務課の業務を滞りなく遂行する。 2. 原田記念奨学金制度及び総合型選抜入試の内容が変更になる為、遺漏なきよう対応する。 3. 本学 SNS の積極的活用促進に努める。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 昨年よりも進学ガイダンスに出向く機会が増える見込みであることから、課員と連携を図り、業務を計画的に遺漏なきよう遂行する。 2. 奨学金制度や入試内容をしっかり確認し、進学ガイダンスや関係高校連絡協議会等で説明できるようにしておく。 3. 学生アンバサダーに1人週1回ペースでInstagramの掲載依頼を行う。掲載頻度等をもとに報酬制とし、積極的なSNS活用につなげ、学生募集に役立てる。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 課員との連携は取れていたが、計画的に業務遂行がなかなか進まず、遅れが生じることがあった。次年度は計画的に行えるように、時間がある時に先を見据えて業務遂行に努める。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 進学ガイダンス等での説明は問題なく行えた。 3. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 積極的に呼び掛けは行ったものの、文章の添削等時間が取れず、昨年よりは投稿数は増えたが、学生募集に繋げるとまではいかなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 課内の情報共有を密に行い、遺漏なきよう業務を遂行する。 2. ガイダンス等で使用できるような学科コース独自の広報物を作成したい。 3. SNS 活用について、学科コースと連携を図りながら推進していきたい。SNS の活用に協力してくれる学生を募集し、学生募集に繋げていきたい。	

令和6年度 「林田 翔太郎」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（教務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学務システム（以下「システム」）の管理及び改修に取り組み、更なる業務内容の見直し及び効率化並びにペーパーレス化に取り組む。 2. ICT を利活用した学修支援の推進に向けたシステム及び Google Workspace の活用を検討する。 3. 必要に応じて学則をはじめとした諸規程の改正に取り組む。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. システムの学内サーバー移行後の管理体制の検討及びシステムの追加機能（各種通知機能や学生の父母等） 2. ICT を利活用した学修支援体制の構築に向け、教員の Google Workspace 利活用状況調査及び学生の PC 所有状況等の調査並びに事務局会議等で学生のノート PC 必携化（全学一斉での取組が難しい場合は、学科単位で段階的に推進することを想定する。）の提案を行う。 3. 令和7年度のビジネス・医療秘書コース改編に伴う学則変更に取り組むとともに、現在の本学運営体制の実態と異なる諸規程（教務関係の規程を主とする。）があれば、その改正に取り組む。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 学務システムのサーバー移管後の管理について、改修は従前どおり開発元が担当。本番環境への適用は情報管理センターが担当することとした。加えて、従前口頭での改修依頼の連絡が主であった点を、依頼書によるものへと変更し、依頼事項及び進捗状況の管理を行うよう改善した。一方、学務システムの通知機能及び父母等の利用については、検討を進めていたものの、実現には至らなかった。令和8年度以降の実現を目標とし、令和7年度はその準備を行う。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 情報管理センター協力の下、令和7年度入学者から全学科でのノート PC 必携化を実行した。第3回 FD 研修会では、ノート PC 必携化に伴う学内での ICT 活用事例の紹介及び基本的な Google Classroom の使い方について研修を実施した。ノート PC 必携化に伴う課題等も発生すると思われるので、今後はその対応が求められると予想する。	
3. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 本年度は、学則をはじめとした5つの規程等の改正に着手した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学務システムの Aprtal 及び Assessmentor への乗換えを検討する。 2. 学務システムの通知機能や父母等の利用についての仕組み作りを行う。 3. ノート PC 必携化に伴う各種課題等（ICT 活用の推進を含む。）に対応する。	

令和6年度 「櫻井 縁」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（学生）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
<p>1. 5月末～12月末ごろまで産休・育休で業務に携わることができないため、その期間の仕事についてはできるだけ先取りして準備を進めておく。</p> <p>2. 休み中も必要があれば、リモートで的確に業務アドバイスができるように準備する。</p> <p>3. 今年度は特に仕事の取りこぼしがないように、復帰後の業務についてもイメージを固めておく。</p>	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
<p>1. どの時期に何を使ってどのように仕事を進めるのかが具体的にわかるように業務カレンダーを作成し、共有する。</p> <p>2. セキュリティ等問題がない範囲で、業務に必要な情報をまとめたファイルを作成。何か問い合わせがあった際に活用する。</p> <p>3. 復帰後の仕事についてひとつずつ丁寧に確認するための業務リストを作成する。</p>	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
<p>1. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 育休中は、仕事を引き継いでいただいたおかげで、大きな問題もなく業務カレンダー通りに業務を遂行することができ、本当に感謝しています。私の方でも、業務カレンダーに沿って作業が進んでいるか、定期的に確認することが必要であったように思います。</p> <p>2. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 実際に、何か問い合わせがあった際に、作成したファイルを参考にして答えたことが多々あり、活用はできたと思います。</p> <p>3. 自己評価「 S・A・B・C・D 」 戻ってからすぐに、業務リストの消込をするなどして、業務の優先順序を付けて動くことはできたかと思います。</p>	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
<p>1. 確認した課題やフィードバックをもとに、業務カレンダーのスケジュールや内容を更新します。また、今後も業務カレンダーを利用して、仕事に漏れがないようにしていきたいです。</p> <p>2. 業務ファイルについて、必要に応じて情報を追記・修正し、常に最新の状態を保ち、活用していきます。</p> <p>3. 誰が業務を引き継いでも安心して仕事ができるよう、業務の重要度や緊急度に応じて、リスト内の項目に優先順位をつけ直す必要があると感じました。</p>	

令和6年度 「牧島 愛実」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報・学生課）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学生課不在の間、学生課の業務を正確に引き継ぎ、漏れなく仕事を行う。 2. 学生課を担当する間、庶務課・入試広報室の業務を新任者へ引き渡し、適宜フォローできるよう努める。 3. 学生の学費や生活費となる重要な奨学金業務は、特に滞りや漏れなく対応する。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 引継書を確認し、必要に応じて櫻井事務等に確認するなど、漏れがないよう徹底する。 2. 新任者にとって分かりやすい引継書を作成するとともに、適宜をフォローできるようコミュニケーションを積極的に行い、相談や確認をしやすい環境づくりに努める。 3. 奨学金業務は知識が必要かつ複雑なため、対応に不明点を感じたら確認・質問を徹底する。また、学生に期限を遵守させるよう呼びかけを行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 対応に困った際や不明点は適宜櫻井事務等に確認をし、業務を行えたが、櫻井事務の復帰時に一部の業務を残してしまったことがあった。 2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学生課業務に追われ、新任者用の引継書を作成することはできなかったが、当方の引継書に補足資料を添えたかたちで、新任者へ譲り渡した。 また、コミュニケーションを積極的にとりながら、庶務課・入試広報室の業務を引き継ぐことができた。 3. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 奨学金制度や業務について勉強し、不明点は解消するよう努めたが、学籍異動や授業料が絡む複雑な事項があり、対応に苦慮した。ただ、会計課や先生方へ相談・報告を行いながら対応することができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 4・5月の学生課業務については未経験なことも多いため、来年度も引き続き、櫻井事務と連携し業務を行う。特に業務が多忙になる時期は役割分担を行い、業務に滞りがないよう努める。 2. 年度途中に新任者の変更があり、4・5・6月の業務が未経験のため、来年度も引き続きフォローしながら、業務を行っていく。 3. 来年度より「高等教育の修学支援制度」の支援内容の変更があるため、まずは新制度についての理解を行う。今後、休学・退学が予想される学生がいる場合は、関係各所と連携を取り、適切に業務を行いたい。	

令和6年度 「中山 敬喜」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（会計）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 会計業務の円滑な流れと全般の把握。 2. 不備を指摘されない監査資料の作成。 3. 不備や不手際のない紀要作成。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 覚えた業務は円滑に行い、新しく教わる業務は確実に会得。 2. 誰が見ても分かる資料作りと繰り返しの見直し。 3. 昭和堂との綿密な打ち合わせと、徹底した内容確認。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 一年を通し、会計業務のおおまかな流れが把握できた。 新しく教わった業務も、戸惑いながらも少しずつ対応できた。 2. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 回数を追うごとに、正確性のある資料を作成できたが、時折 Excel の計算式ミスなどを指摘されることがあった。 3. 自己評価「 S ・A・B・C・D 」 降雪の影響で日程に少し影響が出たりしたが、期日までに印刷ミスや不備なく紀要を作成することができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 重要な業務が増え、些細なミスが色々な方々に迷惑をかけることになるので、分からないことがあったら常に確認をとりながら取り組んでいく。 2. 作成する資料も少しずつ変化しているので、添付資料の確認、Excel の計算式のミスが出ないよう、二重三重にチェックをしながら作成していく。 3. 今回は印刷ミスも出ずによかった。次年度も業者としっかり打ち合わせをしながら取り組んでいきたい。	

令和6年度 「森 恵美」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：事務（入試広報 庶務）
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 年間通しての業務内容を把握する。 2. 本学の特色を理解し、高校生がわかりやすく興味を示すような説明を行う。 3. SNSで情報が発信できるようにする。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 引継書の年間スケジュールを確認し業務を進める。理解できないところは周囲に相談する。 2. パンフレットや募集要項を熟読する。進学説明会へ同行する際に、同行者の説明方法や話し方を吸収する。 3. SNSについて知識が乏しいので、インターネット等で情報を集め、仕組みを理解し情報発信できるように努める。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 引継書を確認しながら、手探りで業務を進めたので、時間がかかることが多かった。理解できないところは積極的に周囲に相談することができた。	
2. 自己評価「 S・A・B・ C ・D 」 数回進学説明会へ同行し、説明方法や話し方を学ぶことができた。しかし実際説明する際に、緊張してしまい、スムーズに話ができない場面が多々あった。	
3. 自己評価「 S・A・B・C・ D 」 目標立てる際に、Instagram や Facebook を駆使し短大の情報を発信できるようになりたいと考え目標にしたが、あまり取り組むことができなかった。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 業務の流れを再確認し業務を進める。7月で丸1年になるので、初年度で失敗したことや反省したことを振り返り、業務に取り組むようにする。年度初めの高校訪問時は準備する資料が多いと考えられるので、周囲に確認をしながら、業務を進めていく。	
2. 高校生へ説明をする際に、言葉に詰まることが多かった。原因は緊張しているという事もあるが、まだ情報がしっかり吸収できていないからだと思う。高校生にわかりやすく説明ができるように、勉強していきたいと思う。それに加えて、語彙力を鍛えたい。	
3. インターネット等で情報を集めるのはもちろんだが、SNSは実際にしようしてみても理解できるものだと思うので、使用している周囲の方にご教示していただき、積極的に情報を発信できるように努める。	

令和6年度 「山口 洋」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：事務局	職名：情報管理センター職員
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 学内PCにおいてウィルス感染ゼロを目指す。 2. 今期リプレースが予定されているサーバ（LinuxServer）のスムーズな移行を行う。 3. 学務システムの学内環境への移管、及びレガシー環境からの移行作業を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. ウィルス検出ソフト（ESET Endpoint Security）の更新を確実に行う。また、定期的にウィルス関連の情報を教職員に提示して注意喚起を促す。 2. （LinuxServer）のデータ移行手順とサーバ切替えの手順を明確にしてスムーズな移行を行う。 3. 学務システムの移管試験環境を学内環境に準備して事前に動作試験を行う。レガシー環境からの環境移行についても同様に移行試験環境を準備して、事前に問題点を洗い出しておく。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 学内PCにおいてセキュリティソフトによるウィルス検出は毎月あるものの、実際の感染は前年同様ゼロであった。適宜注意喚起を行ったのもその要因であると思う。来年もこの状況をキープしたい。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 新規（LinuxServer: Almalinux9.4）を手順書に沿って設置し、ユーザ情報及び学内専用サイトのの移行が滞りなく完了した。但し、GUI については互いの認識不足からインストールされていなかった為、こちらでインストールした。	
3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 事前に、学務システムの検証環境を準備し、約2か月を移管準備期間に当てた。主な調査項目としては、コンテナ環境（podman）の構築、及びリバースプロキシ（nginx）の設定、並びにワイルドカード指定によるSSL証明書の環境構築である。特にコンテナ環境の構築はハードルが高めであったのでかなり苦戦した。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 学内ネットワーク環境へのウィルス感染を防ぐには、セキュリティソフトにたよるだけでは十分とは言えず、各教職員の協力無くしては成り立たない。年度初めだけでなく、新しく着任される教職員についても適宜情報セキュリティの基本的な考え方を伝え、協力をお願いしていきたい。	
2. リプレースした旧（LinuxServer）については、2月に（AlmaLinux9.5）へアップグレードした。今のところ、学内で学生が使用する学業用ノートPCのセキュリティ管理サーバーとして運用する予定である。	
3. 今年度は、学務システムの移管作業にとどまったので、レガシー環境からの環境移行を実施したい。但し、レガシー環境からの脱却については、費用効果が無いので予算面での承認は難しいところである。	

令和6年度 「伊藤 理恵子」 年次報告書	
区分： 学科コース ・ 委員会等 ・ 事務局等 ・ 教職員個人 ・ その他（ ）	
部署名：図書館	職名：司書
PLAN（計画）： 査定の結果に基づいて改善すべき内容の目標を設定する。	
1. 安全・快適に図書館を利用してもらうため、余裕のある図書の配架や展示スペースを確保する。 2. 学生・教職員のニーズに合わせて、臨機応変に業務内容やイベント企画を見直し、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 本を通して、地域貢献活動を行う。	
DO（実行）： 目標の達成に向けて計画を遂行する。	
1. 閲覧室・書庫ともに、貸借の動きのない図書（経年劣化の逐次刊行物類・洋書や製本図書・高齢者福祉に関する図書）の除籍・移動を実施して、館内のスペース確保・狭隘化対策に努める。 2. 図書館を利用する学生や教職員の目線になって、情報提供の際にはメールやGoogle フォーム、動画なども必要に応じて活用していく。機関リポジトリの導入や来館につながる企画・イベントを実施する 3. 長崎市立図書館のおはなし会ボランティア活動に参加し、保育園・幼稚園などの子どもたちに絵本の楽しさを伝える地域貢献を行う。	
CHECK（検証）： 成果を測定（量的・質的データ）し、測定結果を分析して課題を発見する。 ※評価のアルファベットに□（囲み線）を付ける。	
1. 自己評価「 S・A・ B ・C・D 」 10年経年した消耗図書40冊と、可動書庫内の未利用・経年劣化製本雑誌150冊を処分し、配置替えを行った。また、閲覧室キャビネットの中身をVHSビデオ（200点）から書籍に入れ替えた。書庫棚の上段より、キハラ(株)の安全安心シート・安全安心ラインを順次敷付し、耐震対策を行っている。	
2. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 オープンアクセス推進協会にWEK03導入申請を行い、承認待ちとなっている。利用案内・情報提供は、学生の目に触れやすいようメールやインスタグラムを使用した。館内に電源タップ・簡易ロッカーを設置し、学生の利便性向上を図った。ボードゲーム企画や学生選定図書を行い、利用促進につなげることができた。	
3. 自己評価「 S・ A ・B・C・D 」 児童発達支援センター さくらんぼ園と、企業主導型保育園 長崎みらい保育園 の2件のおはなし会活動を行い、地域貢献活動ができた。	
ACT（改善）： 課題の解決に向けた改善計画を立てるとともに行動計画を策定する。	
1. 書庫内にある経年劣化の製本雑誌や未利用の図書の除籍・移動を行って、引き続き図書館内の所蔵スペースの確保・狭隘化・安全対策に努める。 2. メールやGoogle フォーム・インスタグラム等を活用して 新入生や潜在利用者に情報提供し、図書館利用の促進・活性化につなげる。 3. 本を通しての地域貢献活動を継続する	

**令和6年度
「研究活動報告書」**

基幹教員の研究活動状況表(職位順)								FD・SD研修会 参加状況		
令和2年度(2020)～令和6年度(2024)								令和3年度(2021)～ 令和6年度(2024)		
氏名	職位	過去5年間の 研究業績				国際的活動 の有無	社会的活動 の有無	過去4年間の FD・SD研修会参加実績		報 告 書 ジ 揭 載
		著作数	論文数	学会等 発表数	その他			学内定例会 (8回実施中)	学外主催 (Webを含む)	
森 弘行(L)	教授	0	4	0	0	無	有	8	1	88
織田 芳人(Y)	教授	0	5	1	0	無	有	8	1	89
中澤 伸元(Y)	教授	0	1	17	3	無	有	1	1	90
松尾 公則(Y)	教授	1	6	5	0	無	有	7	0	91
福井 昭史(Y)	教授	6	5	1	0	無	有	8	0	92
濱口 なぎさ(L)	准教授	0	3	0	0	無	有	8	1	93
本村 弥寿子(Y)	准教授	0	5	0	0	無	有	8	1	94
中村 浩美(Y)	准教授	0	4	20	0	無	有	7	0	95
太田 美代(S)	准教授	0	3	0	1	無	有	8	2	96
古賀 克彦(S)	准教授	0	6	0	0	無	有	8	1	97
荒木 正平(Y)	講師	0	3	3	3	無	有	7	0	98
船勢 肇(Y)	講師	2	2	0	1	無	有	8	1	99
野田 章子(Y)	講師	1	7	1	0	無	有	2	1	100
桑原 真美(S)	講師	0	7	0	0	無	有	8	2	101
三原 ミヨ子(Y)	講師	0	1	0	1	無	有	3	2	102
山中 慶子(Y)	講師	0	10	2	1(作品)	無	有	8	1	103
小槻 智彩(Y)	講師	2	4	5	0	無	有	3	1	104
江頭 万里子(L)	講師	0	3	0	0	無	有	8	1	105
太田 智子(S)	助教	0	3	2	0	無	有	4	1	106

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース 【職名】教授 【氏名】森 弘行

【研究の題目】学生情報データベースの改修

【研究の概要】

2013年から開発している学生情報データベースであるが、学務システムの導入により役目を終えると考えていたが、学務システムには無い機能もあり、学務システムとデータを同期させつつ、開発を継続している。

今年度は、学修成果の評価指標が10項目に変更されたことへの対応、会議記録の検索機能の追加、求人票データの検索機能の改修などを実施した。

会議記録の検索機能は、教授会および運営委員会の配布資料をキーワードで検索し、該当するPDF資料のページを表示する。例えば、「FD」というキーワードを指定すると、以下のようにタイトルに「FD」を含むものが表示され、タイトルをクリックすると該当のページが表示される。教授会および運営委員会の記録は2018年度から登録されているが、キーワード検索できるのは今のところ2024年度のみである。

教授会・運営委員会資料

→[moriをログアウト](#) →[クラス選択・条件検索へ](#)

教授会・運営委員会資料			
年度: 2024	キーワード: (FD)	and	キーワード検索 (2024年～)
教授会資料: 日付を選択	議事録: 日付を選択	運営委員会資料: 日付を選択	

教授会・運営委員会記録

会議	回	日付	分類	No	タイトル
運営委員会	36	2025/02/13	運営委員会	020100	令和6年度「第3回定例FD・SD研修会」実施要項について
教授会	13	2025/02/13	報告・その他	020100	令和6年度第3回定例FD・SD研修会実施要項(案)について
運営委員会	35	2025/01/29	運営委員会	020400	令和6年度第3回定例FD・SD研修会実施要項(案)について
運営委員会	15	2024/08/05	自己点検評価室より	010100	令和6年度「第2回定例FD研修会」実施要項について
運営委員会	14	2024/07/31	自己点検評価室より	010100	FD・SD研修会実施要項(8/27)について
教授会	04	2024/07/25	議案	010104	令和6年度「FD・SD委員会」年間活動計画(案)について
運営委員会	10	2024/06/26	自己点検評価室より	010100	令和6年度「FD・SD委員会」年間活動計画(案)

クラス選択
エクスポート
高校訪問記録
出身校・入学年度別
チューター別面談記録
教授会・運営委員会
アカウント
ログアウト

求人票データの検索については、学務システムの導入以前より学内専用サイトで提供していたが、これまではキャリア支援センターで作成されたデータをAccessデータベースに入力、これをXMLデータに変換したものを学内専用サイトで検索、表示していた。このためデータを再入力する手間が発生していた。今回、学務システムの求人票表示ページのHTMLデータをPHPにより解析し、必要なデータを学生情報データベースに取り込めるようにした。これによって再入力する手間が大幅に削減できた。

【研究の題目】SAS OnDemand for Academics による統計シミュレーションプログラムの開発

【研究の概要】

統計シミュレーションでは多量の乱数を用い、様々なパラメータを変化させて計算を実行する。シミュレーションの実行はExcelでも可能であるが、パラメータの違いによる結果のグラフ化や比較には手間がかかる。

SAS(Statistical Analysis System)は統計処理向きのプログラミング言語であるが、パラメータを変化させて繰り返し処理が行えるマクロ機能がある。また2015年に開発された更に強力なプロシージャLUAにより、SASコードをプログラムにより生成でき、シミュレーション結果のグラフ化まで自動化することができた。このプログラムはJapanese Journal of Statistics and Data Scienceに掲載されたOn concerns with cause-specific incidence and subdistribution hazardで公開されている。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】織田 芳人

【研究の題目】

- ①保育における ICT 活用に関する実践的研究
- ②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査
- ③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査
- ④授業での配布資料の取り扱いに関するアンケート調査

【研究の概要】

①保育における ICT 活用に関する実践

令和6年度入学者から新たに開講した授業科目「保育と ICT 活用」(1単位)(1年後期)で、具体的な ICT 機器とその実践例を収集して、ICT 機器の一例であるデジタル顕微鏡を保育における表現活動に活用できるかを検討した。検討内容を当該授業に反映させた。別型のデジタル顕微鏡及び、3D プリンタを購入したので、同様に、保育における表現活動に活用できるかを検討する予定である。

研究としては、長崎女子短期大学附属幼稚園において保育における ICT 活用の実践を行う予定である。附属幼稚園の園長及び主任には既にお願ひして了解を得ているので、次年度の早い段階で具体的な打ち合わせをして、後期には実践したい。

②Microsoft PowerPoint の学修の動機付けに関するアンケート調査

令和4年度の授業科目「情報科学」において、Microsoft Word を学ぶ際、文書に挿入できる幾何学的図形を組み合わせて動物キャラクターを制作するという演習を取り入れ、それが Microsoft Word の学修の動機付けとして効果的かどうかをアンケートによって調査した。結果として、そのような演習が Microsoft Word を学修する際の動機付けの一つとして有効であると推測された。

令和5年度から、Microsoft Word 学修の動機付けと同様、PowerPoint の学修の動機付けとして幾何学的図形を組み合わせて動物キャラクターを制作するという演習が有効かどうかについて、アンケート調査を始めた。本年度においても同様の演習を実施し、アンケート調査を実施した。調査結果を次年度で検討し、そのまとめを本学紀要等に発表する予定である。

令和6年8月下旬、日本基礎造形学会長崎大会を、同僚の山中慶子講師と協力して開催した。その際、大学・短期大学等における情報教育等に関する情報交換・収集を行った。

③ヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査

保育学生を対象とする知育玩具を活用したヴィジュアル・プログラミング学修に関する研究として、令和元年度・令和2年度に、知育玩具(ロジカルルートパズル)の体験と文部科学省提供の「プログラミン」を利用したヴィジュアル・プログラミングの体験について、ARCS モデルを参照したアンケート調査を行い、令和元年度の結果を本学紀要にまとめた。令和元年度と令和2年度を合わせてまとめる予定である。

令和3年度からは、広く利用されているヴィジュアル・プログラミング・ツール「スクラッチ」を利用したプログラミング学修を実施し、これまでと同様、知育玩具(ロジカルルートパズル)の操作体験が「スクラッチ」の学修体験に影響を与えるか否かを、ARCS モデルを参照したアンケートで調査した。令和4年度・令和5年度においても同様の演習を行い、アンケート調査を行った。本年度は「スクラッチ」によるヴィジュアル・プログラミング学修に関するアンケート調査を実施した。調査結果のまとめが次年度の課題である。

④授業での配布資料の取り扱いに関するアンケート調査

情報整理の観点から、受講生が授業での配布資料をどのように整理しているかを、実際に授業終了後、取りまとめられた配布資料をチェックするとともに、アンケート調査を行った。授業での配布資料の整理方法が成績に影響を及ぼしているかどうかを検討したい。次年度においても同様の調査を行って、調査結果をまとめたい。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】中澤 伸元

【研究の題目】学生を如何にその気にさせるか！ その指導法について

【研究の概要】今年度の指導ポイント

- ① 完全からのスタート 一人ひとり 100 点満点とする。その一人ひとりが自分の中に答えを持っていると言う自覚。
- ② 未来の原因が現在を作り、現在の原因が過去の出来事を書き換えることを理解し自覚する。
- ③ 人生は自作自演であり、すべては自分次第という事の理解と自覚。
- ④ 全ての出来事は体験するため、体験自体に良いも悪いもない。目の前に広がる世界を体験することに意味があり、体験こそ人生価値があるという理解。
- ⑤ 出来事には良いも悪いもない。出来事をどう感じるかが大切である。楽しいと解釈すれば楽しい人生が与えられる。人生は感じ方次第である。
- ⑥ 自分に現れた出来事は、自分だけの問題集なのだから、問題は自分が成長するための課題だと捉えて理解する。
- ⑦ 大事なものは五感が敏感であるということ。五感によって感情が生まれ、感情が現実を作ると言うことの理解と自覚。
- ⑧ 自分の人生には自己肯定感を持つ。この世で一番好きなのは自分。一生付き合っていて付き合ってくれるのも自分であるという自覚。
- ⑨ 毎日ウキウキ、ワクワク、最高！ 楽しい！という気分で、毎日毎日生活することに徹することの理解。人生、楽しいと思えば、楽しい人生が現れる。自己評価を上げていく。
- ⑩ 未来の台本を書き続けること、未来台本を、現在の自分が姿勢、態度、行動が変わることによって幸せになれるということの理解と自覚。

まとめ

カリキュラム作りは、学生の主体性や感性を育むための土台を作る大プロセスです。以下私の楽しい指導法。

ワクワク、未来、現在、過去の因果関係の理解、五感や表現活動の重視などを取り入れたカリキュラム作りの具体的なアイデアのまとめである。

☆学習目標の明確化

長期目標

学生が自分の可能性を最大限に発揮し、感性豊かな保育士として活躍する。この目標をもとに学生自身が未来に向けたポジティブな尾錠を向けるように促す。

短期目標

毎回のワークショップで五感を使った観察力を向上させる。

グループディスカッションを通して異なる価値観を理解する。毎回の授業毎に具体的な目標を設定し、達成状況を振り返る機会を設ける。

自己理解と未来志向

自分は完全な存在という考え方を再認識する。ワーク

未来の理想像を描く

五感の時すまし、視覚、聴覚、触覚、味覚臭覚を育む体験、ワーク。

体験した感情や気づきを記録する。

表現力とコミュニケーション力とコミュニケーション

グループディスカッションや活動を通して、自分の感じ方や意見を表現する練習。

ワークショップ

五感を使った観察表現活動

疑似体験などを取り入れ、学生同士で体験とフィードバックを重ねる。これにより実践力や自己肯定感が自然に養われる。授業の最後に学生に自分の学びや体験を振り返らせる時間を設ける。

自分の成長や感じたことを教育することが大切。

自分の感情や感じ方にどのような変化があったかをお互いの意見や表現を褒め合う時間を設け、他者からの評価を取り入れる。

とにかく学生一人ひとりの個性や感性を大切に指導をしたいと思っています。それぞれの学生が出来事に対して良い悪いを区別するのではなく、あくまでも一人ひとりの学生の体験、感じ方の学びであり、一人一人が自分の問題集を持っているという事の理解をさせるのが私の課題だと思っています。学生同士の価値観の違いを尊重するディスカッションやワークショップを取り入れ、ウキウキ、ワクワク楽しい指導法に徹する授業展開を考えています。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】松尾 公則

【研究の題目】

- ① 長崎県における両生爬虫類の分布
- ② ニシヤモリに寄生するマツオツツガムシ
- ③ 湿地の保全活動

【研究の概要】

① 長崎県における両生爬虫類の分布(継続調査)

長崎県内の両生爬虫類の分布状況を調べ始めて 50 年になる。5 年ほど前までは、離島の調査に重点を置いていたが、すべての有人島と多くの無人島の調査は一段落したので、今年も含め現在は県本土が中心になっている。特に、長崎市内の分布状況とその変化に注目しての調査を継続している。全種調査をしながら、特に、カスミサンショウウオとニホンアカガエルに注目している。両種とも、冬に産卵する貴重な両生類で、個体数の減少が著しい。その理由は、冬季に繁殖する両生類であるため、産卵や幼生が育つための水場がほとんどなくなっているからである。その理由は、農業の衰退により、山際の水田の多くが放棄され藪化したため産卵に適さない場所となったためである。調査結果については、長崎市の方にも報告しているが、あらゆる機会を通じて市民のみなさまにも伝えていきたいと思っている。

年間を通じて県内各地の両爬虫調査を行い、その基礎データを蓄積している。この積み重ねが、絶滅危惧種の指定や各種工事の影響評価にもつながってくると思うので今後とも継続して行きたい。

② ニシヤモリに寄生するマツオツツガムシ

2024 年 3 月 31 日、「長崎県男女群島女島のニシヤモリに寄生していたツツガムシの一種、マツオツツガムシの記載」という論文が発表された。記載者は、高橋守氏であり、大阪市立自然史博物館研究報告第 78 号の 9-21 ページに発表されている。その論文の中で、新種のツツガムシに、和名をマツオツツガムシ、学名を *Leptoyrombidium matsuoi* とするとしていただいた。ちなみに、ツツガムシとは、哺乳類、鳥類、爬虫類に寄生するダニの一種で、マダニよりも小型である。人にも寄生するアカツツガムシはツツガムシ病を起こす病原菌を持っていることがあり、衛生昆虫として有名であり恐れられてもいる。今回のマツオツツガムシは、私の標本(国立科学博物館に寄贈した 327 個体)の一部である男女群島女島産の標本だけに寄生していたもので、他の場所のヤモリには寄生していない珍しいものであった。長崎県内各地のニシヤモリの標本を調査されたが、女島産だけで発見されたい。他県の多くのヤモリの標本も調査されたが、他では発見できなかった。

今回の発表は、標本だけの協力であったが、県内各地の標本を残すことで他の分野の研究者に大きく役立つことができた。今後とも、貴重な動物の標本を残し、国立科学博物館の方に寄贈し、多くの研究者に役立ててもらいたいと思っている。

生物調査に取り組んでいる者として、新種の生物の名前(和名・学名とも)に自分の名前が付けられることは、大変嬉しく名誉なことであると思っている。

③ 湿地の保全活動(継続活動)

長崎市相川町の湿地の保全活動と野外活動を実施してから今年度で 20 回目となる。この場所は旧水田跡を湿地化したもので、長崎市の所有地である。活動内容は、自治会では、市の補助を受けて年間を通して除草や土手の改築などの作業を行い、私たちニホンアカガエルを守る会では、湿地内に水を行き渡らせる溝掘りや野外観察会を実施している。今年度は、2024 年 12 月 14 日に約 30 名のボランティアを集めて作業を実施した。この場所は、長崎市や長崎県で絶滅危惧種に指定されているニホンアカガエルの大産卵地である。今年の産卵数も、約 500 卵塊になり保全の効果が出ている。この湿地の保全活動については、今年度の九州両生爬虫類研究会長崎大会で発表し、エクスカージョンを実施したことで大きな反響を呼んだ。長崎市と地元自治会、それに、私たちニホンアカガエルを守る会の三者が協力することで広大な湿地の維持が成功している。今後とも、この関係を維持し、長崎県でも有数の湿地を維持していきたい。

ちなみに、この保全活動は毎年実施していることで今年に限ったことではない。20 年間、継続してきたことに意義があると思っている。今後とも、湿地の保全を継続していきたいが、後継者の育成がうまくいっていない。長崎市の自然環境課や地元の自治会とも話し合いを続け、今後ともこの場所の保全を継続していきたいと思う。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】教授 【氏名】福井 昭史

【研究の題目】

音楽教育の内容と方法の研究及び教材の開発

【研究の概要】

本年度は、昨年度に引き続き担当する授業科目の中で幼児教育学科対象のピアノの実技を担当する「保育と音楽表現」と「子どもの歌と伴奏法」、生活創造学科対象の基礎科目の「生活と音楽」について指導方法の改善と教材の開発に関する研究に取り組んだ。

1 ピアノ授業の指導方法の改善と教材開発

幼児教育学科1年次対象の「保育と音楽表現」では、2022年度から本校独自の初心者用ピアノテキストを用いて指導にあっている。本年度の研究として、担当した入学前にピアノ演奏の経験がない学生の年間を通しての学習状況を分析した。その結果次のような結果と課題が明らかになった。

学生の学習過程の分析から、ピアノ初心者の学習における課題として次のような事項があげられ、それらを一つ一つ克服する必要があるといえる。

- (1) 最も初期の段階では、和音を演奏する左手の指の動きである。初心者の大部分は、主和音(ドミソ)の和音を1、3、5の指で演奏する際、2、4の指が上がり苦勞しているのがみられる。とくに、同じ1、3、5の指で弾き分ける(ドミソ)と(シレソ)の和音の演奏は、1、2、5の指の(シファソ)(ドファラ)の和音と比較して難易度が高いようである。
- (2) 「ちょうちょう」のようなド～ソの5音の旋律は指と鍵盤が1対1で対応しているので容易に演奏できるが、ラが加わる6音の旋律は[譜例1・きらきら星]のように指と指の間を広げなくてはならず慣れるまでは難しいようである。同じ6音の旋律でも[譜例2・むすんでひらいて]はフレーズで指の位置を移動させればよいことから比較的容易に演奏できるようである。
- (3) 1オクターブに及ぶ広い音域の旋律の演奏では手のポジションの移動が必要となる。[譜例3・こぎつね]はド～ソとファ～ドの移動をソの音の連打とフレーズの切れ目で行うので比較的容易である。また[譜例4・虫の声]は旋律の大部分が個々の指に対応するミソラシドによることからこれも比較的容易である。一方[譜例5・めだかの学校]のように親指が他の指の下を移動するのは難易度が高いようである。

ピアノ初心者の技能向上には以上の課題を丁寧に指導すること、とくに手のポジションが移動する際の適切な指使いによる学習を促すことが大切であるといえる。

テキストの教材に用いた「子どもの歌」の大部分は2拍子と4拍子であることから、3拍子や6拍子のリズムの楽曲の学習が課題である。

テキストでは、どの楽曲もハ長調の学習から始めることを基本としている。そのことで演奏できる楽曲数を増やすことができ学習意欲を高めているようである。また、ハ長調で演奏できる楽曲は、移調しても容易に演奏できることから、ハ長調の学習を基本とする方法は有効であるといえる。

このように、1年次の「保育と音楽表現」では1年間の学習を見通したテキストを用いているが、2年次対象の「子どもの歌と伴奏法」では、幼稚園での実習のための楽曲を教材とするなど、学習の深化の過程を見通したメソッド(教育課程)が作成されていなかった。そこで、1年生の学習を基にさらなる技能の向上を目指せる教材の開発にあたった。それらの楽曲は次年度の授業で活用することになる。

2 ピアノ連弾曲の創作

「子どもの歌と伴奏法」では、後期の課題としてピアノ連弾を課しているが、学生のレベルに合った演奏を希望する楽曲の楽譜が少ないため編曲が必要である。本年度は、学生の要望する楽曲を2曲、連弾楽譜に編曲した。

3 基礎科目の合奏活動の取組み

生活創造学科対象の「生活と音楽」では、受講生の能力と人数に合わせた演奏が容易な合奏曲の編曲に取り組んだ。

使用する楽器は、ハンドチャイム、木琴や鉄琴などである。

子どもの歌である日本のわらべうたは、木琴による合奏とし、日本の音階によるオスティナートをバス木琴で演奏し、その伴奏に合わせて「あんたがたどこさ」などの旋律を演奏するものとした。季節の歌として「きよしこの夜」と「お正月」を選曲しハンドチャイムによる合奏とした。ミュージカル映画の音楽である「エーデルワイス」は、ハンドチャイムの旋律と鉄琴の副次的旋律、バス木琴による和音のリズムによる合奏とした。これらの楽曲による合奏の活動には学生が意欲をもって取り組んでいるようであった。

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース 【職名】准教授 【氏名】濱口 なぎさ

【研究の題目】 能動的学修の実践に関する研究

【研究の概要】

(1) 目的

担当する授業において、学生が受け身ではなく能動的に参加し、学んだ知識を実践できるための教材と指導法を研究している。

(2) 方法

- ①タッチタイピング習熟度向上のための指導法の研究
- ②日商PC 検定（文書作成）受験指導の充実
- ③実践型教育プログラム充実のための「学習ポートフォリオ」の開発

(3) 結果

①1 年次前期の「ビジネス文書作成1」で、タッチタイピングの習熟度向上のための指導法に関する研究に取り組んでいる。初心者クラスの学生に対しては、例年通り手元を物理的に見られないような器具を使用して、キーボードの位置を確実に覚えることから始めた。今年度は基本練習が終わった段階で、この器具を外して入力するよう指導した。経験者クラスの学生は、キーボードと手の位置を正しく身に付けていない学生もいたが、そのやり方が身についている場合は、手元を物理的に隠すなどの矯正は続けなかった。その結果、経験者クラスの学生でも手元を見る習慣が修正できなかった学生は、タッチタイピングの習熟度が上がらなかった。やはり、手元を見ずに入力する方法をしっかりと身に付けさせた方が、結果的に学生自身の習熟度アップにつながるため、経験者の入力の癖を早い段階でつかみ、修正するよう指導するほうが良いという結論に至った。全ての学生たちが早い段階でタッチタイピングの習熟度を上げることで、短大在学中はもちろんのこと、就職後においても作業効率の向上や時短につながり、余裕をもって仕事に取り組むことが可能となり、仕事の質の向上も期待できると考えており、次年度以降もこの指導法を継続していきたい。

②卒業までに日商PC 検定（文書作成）3 級に全員合格することをコースの目標と掲げているが、今年度は1 年生も2 年生も受験者が5 割前後と低調であった。また、2 年生については一度も受験しないまま卒業する学生が7 名とここ数年では最低であった。PC 検定受験を実践型教育プログラムの活動目標とした学生が3 人いたが、うち1 名は受験に至らなかった。必要に応じて個別指導を行っているが、今年度は働きかけても受験を希望する学生が少なかったのが残念である。どのような職種・業種に就職するとしても、Word やExcel の基本的なスキルを持っていれば必ず役に立つ。毎年一定数の希望者がいる医療事務の求人票には、PC スキルが具体的に明記されることが多くなっている。自分の実力を客観的に示す指標としての検定試験の役割を学生たちに示したいと考えている。

令和5 年度に作成したGoogle Form で「知識科目」の小テストを受けられる補助教材を改めて学生に提供し、その効果を確認したい。

③昨年度は2 年次後期の実践型教育プログラムの充実を図ることを目的とし、1 年次前期から2 年次後期の活動を意識するための「1 年次学習活動計画表」「1 年次学習活動自己評価表」「2 年次学習活動・実践型教育プログラム計画表」「2 年次学習活動・実践型教育プログラム自己評価表」の4 種類を作成したがこれを見直した。新たに「学習活動自己評価シート」を作成し、1・2 年それぞれ各自で目標を設定し、定期的に内容を更新しながらPDCA の流れで目標達成を目指す予定であった。しかし、1 年生についてはきめ細かな指導ができず中途半端に終わったしまった。また、2 年生についても後期に本格的に取り組む実践型教育プログラムのベースとして「学習活動評価シート」を活用するように働きかけたが、不十分であった。次年度は、学生が定期的に「学習ポートフォリオ」に活動状況を記録するように促すためにも、学生の活動状況を教員が把握できるシステム構築が必要であると考えている。

令和6年度(2024 年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】准教授 【氏名】本村 弥寿子

【研究の題目】 保育実践力向上を目指した授業実践について
～「領域『環境』の指導法Ⅰ」における取組～

【研究の概要】

1 はじめに

保育においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の“10の姿”の中に、「自然との関わり・生命尊重」と挙げられるように「自然」との関りが重要視されている。しかし、現代社会は“都市化”により、子どもが「自然」に関わる機会が減少している。保育者を目指す本学学生も、その多くが「自然」との関りが十分と言えない状況で過ごしてきており、そのためか、「自然」に対する興味・関心が低い状態である。そこで、学生の身近な「自然」への興味・関心を高めることを目的とし、「領域『環境』の指導法Ⅰ」の取り組みを見直すこととした。

2 「領域『環境』の指導法Ⅰ」の取り組みについて

本科目は、1年次後期に開講する、全8回の演習科目である。領域「環境」の“ねらい・内容”を踏まえたうえでいかに保育を展開していくのか、その考え方と実際について学ぶものである。「自然」との関りについては、第4回及び第5回の授業で取り扱っている。

(1) 第4回授業内容

子どもの「自然」との関りを支えるために保育で大切にすべきことや留意すべきことを、教科書に沿いながら事例や授業者の経験談を織り交ぜて進めていった。その内容は、①時間、空間を保障すること②(自然に)関わる自由を保障すること③子どもが感じたことを受け止めること④多様な自然と出会う機会を保障すること⑤(自然との)関りを深める援助をすること⑥多様性を大事にすること⑦(子どもが)自分のこととして考える経験となるようにすること⑧自然との関わりを支える保育の指導案作成に当たっての留意点である。

(2) 第5回授業内容

身近な環境への興味・関心が薄い傾向にある学生が、周囲の環境に目を向ける経験を積めるように、そして、実際の保育現場を視察して、保育現場の工夫点や自然環境に対する考えに触れる機会を作るために、本学キャンパスと、隣接する本学附属幼稚園の園庭を散策した。その際、学生を1グループ3～4名で分け、グループごとに自由に散策するようにした。そして、本学学内と附属幼稚園の平面図合わせたものを学生一人ひとりに配布し、散策で見つけた植物や生き物、植栽、予想される季節による変化や遊び等について自由に書き込み「自然環境マップ」を作成するよう指示した。

散策時の学生の特徴が2点あった。それは、見つけた自然物(今回はほとんど植物であった)の名前を特定しようとする点と、見つけたものを何かに見立てて楽しむという点である。名前に関しては写真を撮って後で調べるよう促したり、スマートフォンで検索させたりして、自分で調べることを大切にするよう助言した。また、わからないことを懸命に調べる保育者の姿が、子どもにとって手本になることも付け加えた。また、物を見立てている場合は授業者も見た手遊びに加わったり学生のアイデアを受け止めたりして楽しい場の雰囲気を醸し出すようにした。実際子どもは自分なりに見立てて遊びを広げたり深めたりする。見立ては想像力等を育む行為でもある。自分の見立てが受け止められることで子どもは安心し、保育者に信頼も寄せる。学生にも、子どもの見立て遊びを受け止める大切さ理解してほしい考える。

授業者からは、「イヌザンショウ」や「ヨウシュヤマゴボウ」を積極的に紹介し、香りをかいだり幼虫を探したり、また、色水を作って見せたりした。学生からは驚きの声が上がったり好奇心が刺激されて積極的に対象物に触れたりする様子が見られた。短い時間ではあるが、学生にとって発見のある楽しい時間になったようであった。

(3) 授業の振り返り

学生の振り返りレポートから、自然探索と自然環境マップが良い経験になったと感じていることが分かった。自分が気付いていないが身近に様々な自然があること、同じ種類でも形や大きさが異なっていることに改めて気づけたこと、自然は多くの気付きを引き出してくれると理解できたことなど様々な感想があった。学生なりに身近な自然に興味や関心を持つ経験となったと思われる。また、事前の授業で学習した自然の危険性に関する視点からも気付きが引き出されていた。子どもの視点ばかりでなく保育者の視点でも環境を見る経験にもなったようだ。

3 おわりに

授業での学生の様子や感想から、子どもの「自然」との関りを豊かにするための2回の授業は、学生が身近な環境を見つめ直し、自然に興味や関心を抱ききっかけになったのではないかと感じている。授業の更なる充実のために、時間の確保や内容の精選、方法の改善等を行い、より充実させたいと考える。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】准教授 【氏名】中村 浩美

【研究の題目】

1. ソプラノ音域からメゾ・ソプラノへの移行のもととした発声法と、それに伴う歌曲やオペラアリアを含むクラシック楽曲の音楽表現、演奏法、と演技法。また、ミュージカルにおけるミックスヴォイス等の発声法と歌唱法、演技法について。
2. オペラ・歌曲・子どもの歌等、歌のジャンルにとらわれることなく、伴奏法の研究、実技演奏について。
3. 保育者養成校の音楽教育における授業内容、指導法、教材研究について。

【研究の概要】

1. 今年度は頻繁なる体調不良が起こり、また転倒による怪我によって、歌う事への身体、メンタルの低下が声帯へも悪影響を及ぼしてしまった。悪影響とは歌うために必要な支えとしての臀部から足にかけての下半身、腹筋、背筋等、ありとあらゆる括約筋が可動困難に等しく、授業での子どものための歌や講義する事でかなりきつい状況であった。地声、ミックスヴォイス、ファルセットの発声法の違いにも戸惑い、今まで出していた発声での「声」そのものに苦痛を感じてしまったと言っても過言ではない。授業や学内行事、高校生に対する実技体験授業では、恥ずかしながら他の方々には感ずることのない歌唱で何とか歌ってきたと言うのが事実である。このような今年度の不調からはクラシック発声でのソプラノからメゾ・ソプラノへの移行や、オペラアリア、歌曲等、基盤となる発声法から作り上げる歌唱法には学びが難しく少しの改善や向上に繋げる事ができなかった。しかしながら、アリア、歌曲等、楽曲の「歌詞」の持つ大切な観点が今まで以上に学べたと感じている。歌詞とはメロディーに乗って「詩」を歌うと言う形で伝えるものではなく、歌詞の持つ意味、つまり誰がどこでどんな思いをして、何が登場しどんな光景であるか、どんな心情であるか、時に楽曲からどんな色を浮かべるか、何をどのように表現してどう伝えたいのか、たくさんのあらゆる方面、観点、心、イメージ力等など、「詩」と言う「言葉」が楽曲のもたらす大きな魅力と重要性和、感性を高められる「音楽」そのものとも感じ取れた。言葉の表現力、つまり言葉の伝え方、言葉をどのように重んじどのように自身の言葉として操られるか、声に魅力があっても、発声によどみがなくても、言葉がメロディーにのって人の心に入っていないとそれは音楽ではないといっても過言ではない事は今まで以上に確信を持った。
2. 歌唱に於ける体調不良はピアノを弾く事にも当然影響を受けてしまったが、ピアノと言う楽器が唯一のオーケストレーションの楽器である事を認識した。歌い手の伴奏は歌い手がどのようなテンポで、またどのような動きを(テンポ・強弱・音質)途中に入れてその歌い手ならではの楽曲表現をしたいかを、フレーズごとのみならず、僅かな音数の変化のみでも練習を重ねて作りあげていった。伴奏者としてはテクニックには指の動き、重音奏法、体重のかけ方と抜き方などの技術的な面は勿論だが、音質によって歌い手や楽曲のイメージ、そしてオペラではスコアブックでの楽器に見合う音を要求された事は難しいが大変面白く、かつて伴奏者としてステージで演奏するまでのマエストロの指導を再確認し始める良い研究であった。
3. 授業の形態が変わった事で年々学生のレベル低下を感じ、特に今年度は弾き歌いに際する歌唱練習をしていない学生が殆どである事を大変残念に感じ困惑している。1、2年生共にピアノと歌唱の授業が隔週となった事と、時間割の形態に空き時間無く帰宅時を早めに行っている事も加味してか、テスト前以外にピアノ練習室で練習している学生は1割程度でいつも同じ学生であり、練習室からの音が聞こえてこなくなった。歌を聴く事が好きでも歌う事は苦手で、特に人の前で歌うことには抵抗、羞恥心がある事を踏まえて授業を展開していった。まずは歌を歌う前に自分で出した事がないと思うほどの大きな声を出して自分の声の第一歩を知り、少しずつ歌うために出しやすい声を体のいろんなポーズを体験しながら声を出す事に慣れていくようにした。同時並行として歌うために大切な表情筋アップ、口を大きく開ける、口をしっかりと大げさに動かす、マスクを外してその姿を確認する。それらを意識した上で簡単な曲を使った発声練習をして歌う準備と歌うための意識付けをした。歌はただ歌うのではなく「歌詞」の持っている大きな要因に着目させながら、意味やイメージを発表し合ったり指導したりしながら楽曲をより一層楽しんで歌うよう進行した。しかしながら学生は時間割で決められた2週後に受講するための課題に対しての練習が希薄であり次年度の課題である。ただ「歌う事」に対しては入学した時点よりはるかに楽しく声も出るようになったと自身で成長を感じながら、授業中の一人で歌う事に対しての抵抗が少なくなっていた。「手遊び歌」「朝のプチお集まり会」では実習に大いに生かされたようで授業には熱心に耳を傾けていた。「手作り手遊び歌」では教員が簡単な楽曲を8小節作り、その曲を使って題目を自由に考え3.4人を1チームとして指導に回りながら完成させて「世界にたった一つの手遊び歌」をクラス内で発表し合った事はアクティヴラーニングとして良い取組になった。示待ちから自発的な学び、練習の継続を強化できる研究と実践に繋げたい。

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】准教授 【氏名】太田 美代

【研究の題目】 障がいのある学生に対する支援体制の構築に向けて

【研究の概要】

1. はじめに

2021年に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」が改正され、事業者による障害のある人への合理的配慮の提供が義務化された。これにより、本学においても障がいのある学生への合理的配慮が2024年4月1日から義務となった。

一方、日本学生支援機構が実施する「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」によれば、我が国の大学・短期大学・専門学校で学ぶ障がいのある学生数は年々増加しており、令和5年5月1日現在における障害学生数は58,141人(全学生数3,247,212人の1.79%)で、前回から8,469人増となっている。本学においても、支援を要する学生が一定数在籍しており、少子化時代の学生数減少の中で、今後その割合が増すことが予想され、障がいのある学生の支援体制の構築が急務である。

そこで、現行の支援体制を見直し、他大学の「障害学生支援の手引き」や「合理的配慮ガイドブック」等を参考に本学における課題を、制度的な課題、人材面での課題、環境面での課題の3つの観点からとりまとめた。

2. 現行の支援体制

- (1) 入学前 入学試験時の合理的配慮を受験生の申し出に応じて行っている。また、入学時には全学生に「合理的配慮調査書(申請書)」を配布し、障害のある入学生を把握している。本人の希望を基に所属の学科コースで支援内容を検討して方針を立て、必要に応じて在籍する高等学校の担当者と情報交換を行った上「障がい学生支援委員会」で決定する。
- (2) 入学後 「障がい学生支援委員会」が主となり、教務課、学生課などの関連部署、授業担当者、学科コースが支援を行う。個別には、チューターが相談に乗り、支援内容の確認をするとともにフォローアップ面談を行い、必要に応じて支援内容の見直しを行う。進級時には、入学時に提出された「合理的配慮調査書(申請書)」をいったん返却し、内容に変更がないか学生が確認したうえで再提出する。変更があれば、再度申請に基づき支援内容の検討を行う。年度途中であっても、申し出があれば「合理的配慮調査書(申請書)」を当該学生が修正し、支援内容を検討する。その他、学生相談室が随時、学生の相談に応じる。学科コースではチューター面談を実施し、適切な支援が行われているかモニタリングを実施する。

学生支援のための制度としては、チューター制度、学生相談室、各学科コースでの取り組み、オフィスアワー、長期履修制度が挙げられる。就職支援では、キャリア支援センターを通して本人の了解を得たうえで就職先へ情報提供を行い、合理的配慮の継続を図っている。

施設設備のバリアフリー化・ユニバーサルデザイン化としては、1号館ロビー入り口にスロープがあり、1号館に多目的トイレ(オストメイト設置)が設置されているが、車いすでの移動となると、困難な箇所が多い。

今年度は職員研修として、長崎県立鶴南特別支援学校の分藤賢之校長を講師に招き、「障害学生支援-インクルーシブキャンパスの推進に必要な基礎知識-」と言うテーマでSD研修を実施した。

3. 発達障害のある学生への支援対応について(事例)

ASD(自閉スペクトラム症)の学生に、特性に応じた対応をするため、県立鶴南特別支援学校の分藤校長先生に助言をいただき、TEACCHプログラムの「構造化システム」で対処する方針を立てた。

対人関係の相互性、他者理解、状況理解の困難性や、興味や関心の領域が狭く融通が利かない、非定形型感覚機能などの特性に足して、ルールの明確化、視覚情報を重視した情報提供、各段階における確認作業などの丁寧な対応を行った。授業中の途中退席や途中参加を認め、座席も考慮するなどの合理的配慮を求める申告が行われた学生とは、医師の診断書を基に「建設的対話」を行い、対応することとした。本人の希望により、クラスの他の学生に事前に病気のための配慮であることを説明して、対応を始めた。ただし、遅刻・早退・欠席の要件は他の学生と同じように取り扱うことは本人に説明して了解を得た。保護者との面談も複数回実施して意志の疎通を図った。

3.. 今後の課題

- (1) 制度的な課題としては、①障がい学生支援に関する基本方針やマニュアル等の整備 ②障がい学生支援コーディネーターの配置 ③学外の専門家との連携 ④学外実習における支援体制 ⑤支援に関する情報提供(ウェブサイト等) 障がいについての理解の推進 ⑥研修会の実施 具体的な事例を素材とした意見交換と専門家の指導助言 ⑦評価と改善 支援の効果測定をどうするか。学生の自己評価等 が挙げられる。
- (2) 人材面での課題としては、①専任カウンセラーなど学内の専門家の不足 ②専門性の高い教職員の採用・育成は、学生の相談先としてだけでなく、教職員へのアドバイザーとしても重要 ③学生ボランティアの育成 等が挙げられる。
- (3) 環境面での課題としては、①施設のバリアフリー化 ②保健室整備 ③学生の居場所作り ④情報アクセシビリティの向上 ⑤分身ロボット Orihime の活用 等が挙げられる。

4. おわりに

本学において、障がいのある学生に対する支援体制を強化することは、多様性を尊重し、すべての学生が安心して学び、成長できる環境を築く上で意義のあることだと考える。

障がいのある学生が、他の学生と同様に大学生活を送り、卒業後に社会の一員として活躍できるようより良い支援を提供するためにできるところから課題解決を進めていきたい。

【学科名またはコース名】 栄養士コース 【職名】 准教授 【氏名】 古賀 克彦

【研究の題目】 長崎とパンの関係とその歴史について

【研究の概要】 長崎とパンの関係とその歴史について調査を行った。概要を以下に記す。

1. はじめに

長崎女子短期大学生活創造学科栄養士コースでは、長崎の食文化を総合的に学ぶ『長崎食育学』を開講しており、長崎の食の歴史に関する授業も行っている。今回、その授業で使用するため、長崎とパンの歴史とその関係について調査を行った。日本におけるパンの歴史は、16世紀に日本にポルトガル人が来訪することにより始まった。長崎は中でも特に重要な役割を果たした地であり、パンが伝わり、普及する過程において多くの記録が残されている。本稿では、長崎におけるパンの歴史とその背景について詳述する。

2. 長崎とパンの関係とその歴史

2.1 パンの伝来と初期の記録

1543年にポルトガル人が種子島に漂着し、物々交換を通じてパンが日本にもたらされた可能性がある。1549年にはフランシスコ・ザビエルがキリスト教布教のため来日し、ミサの儀式に必要なパンが持ち込まれたと考えられる。1562年には、ポルトガルの貿易商であり医師でもあったルイス・デ・アルメイダが来日し、大友宗麟をもてなす際にポルトガル風の料理を提供したことから、パンも含まれていた可能性が高い。

2.2 教会におけるパンの製造と普及

1569年、長崎甚左衛門がイエズス会に土地を提供し、ビレラ神父がトードス・オス・サントス教会を建設した。ミサにはパンが用いられたと推測される。1599年の記録には、日本の小麦を使ってホスチヤ(御聖体用のパン)が作られていたことが記されており、長崎におけるパンの製造が確認できる。

2.3 平戸におけるパンの記録

1615年の平戸イギリス商館日記には、パン職人が小麦を使ってパンを製造していたことが記録されている。ポルトガル語の「pão」が語源とされることから、平戸でのパンの伝来はポルトガル人によるものと考えられる。さらに、1630年には砂糖入りのパンが作られていたことがオランダ商館日誌に記されている。

2.4 江戸時代の長崎におけるパン文化

1570年、大村純忠が長崎をポルトガル貿易港とする協定を結び、翌年にはポルトガル船が長崎に入港。パンとともにビスケットも伝わり、後に輸出品として扱われるようになった。1636年には出島が完成し、ポルトガル人の移住が始まるが、1639年にポルトガル船の来航が禁止された。その後、出島のオランダ商館ではパンが常食され、日本人には販売が制限されていた。1642年の記録には、長崎のパン屋が出島のオランダ人へパンを納品していたことが記されている。江戸時代後期には、日本人向けのパン販売が始まり、1799年の『檳林雑話』にはパン屋の存在やパンの製法が記されている。パンは小麦粉に甘酒を加えて発酵させ、銅器を用いた上下火の焼成方法で作られていた。

3. 考察

長崎におけるパンの歴史は、日本におけるパンの伝来と普及において重要な役割を果たしてきた。16世紀、ポルトガル人の来訪をきっかけに、長崎はパンの伝播地として注目され、そこでの文化的背景や宗教的儀式の中でパンはその地位を確立していった。特に、キリスト教の儀式においてパンは重要な役割を果たした。また、16世紀後半には長崎でのパンの製造が商業的な側面を持ち始め、ポルトガルとの交易においても重要な役割を果たした。特に、平戸や長崎におけるパン屋の存在は、パンが各都市で普及していった過程を象徴しており、単なる貿易品から日常的な食材へと変貌を遂げたことが伺われる。さらに、江戸時代の長崎におけるパンの文化は、日本独自の発展を見せ、パンは主食としてだけでなく、菓子としても消費されるようになった。主食としてではなく、菓子として消費されることが多くなった点は、現在のあんぱん等の菓子パンなど、日本独自のパン文化形成に影響を与えた可能性が考えられる。長崎にはパンが初めて日本に紹介された時期や、その後の広がりについての記録が多く残されており、日本におけるパン文化の発展において重要な拠点となったと言える。今回の調査では江戸時代の長崎のパン屋について不明な点も多く、今後もこれらの点に関して調査を続けていきたい。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】荒木 正平

【研究の題目】

対人ケア場面におけるコミュニケーションに関する研究

【研究の概要】

(1) 前年度執筆した論文では、認知症高齢者、障害児・者のみならず、児童養護施設などにおいて社会的養護の対象とされる子どもたち、そのほか広くケアを必要とする人々の「理解」をめぐり、より具体的にその前提となる「能力」評価のあり方について検討し、さらに昨今複数の学問領域を横断するかたちで注目を集めている「ネガティブ・ケイパビリティ」概念をとりあげ、ケア実践の文脈においてはいかに位置づけられうるかについて考察をくわえてきた。

今年度は、「能力」とその評価をめぐる言説が、ケア実践の現場に与える影響とその課題について検討を深めている。その検討について(可能な範囲で)具体的に述べるならば、「能力」評価の相対化作業のさきに見出すべきもの、つまり、「能力」あるいは「能力評価」といった指標を用いるのとは別の仕方では「ケア」や「福祉」、あるいは「教育」といった営みを形成するという、極めて困難な試みをいかに進めていくことができるか、という問いへの応答可能性を探る作業となる。現在研究を進めている。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】船勢 肇

【研究の題目】

近代日本の大学自治論 南原繁と蓑田胸喜

【研究の概要】

研究調査

近代日本の大学自治論の研究をすすめてきたが、そのまとめとして南原繁と蓑田胸喜の比較研究をおこなう。そのための下準備として分析視覚の錬成に努めた。主には、社会思想の研究を積極的におこなった。特には、柄谷行人の『世界史の構造』など、国家や資本主義と中間領域という視点が有効と思われる。以下、本年の研究で得られた分析視覚についての視点の一部を述べる。

大学自治について、国家権力を抑制する一方で、大学自体が権力となる点については、よく知られたことである。これはデモクラシーに付随する中間領域のジレンマである。このジレンマを認識することは、極論の誘惑に流されないという積極的な意味がある。通底してきたジレンマを認識しておくということは、一見鋭利に聞こえる極論の誘惑に惑わされることなく、種々の論点に目配りするための分析視角をもつという、実践的な意味がある。

平準を原則とするデモクラシー内部に自律的な空間の存在意義を論証する困難な課題が大学自治論にある。さらに、筆者の対象とした時期からわかることは、天皇制国家内・社会国家内に自立した空間を論証する課題が課せられる。これが近代日本の大学自治論を考察する上で抑えるべき要点であろう。大学自治を論じるということは、デモクラシーを論じることと不可分である。ひたすら人の情念までも全体に反映させるか、人への諦念を前提とし自律した専門性を容認するか、である。つまり、国家権力ばかりでなく、大学と大衆社会との関係はすでに知識人の問題とするところであった。大学と大衆社会の関係を問題にすることは、すなわちデモクラシーの担い手を問題にすることと接続する。

大学自治論にとって、量的拡大によって自己の勢力増殖をはかることは、自身が解きたいジレンマを抱え込むことでもあった。なぜなら、大学自治論は啓蒙されることを自身の利益と考える学生を前提とすることなしには実質化しえないからである。一方、蓑田は、中間団体を否定し、大学自治を認めようとせず、自身のいう国体論を内面化させることを国民に求める。蓑田と南原は対照的にみられやすいが、共に大衆化した功利的な人の群れに日本が満たされることを認めるわけにはいかなかった。さらに、人と人との功利的に連結させる社会国家化には警戒感を示した点でも共通していた。

大学自治の成立のなかに大学自治の崩壊要因が潜行するという矛盾が存在していた。中間団体とは、デモクラシーの必要条件とされたものであると同時に、権力体でもあるためデモクラシーに居心地の悪いものである。個人を要件とするデモクラシーが、時に個人を緊縛する中間団体を逆説的に必要とする。この中間団体の持つ権力を忌み嫌い、これを抹消することが望まれることもある。そして、仮に中間団体を否定し、平準化されていったとしても、その構成員が無関心な場合、規則を重視する「公正」さが重視され、冷徹でオートマチックな対応で動かしていくおそれもある。あるいは「強力なリーダーシップが多くの問題を打破していく」との物語に依存すれば、専横を招き多様な意見が尊重されないおそれもある。

筆者がみてきた大学自治論の種々の濃淡は、第一次大戦後の大学人たちがこうした解きたいジレンマに直面していたことの所産である。

学会活動

12月には本学を会場として大学史研究会のセミナーが開催された。これについて、本学開催の責任を負った。日本全国からの参加者が集まったが、滞りなく2日間の日程を終えた。

特に、南原繁の研究発表には、議論に積極的に参加した。

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】野田 章子

【研究の題目】 学校における民族舞踊教育の再考

【研究の概要】

(1) 民族舞踊教育の現状と課題

国際化がすすむ現代社会では、グローバル化を背景に「民族舞踊」の概念が変容し、民族舞踊を学ぶ意義や方法が多様化している。しかし我が国では、民族舞踊教育について十分な議論がなされているとはいえず、とりわけ学校においては、学習者が多種多様な民族舞踊を学ぶ機会は、圧倒的に少ないと指摘できる。本論文ではこれらの現状を解決するために 民族舞踊の教育的な価値を明らかにし、学校教育に適した民族舞踊教育の再考を試みた。1998 年「総合的な学習の時間」が創設されたことで、地域に伝わる民俗芸能(郷土芸能)¹を学校教育に取り入れる小中学校が増加し、学校における民族舞踊教育の在り方に変化がみられた。それは、民族舞踊教育において大きな課題であった時間数の問題、教科を横断した教育内容の問題、指導者の問題、教材化の問題、踊りの継承方法の問題などが、「総合的な学習の時間」を使いながら地域の祭りやその継承者と連携することによって解消されてきたことが大きい。また 2006 年の教育基本法改訂の前文に「伝統の継承」が規定されたことに伴い、2007 年の学校教育法にも「伝統と文化」が規定され、多くの学校が「伝統・文化」に関わる教科・科目を設定し、民俗芸能(郷土芸能)に取り組むようになったことも影響しているだろう。このような民族舞踊教育の進展は、郷土学習の場を地域に求めている学校と、継承者を求める地域の人々の思いが一致した結果だとも考えられる。しかし、未だ民俗芸能(郷土芸能)を学校で教えるためには、さまざまな課題があり、これから解決すべき問題も多く残されている。また近年では、日本以外の民族舞踊をとりあげた学習も実践されている。このような実践の多くは、異文化理解教育や多文化理解教育など現代の教育現場のニーズに込んでいるものが多く、極めて貴重な取り組みだと評価できる。さらにモーションキャプチャなどの技術革新により民族舞踊の動作の記譜や解析(コレオメトリックス)の研究が始められ、多分野の研究者が民族舞踊を研究するようになり、コンピュータを使用した民族舞踊教育の教材が開発されている。これらは、民族舞踊における動きを可視的なデータとして提示し、身体技法やその習得方法を明らかにしようとしたものである。現在ではこのような成果を社会や学校に還元しようとする研究も多くみられる。

このような民族舞踊教育の現状から、学校においてようやく文化理解を軸とした民族舞踊教育の授業ができる場が整い、実践を試みる学校が増加していると分かる。またコンピュータによる解析が民族舞踊の身体技法を明らかにし、困難だった身体技法の継承を可能にすることも期待できる。そのような点から考えると、今は、民族舞踊教育の転換期といえるだろう。

1970 年代から学校での民族舞踊教育の重要性や必要性が指摘されている。それは民族舞踊教育が、文化の継承や文化の理解に適した学習であり、その教育的役割を期待されていたからであった。しかし、体育科の授業で取り組むことは難しく、試行錯誤の年月が現在まで続いてきた。その理由として、時間数の問題、教科を横断した学習内容の問題、指導者の問題、教材化の問題、身体技法の継承問題などがあげられる。これら問題点の解決が、民族舞踊教育の長年の課題であったといえよう。現在は前節で述べた通り、総合的な学習の時間で教科を横断した授業が実践できるようになり、民俗芸能(郷土芸能)の取り組みが盛んになっている。このことから、学校において民族舞踊教育がさらに発展するためには、教育課程の再編成をどのように活用していくかが課題であろう。また、同じく前節で指摘したが、自文化の舞踊については議論が積み重ねられてきたが、異文化の舞踊についての議論はほとんどされてこなかったことも明らかになった。国際化が進む現代社会において、異文化の舞踊をあつかった民族舞踊教育の議論と実践が今後の課題であることは間違いない。

(2) まとめ

以上のように転換する舞踊教育の今日的課題は、少数派の民族(ethnic)の民族舞踊をとりあげた民族舞踊学習の実践ではないだろうか。なぜなら国際化やグローバル化が進む社会において、異文化理解や多文化理解の必要性が認められているにもかかわらず、学校で扱われている民族舞踊の教材が欧米に偏っていると指摘できるからである。また、今までの学校教育が「日本の民踊」と「外国の踊り」²を分けて議論し、教育してきたことにも問題があると考えられる。国際化が進む社会において、自文化を自文化の視点だけで学習するのではなく、異文化を理解し、異文化と比較して自文化を受容することが求められている。つまり「日本の民踊」や「外国の踊り」ではなく「諸民族の舞踊」であり、世界中に存在する少数派の民族(ethnic)の舞踊も含める学習である。日本にも、アイヌの民族舞踊や琉球の民族舞踊などがある。それぞれの文化的価値を尊重するような民族舞踊教育こそ、現代社会において意義があると考えられる。民族舞踊教育への理解が深まり、実践の場が整った今だからこそ、民族舞踊教育の在り方を再考すべきだと考える。そのような再考は、諸民族に伝わる舞踊の多様性を知り、舞踊の果たしてきた役割を理解し、社会に還元できる叡智を培うといった民族舞踊の本来の役割を踏まえた民族舞踊教育につながるのではないか。

¹ 民俗芸能(郷土芸能)には、地域の人々によって継承されている舞踊(民族舞踊)が含まれる。

² 「日本の民踊」、「外国の踊り」は現行の指導要領に用いられている用語である。

学校教育において「日本の民踊」とは、「地域に伝承された日本の踊り」を示している。

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】講師 【氏名】桑原 真美

【研究の題目】栄養士養成のためのeラーニングシステム 導入2年目の経過報告

【研究の概要】

1. はじめに

Knowledge Enhancement of Nutrition Student(略称:KENS 以下KENSと呼ぶ)は栄養士養成課程の学修補助システムとして開発された。本学生生活創造学科栄養士コースでは、KENSの導入へ向けて令和4年度に学生へ対するユーザビリティテストを実施し、令和5年8月より2年生(24名)がKENSの利用を開始した。

KENSに搭載されている機能には学生が利用できる機能としてトレーニング機能や小テスト機能、マイデータ機能等があり、主に栄養士実力認定試験へ向けた学生のトレーニングツールとして大きな役割を持っている。(機能の詳細は長崎女子短期大学令和六年度紀要 第50号を参照のこと)これまではKENS利用者を2年生に限定していたが、今年度は利用者の幅を拡大し1年生および卒業生も利用可とした。さらに今年度は、問題登録数の増加に加え、KENSを活用した授業科目の拡大および新機能の追加を実施した。

2. KENS利用者範囲

令和5年度はKENS利用者を2年生に限定していたが、本年度から1年生も利用可能とした。令和6年4月より1、2年生ともにKENSのアカウントを登録し利用可能な状態となっている。また、令和5年度の卒業生において本学卒業後もKENSを利用したいとの希望があったため、希望者のみ在校時とは異なるアカウントを作成し付与した。令和6年12月現在のKENSアカウント登録者は1年生28名、2年生33名、卒業生5名である。それに伴い統計/データ機能においては、各種データの学年ごとの統計を閲覧できる機能が追加された。

3. KENS登録問題数

令和6年12月現在、KENSには2984問の問題が登録されている。科目ごとの登録問題数は公衆衛生学123問、社会福祉概論27問、解剖生理学183問、生化学201問、食品学総論276問、食品学各論380問、食品衛生学128問、栄養学総論230問、栄養学各論292問、臨床栄養学164問、栄養指導論147問、公衆栄養学259問、調理学286問、給食管理論288問である。令和5年12月時点の登録問題数は2764問であり、この1年間で220問の問題が新たに追加された。

4. KENSを活用した授業

令和6年度、KENSを活用している授業科目は、1年次開講の栄養学Ⅰ(基礎栄養学)、食品衛生学、栄養学Ⅱ(応用栄養学)、2年次開講の公衆栄養学である。いずれの科目においても、授業開始時に前回の授業の復習として小テスト機能(表1)を使った確認問題を実施している。教員は、小テスト解答者全員の結果を表およびグラフでリアルタイムに確認することが可能である。学生の理解度を即座に把握し、正解率の低い問題についてはその場で解説をする等のフィードバックを実施している。

5. 模擬試験機能の追加

令和6年7月1日より新たな機能として模擬試験機能を追加した。模擬試験機能は栄養士実力認定試験を受験する2年生を対象とした機能である。毎週月曜日に全42問の○×問題が出題され、学生が解答する。解答者は得点および正解率等の結果を確認することができる。模擬試験問題の作成はKENSが自動で行う。模擬試験問題の各科目の出題比率は、栄養士実力認定試験に出題される応用力問題を除いた科目の出題数の比率に準じており、その比率に応じた問題が科目ごとに無作為に選出される。模擬試験は何度でも解答することが可能であり、学生は模擬試験結果を表示するページにて、初回の解答結果と最新の解答結果の比較を科目ごとに表およびレーダーチャートにて確認することができる。また、学生は当該模擬試験の解答人数、初回解答時の平均点、初回解答時の偏差値、初回解答時の正解率の順位を確認することができるため自身の実力を他の学生と比較することも可能となっている。

令和6年7月1日から栄養士実力認定試験の試験日である12月8日までに23回の模擬試験が公開された。栄養士実力認定試験受験者32名中、第1回模擬試験の解答者の割合は31.3%(10名)であったがその後減少した。全23回の解答者の割合の平均は15.1%(4.8名)であった。

6. 今後の課題

次年度以降もKENSへの登録問題数を増加する必要がある。また、これまでに登録された問題の中には、法改正や制度改正により不適切問題となってしまうものも見受けられる。対象となる問題については削除または解説を含めた修正をする必要があるため、順次作業を行っていく予定である。今年度より実装した模擬試験機能は利用者率が平均15%という結果であった。どのようにして利用者数を増加させるかが課題となる。学生の自主学習および反復学習を目的として搭載されているトレーニング機能においても同様のことが言える。

また、今年度から1年生のKENSの利用を開始したことにより、どのような学習効果が得られたのか検証する必要がある。現1年生においては複数の授業において頻繁にKENSを利用していることから、KENS利用のハードルが下がり栄養士実力認定試験へ向けてのKENS利用率が増加することを期待したい。次年度は、現1年生の栄養士実力認定試験結果とKENSの利用実績を基にその学習効果を考察する。

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】三原 ミヨ子

【研究の題目】保育士者養成校における「子育て支援」の授業実践と考察

【研究の概要】

1. はじめに

現代の日本社会において、各家族化や都市化、共働き家庭の増加、少子高齢化に伴う地域のつながりの希薄化などにより、養育する保護者は孤立感や不安を感じ、家庭での子育てが難しくなっていることを耳にする。また、児童虐待も年々増加し、貧困による経済的問題など、特別な支援が必要な家庭、多様な状況下にある子育ての対応が求められるようになってきている。このような社会情勢の中、卒業後は、子どもへの日常的な保育に加え、保育者として子育て支援を担うことになる。そのためには、在学中より子ども・保護者理解に努め、相談を受けた時の対応や適切な子育て支援ができるよう専門職者としての確かな知識や技術を身につけていくことの必要性を強く感じた。

今回、学生が、「子育て支援」の科目を学ぶにあたり、事例問題の取り組みや演習等の授業内容は理解へと繋がったのか、実践したことを振り返り、分析を行った。

2. 授業実践

「子育て支援」の科目履修:2年次後期に8回の授業計画(単元)に沿って進める

授業形態:講義形式・個人、ペアによる学習、グループワークによる協働学習

3. 結果・考察

8回の講義終了後、Aクラス(32名)・Bクラス(33名)の学生へアンケート調査の協力を依頼し、実施した。家族形態に関しては、A・Bクラスの学生は、ほぼ核家族世帯にしていることがわかった。就学前の子育てをしている方との関わりについては、親戚や近所の子ども、アルバイト先で接している学生がおり、「夜泣き」や「ミルクを飲まない」「離乳食の進め方」「子どもの成長や発育」の不安や悩みがあることの情報を得ていた。

授業の理解度に関しては、難しかったと回答する学生はおらず、理解できたと答えた学生がAクラス82%(少しできた18%)、Bクラス73%(少しできた27%)であった。子育てに悩む保護者の支援や関わり方について、事例問題を通して、個人・ペア活動、グループワーク活動により考えることができたと思われる。ジグソー教育や学生参加型の学習の取り組みや学生が幼少の頃の子育てについて、親へのインタビューを実施し、子育てのエピソードを聞き、考えたことや相談・支援に関しての事後学習は効果があったのではないかと考える。授業において、どのような内容が今後、職場で活かせると思うかの質問(自由記載)では、「気になる子への対応や支援のしかた」「虐待のサインと早期発見」「支援計画の作成やアセスメント」「特別な配慮を要することもや保護者への対応」「障害の種類や特徴」「子育て支援の関連機関を知ること」等があげられ、単元ごとの説明や事例による問題解決方法、他学生との意見交換により、学びの共有が図られていた。

「子育て支援」の科目を学ぶ前と学んだ後では、子育てや自分の将来像、家屋や地域の支援、国の支援体制についての意識の変化がみられた学生が多く、授業を通し、知識が深められたと考える。けれども、学生が住んでいる地域の子育て支援センターや子育て広場などの施設や関連機関の調査など、実際、子育て関連の施設見学へ行き、専門職種の方より内容や現状などを説明していただく機会を設けるともっと理解や関心が高まったのではないかと思います。授業を展開していくうえで、課題となった。多様な家庭環境にある子どもや貧困家庭も増加し、子どもを産み、育てやすい環境がもっと整えられ、社会全体で子どもを守り、保護者を支えていくには、どのようなサポートができるのか、学生に理解が深まるようさらなる授業改善を図る必要がある。

4. まとめ

- ① 保育の専門職として求められる子育て支援の機能や役割を理解すること。
- ② 子育て家庭の抱える問題が多様化、複雑化しており、その家庭への適切な支援として保育施設や保育士が働きかけ、子どもの育ちを保障すること。
- ③ 「子育て支援」の科目を履修することにより、専門的な知識や支援技術を学び、保育現場で活かせるような実践力を身につけることは重要な意味を持つこと。

5. おわりに

子育て支援の授業を通して、学生と共に学び合い、よりよい親子関係づくりを支援するためには、子どもにとって最も良いことを第一に考え、保護者が仕事や家庭生活との両立を図り、子育てに喜びを感じられるよう支援することの大切さを感じた。検討内容として、授業後のアンケート調査による分析や親への子育てに関するインタビューは行ったが、実際に子育て中の母親(父親)から育児に対する悩みや不安、子育ての喜びや感動したこと等、現場の声を学生に聞いてもらう機会をつくり、今後も保育者を目指す学生の学びの保証を行っていきたい。

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】山中 慶子

【研究の題目】「幼児と材料との関係に保育者の行為が与える影響 ー牛乳パックピースを用いた遊びにおける年長児の模倣行為に着目してー」

【研究の概要】

【要旨】本稿の目的は、幼児が初めての材料と出会う場における保育者の行為が、幼児の行為の決定や、その後の遊びの展開に与える影響について明らかにすることである。調査の材料として牛乳パックピースを用い、材料経験があるクラスと、初めて材料に出会うクラスで、保育者が「積んで遊ぶ」行為を行った際の年長児の行為を比較した。その結果、牛乳パックピースは、前者では「自由な関わり方から面白さを模索する材料」として捉えられ、後者では「保育者の行為の模倣から、新たな面白さを見いだす材料」として捉えられたことが推察された。また、幼児の模倣には、「憧れ」に因るものと、「自らのより良いものを追求する」という要因があり、幼児が価値ある目的に向かって自らの可能性を追求しようとするとき、他者の行為を模倣することによって新たな学びに向かうことが考察された。

1.研究の背景と目的.

これまでの研究から、年長児では遊びを決定する要因として、自身の好みだけでなく、他者の行為の影響や社会的な価値への意識が働いている可能性が考えられた。保育施設においてその役割を果たすのは保育者であり、その行為は少なからず幼児の行為決定に影響を与えていることが考えられる。したがって、本稿では、幼児と保育者との相互行為に着目する。特に、幼児が初めて環境(材料)に出会う場において、保育者の行為は影響を与えると推測される。よって、材料経験のある幼児と、初めて材料に出会う幼児が、いかに保育者の行為から影響を受けるのか、遊びの決定やその後の遊びの展開から明らかにする。また、幼児が遊びの中で保育者を模倣する姿から、幼児後期の「模倣」と「学び」との関係について考察する。

2. 方法

調査は、年長児2クラスで実施した。調査時期は、2024年2月である。調査日の出席数は、Aクラス18名、Bクラス19名であった。Aクラスの幼児は、2023年6月に一度、牛乳パックピースで自分の好きな遊びを約30分間行っている。その際、保育者は遊びには関与していない。一方、Bクラスの幼児は、牛乳パックピースで遊ぶのは初めてである。つまり、Aクラスの幼児にとって、牛乳パックピースは自分なりに遊び方を習得している材料であるが、Bクラスの幼児にとっては、初めての経験となる材料である。実践日には、保育者に牛乳パックピースを積んで遊ぶよう依頼した。「積んで遊ぶ<構成遊び>」は、Aクラスでの自由遊びの際、活動後半に数名の幼児によって出現した行為である。したがって、造形表現や模倣遊びに比べると、年長児だけの遊び場面では出現しにくい遊びだと考えられ、活動序盤に「積んで遊ぶ<構成遊び>」が出現した場合は、保育者の行為の模倣だと推測される。

3. 結果と考察

Aクラスでは、保育者が「積んで遊ぶ<構成遊び>」を行うのを契機に、保育者の周りで積む遊びを行う幼児の姿が確認されたものの、活動中盤には<造形表現>を行う幼児の数が増加している。このことから、幼児は牛乳パックピースとの関わりに自分なりの面白さを既に見いだし、各々がやりたいこと(目的)に向かった可能性が考えられた。そして、Bクラスと比較すると、牛乳パックピースとの関わりの比率も低い。これは、本材料が特別なものではなく他の玩具や材料と同等の扱いとなったことが理由だとも考えられる。Aクラスの幼児にとって、牛乳パックピースは「自由な関わり方から面白さを模索する材料」と捉えられていることが推察された。

一方、Bクラスでは、保育者と離れた場所でも「積んで遊ぶ<構成遊び>」が行われ、活動終盤まで約半数の幼児が「積んで遊ぶ<構成遊び>」を行った。翌日以降も、角を合わせて積む、数本を並べて安定させて積む、山型に下段を広くして積むなどの積み方を工夫する姿が見られ、「牛乳パック=積んで遊ぶ」という概念が形成されていることが推察された。Bクラスの幼児にとって、実践での保育者の行為は、遊び方の教示であったと考えられた。そして、保育者の行為を模倣することで、積んで遊ぶことのできる「材料の特性」に興味を持ったといえよう。したがって、Bクラスの幼児にとって、牛乳パックピースは「保育者の行為の模倣から、新たな面白さを見いだす材料」と捉えられたことが推察された。

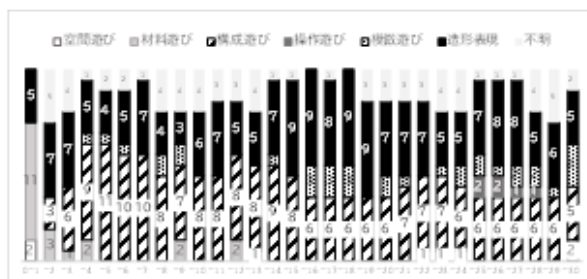


図2:Aクラス幼児の行為の推移(1分毎)

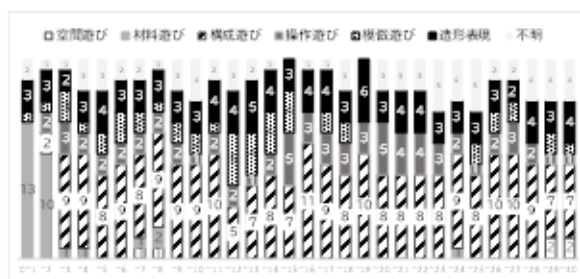


図3:Bクラス幼児の行為の推移(1分毎)

【学科名またはコース名】幼児教育学科 【職名】講師 【氏名】小槻 智彩

【研究の題目】 幼児の日常生活における約束

【研究の概要】 幼児期の約束における発達的变化を行動面から質的に検討することを目的として、観察研究を実施した。

問題と目的

約束は対人関係において信頼に関わる重要な要因であり、幼児は約束の履行を通じて相手を信頼できるかどうかを判断する。幼児期における約束の理解と履行は、信頼関係の構築や社会性の発達に影響を及ぼすため、発達心理学的に重要な研究テーマである。先行研究では、約束の理解や履行判断の発達の変化が量的に検討されてきたが、日常生活において幼児がどのように約束を交わしているかについての質的研究は不足している。本研究では、幼稚園児を対象に行動観察を行い、幼児が日常生活で行う約束の特徴を質的に検討することを目的とした。

方法

幼稚園に通う年少児(44名)、年中児(39名)、年長児(46名)を対象に、2023年10月から11月にかけて計11回の観察を実施した。午前中の自由選択活動時間における相互交渉場面をデジタルビデオカメラで撮影し、約束が含まれるエピソードを抽出・分析した。

結果

15のエピソードが抽出され、学年ごとに、「約束の内容」及び「約束が行われた状況」に焦点を当て、質的な違いを検討した。その結果、幼稚園児の日常生活における約束には、学年による質的差異が見られることが明らかとなった。年少児の約束は、主に玩具や遊具の貸し借り、交代に関するものであった。ルールに従った発話が中心で、協同的な遊びにつながることは少なかった。年中児・年長児では、友達同士の遊びに関連した約束が増加するとともに、未来の出来事に関する約束が見られ、内容がより複雑化する傾向があった。

考察

本研究の結果から、幼稚園児の日常生活における約束には学年ごとの質的差異があり、実生活で他者と交わす約束は、認知機能の発達が基盤となっていることが示唆された。幼児の日常生活における約束を行動面から質的に検討した研究はこれまでにほとんどなく、本研究は学年差を明らかにした点で学術的意義を持つ。また、幼児が日常生活で交わす約束の頻度が少ない可能性を考慮すると、本研究で収集された約束のデータは希少性の高いものである。さらに、本研究の結果は、幼児教育・保育実践に対しても重要な示唆を与えるものと考えられる。

上記の研究については、以下の論文にて報告した。

小槻 智彩・狗巻 修司(2025). 幼稚園児の日常生活における約束:行動観察による質的検討 長崎女子短期大学紀要, 50, 20-29.

【その他】

上記の研究に加えて、以下の論文および図書の執筆を行った。

- ・ 狗巻 修司・小槻 智彩(2025). 養育者との相互交渉における支持的共同関与の発達的变化 人間文化総合科学研究 科年報(奈良女子大学大学院), 40, 39-50.
- ・ 小槻 智彩(2025). 子育てを取り巻く社会的状況 立花 直樹・津田 尚子(監修) 要 正子・小山 顕・國田 祥子・高橋 千香子(編) こどもまんなか社会に活かす「子ども家庭支援の心理学」 晃洋書房(印刷中)
- ・ 小槻 智彩(2025). J-POP の想起に関する実験的検討—楽曲の構造に着目して— 木村 武史(編著) 科学からみた人間と生活のあり方—科学・技術研究からのアンソロジー—(pp.135-148) ユニオンプレス
※過去の研究論文がアンソロジーにまとめられたもの

令和6年度(2024年度)研究活動報告書

【学科名またはコース名】ビジネス・医療秘書コース 【職名】特別基幹講師 【氏名】江頭 万里子

【研究の題目】 就業力向上に取り組むゼミ活動について(実践報告)

【研究の概要】

現在、高等教育機関では、「何を教えたか」よりも「何を学び、何を身に付けることができたのか」が問われている。ビジネス・医療秘書コース(以後、本コース)ゼミナールの授業の主題は、1. 客観的なデータや根拠に基づく論理的な思考力と問題発見・問題解決力、効果的なプレゼンテーション力を身に付ける。 2. 地域への奉仕活動と学習活動を統合させたコミュニティ・サービス・ラーニングを実施し、地域交流・地域貢献に寄与する。となっている。筆者が担当するゼミでは、電話応対に着目して「就業力向上による地元企業への貢献」をテーマに活動を行った。この活動における学生の学びについて報告する。

テーマ : 「就業力向上による地元企業への貢献」

活動期間 : 1年生後期(令和5年後期)から2年生前期(令和6年前期)まで ゼミ生数:5名

活動目的:①自身の電話応対スキルを向上させ地元企業に貢献する。②本コースの学生の電話応対スキル向上に寄与する。

活動方法:①自身の電話応対のスキルを磨き電話応対コンクールに挑戦する。②書籍などから情報収集した電話応対についての基本的な知識をまとめた小冊子と電話応対の練習のための動画を作成し、コースの学生に配布する。

活動の目標:①電話応対コンクールの予選を通過する。②小冊子と動画に満足してもらい活用してもらう。

1年生後期の活動・・・()内は、学生に求められる能力

1. 若者の電話応対に対する苦手意識についてネット検索して既存の調査結果を調べ、併せて本コースの学生の電話応対に対する不安とその要因についてのアンケート調査(以後、学内調査)を実施して、テーマの妥当性を検証した。(客観的なデータや根拠に基づく論理的な思考力と問題発見力・情報収集力)

2. 小冊子、動画作成の準備(計画力・実行力・コミュニケーション力・情報収集力・主体的に学ぶ力・問題発見力)

①長崎市内3社(内2社はコールセンター)を訪問し、電話応対を仕事としている方へ電話応対の仕事に対する心構え等についてインタビュー調査を行った。

②秘書実務の授業内容に加え書籍・ネット等からの電話応対に関する知識や学内調査から分かったコースの学生の電話応対に対する不安要因を考慮して、冊子に掲載する内容について検討した。

③電話を受けながらメモすることに対する学生の不安を解消するため、受け手の相槌に着目し「相槌を打てば、打たない場合よりも5W3Hを押さえてメモをとることができる」と仮説を立てて実験を行ったが、相槌の有無とメモの記述の項目の数に有意な差は見られなかったため、この問題は先に進めることはできなかった。

2年生前期の活動

1. 小冊子と動画の作成(文書作成力、問題発見力、問題解決力、チームワーク、動画作成のためのPCスキル)

書籍等から収集した電話応対の基本的な知識と敬語(学生の不安要因の一つ)、接遇用語、電話応対の例、訪問インタビューで得た知識等をまとめた小冊子と名指し人が不在時の3つの場面を想定した電話応対の練習動画を作成し、コースの学生に配布し、満足度を調査した。概ね満足という回答を得た。

2. 電話応対コンクールへの挑戦(傾聴力、創造力、忍耐力、自己調整力)

問題の発表(4月)、日本電信電話ユーザ協会主催チャレンジセミナーへ参加(5月)、同フォローアップセミナー参加(6月)、長崎県中小企業家同友会の会員の方の参加をいただきゼミ内発表会(6月)、一次予選(録音審査、7月)、長崎県本大会(9月)。結果は、全員予選を通過し、県本大会は体調不良などのため3名が棄権、2名が出場し、内1名審査員特別賞を受賞した。問題発表後、自宅練習に加え、ゼミの時間外に2班に分かれ短大で毎週1回自主練習(90分)を行った。1週交替で教員も各班の練習に同席した。

3. ゼミナール発表会でパワーポイントを使って活動の報告を行った。(効果的なプレゼンテーション力)

*電話応対コンクールは、(公)日本電信電話ユーザ協会主催のコンクールであり、各企業の社員の電話応対と応対技能のレベルアップを通じて、顧客満足経営の推進を図るための人材育成を目的として毎年実施されるもので、日常的に仕事で電話応対をしている社会人とスキルを競うことになる。令和6年度のテーマは「伝えて、聴いて、つむぐ信頼」であり、カタログ販売会社のスタッフとして、見積書の作成方法を尋ねる電話をかけてきたお客様に答える問題であった。

まとめ

ゼミナール活動を通して、学生は、科目の主題である客観的なデータや根拠に基づく論理的な思考力と問題発見・問題解決力、効果的なプレゼンテーション力の他に上に挙げる計画力、実行力、コミュニケーション力、情報収集力、主体的に学ぶ力、文書作成力、チームワーク、動画作成のためのPCスキル、傾聴力、創造力、忍耐力、自己調整力を磨いた。今回挑戦した電話応対コンクールの問題に正解はない。電話をかけてきたお客に分かりやすく見積書の作成方法を伝えるだけでなく、相手の要望を聴き出し、自社のサービス内容と照らし合わせ相手に有効な情報を3分間という時間制限の中で提供しなければならない。どのような説明の仕方、聴き出し方、提案の仕方、話し方がよいのかを考え、試行錯誤を繰り返し、時にはうまく行かず涙しながら練習を重ねて行った。長崎県本大会に参加した2人はゼミ終了後の夏休み期間中も、応対を改良しながら練習に励み、コミュニケーション力、問題解決力、忍耐力を磨き、大会終了後のアンケート(記述式)には、コンクールを通して、問題解決力、最後までやり抜く力を身に付けたと答えた。

【学科名またはコース名】栄養士コース 【職名】助教 【氏名】太田 智子

【研究の題目】 災害時の栄養課題と備えについて―過去の災害から考える―

【研究の概要】

1. はじめに

日本は昔から地震や台風、大雨などの自然災害に見舞われてきた。阪神・淡路大震災以降、東日本大震災、能登半島地震などの大規模災害が頻発している。避難生活では、食料の確保や栄養バランスのとれた食事が難しくなることが多い。栄養不良は体力やストレス耐性の低下、慢性疾患の悪化の原因となり、ひいては災害関連死に引き起こす可能性のある重大な問題である。被災地における食事の特徴として、エネルギー源であるおにぎりやパン、即席めんなどが中心であり、肉、魚、乳製品および野菜などの生鮮食品が不足する傾向にある。被災状況により異なるが、大規模災害では食事や栄養に関する課題が中長期にわたることも多く、栄養課題の長期化および悪化が懸念される。また、時間の経過によって課題が変化するため、課題解消にむけた臨機応変な対応が求められる。

2. フェーズに応じた食支援

発災後に想定される健康・栄養面の課題は、フェーズによって異なる。まず最優先されるのは、生命維持のための最低限の水分とエネルギーの確保である。水分不足は脱水症や熱中症、エコノミークラス症候群など生命にかかわるリスクが高くなるため、十分な水分摂取が推奨される。また、エネルギーを確保することで体力を維持する。フェーズ0とフェーズ1では、栄養不足および欠乏症対策を優先して行う必要がある。フェーズ2以降はエネルギー過剰や栄養素不足への対応、慢性疾患の管理が必要となる。この時期には活動量の低下によるエネルギー過多や、たんぱく質・ビタミン・ミネラル不足などの栄養課題が想定される。このような栄養課題に対応すべく、厚生労働省は発災1か月後にエネルギー、たんぱく質、ビタミンB₁およびB₂、ビタミンCの5項目について参照量を示し、3ヵ月後にはカルシウム、ビタミンA、鉄、ナトリウム(食塩)を追加した。これに基づき、行政管理栄養士等は避難所の食環境を考慮して柔軟に対応していく。また、食事提供のほか栄養相談や健康教育によって被災者の自立支援を促すことも食支援のひとつである。フェーズ4では避難所以外で生活する被災者が増え、行政による被災者の栄養状態の把握が困難になるため、栄養相談や健康教育は非常に重要な役割を持つ。

3. 備蓄食品の重要性

過去の災害では、発災からライフラインの復旧までに1週間以上を要したケースが多く、支援物資の供給や店舗での食品入手が困難であったと考えられる。避難所では必ずしも食品を手に入れるとは限らないため、平時から食品を備蓄することはたいへん有用である。農林水産省によると、最低でも3日間、できれば1週間分の水と食品を家庭に備蓄しておくのが望ましいとしている。「令和元年国民健康・栄養調査」の結果から、災害への備えは重要だと認識しているものの、実際に取り組んでいる人は少ないことがと推察された。最も重要なのは水であり、飲用と調理用を含めて1人1日3リットル以上必要である。食品は主食・主菜・副菜を意識してそろえると食品の種類が増え、エネルギーと栄養素を確保することができる。さらに、不足しがちな栄養素を意識して食品を備蓄しておくことで栄養の過不足を防ぐことができるかもしれない。備蓄食品はエネルギーや栄養素の補給が主な目的ではあるが、災害という非日常において温かな食事や食べなれた味があれば、安心感や前向きな思考を与えることもできる。今後は実際に食品備蓄に取り組む人を増やす方策を検討する必要がある。

4. まとめ

大規模災害時には、栄養の過不足や栄養バランスの悪化など、食事を要因とするさまざまな栄養課題が生じる。避難生活の長期化は栄養課題を悪化させ、体調不良や慢性疾患の悪化を引き起こすこともあるため、栄養管理をはじめとする栄養・食生活支援は大きな役割を持つと言える。ただ、行政の支援に頼るだけでなく、各家庭が自分たちに合った必要最低限の飲料水や食料品を備蓄しておくことも非常に重要である。

